ISSN 2187-1833

京都市学校歴史博物館研究紀要

第 8 号

目　次

はじめに　研究紀要第八号の発刊に当たって　宮前 昭宏 (1)

研究論文　学校内歴史資料室についての調査結果と所見
——全京都市立小学校を対象としたアンケート調査——
村野 正景　和崎 光太郎　林 潤平 (3)

展覧会報告・研究動向
番組小学校研究の現状と辻ミチ子氏の研究が残したもの
——番組小学校創設 150 周年特別展を終えて——
林 潤平 (19)

研究ノート　京都郡中小学校に関する基本情報のデータベース化 その一
——『学校記念誌』記載内容を中心として——
小辻 映里　林 潤平 (27)

令和 3 (2021) 年 6 月

京都市学校歴史博物館

研究紀要第八号の発刊に当たって

京都市学校歴史博物館では、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、感染予防対策を徹底した上で開館してきたが、これまで多くの講演会、講座・教室等の事業が中止を余儀なくされ、来館者も例年に比べて大幅に減少するなど、当館の運営にもこれまでになく大きな影響が及ぼされた。一方、この間においても、資料調査等の研究、来館者や様々な問合せへの対応、展示や講演会を通じた情報発信等の業務は続けてきており、これらの蓄積の一端を本紀要において紹介することで、研究者の研究活動や市民の生涯学習に少しでも資すれば幸いである。

本紀要においては、教育史の分野から三本の論文を掲載した。まず、京都文化博物館・村野正景氏、東京福祉大学・和崎光太郎氏、当館学芸員・林潤平の共同執筆による「学校内歴史資料室についての調査結果と所見」は、学校資料をどのように保存・活用・継承できるか、という当館の重要な命題にも関わるテーマであり、平成二九年に京都市立小学校全校を対象に行った当館のアンケート調査をもとにした分析が行われている。学校資料については、これまでから様々な研究者による研究が進められてきた分野であり、当館においても今後更なる調査・研究を深めていくことが必要である。

次に、林学芸員による「番組小学校研究の現状と辻ミチコ氏の研究が残したもの――番組小学校創設一五〇周年特別展を終えて――」は、辻ミチコ氏の研究業績とその意義を論じ、今後の番組小学校研究に向けた示唆を与えるものである。番組小学校設立の際の町衆の奮闘については多くの人が知るところであるが、地域との関わりについての実証的な研究成果について改めて明らかにされたものであり興味深い。更に多様な観点からの研究の深化を期待する。

最後が、当館職員・小辻映里と林学芸員による、「京都郡中小学校に関する基本情報のデータベース化　その一」である。郡中小学校は、番組小学校開校当時「市中」と呼ばれた現在の市内中心部に対し、その周辺部である「郡中」で設立・運営された小学校のことであり、これら郡中小学校に関しては、先行的な研究がほとんど存在しないことから、基本情報のデータベース化に着手し、今後の本格的な調査研究に備えるものである。

さて、一昨年（令和元年）の番組小学校創設一五〇周年に続き、令和四年には、番組小学校の開校から数年後にその影響を強く受ける形で創設された「郡中小学校」の多くが一五〇年の節目を迎えることになる。今後、該当校の調査や企画展に向けた準備を精力的に進め、先人たちが教育にかけた英知と情熱、地域と学校がともに育ててきた人づくりの系譜について、多くの方々に発信できるよう更に工夫してまいりたい。

今号が今後の博物館での教育活動に少しでも寄与出来れば、幸甚至極である。

京都市学校歴史博物館事務局長　宮前　昭宏

学校内歴史資料室についての調査結果と所見

――全京都市立小学校を対象としたアンケート調査――

村野 正景・和崎 光太郎・林 潤平

一．学校内歴史資料室の調査の目的

学校の歩みを語るかけがえのない学校資料をどのように保存・活用・継承できるか。筆者らはこの問いに対して、学校資料の保存と活用に取り組む一方で、多くの方々と協力しながら学校資料活用ハンドブックを刊行したり、公開シンポジウムを開催したりと、実践的回答に向けた複数の活動をおこなってきた（村野・和崎二〇一九、和崎・村野二〇二〇など）。その活動の一環として、資料だけではなく、それが所在する場の理解を進める必要性を感じ、その一歩として実施したのが、本稿で紹介する調査である。対比的に捉えるならば、いわば動産としての資料の調査に対し、不動産に関する調査という位置づけになろう。

もちろん、筆者らにとっての一歩は、学校内歴史資料室の研究がいま始まったことを意味しない。学校内歴史資料室は、戦前や戦後すぐに博物館界等で積極的に取り上げられていた「学校博物館」（村野二〇一九）にほぼ相当する。博物館学の教科書でも頻繁に言及され、博物館研究者や学芸員さらに学校教員によって、そのあり方が議論されて、事例報告も多かった。当時は各学校設置の「学校博物館」について詳しい情報を知ることができただろう。しかし近年では、博物館法で「学校博物館」が登録博物館の条件から除外されたこともあってか、「学校博物館」は博物館界で議論されることは次第に少なくなり、現在はその有無にかかる情報ですら十分把握できていない。

ところが一方で、横浜市のように「学校博物館」の設置や再整備が進んでいる自治体もあり（羽毛田二〇一九）、京都市でも個別に設置事例をうかがっていた（村野二〇一五b、村野二〇二〇など）。つまり、博物館側で見えなくなっていても、学校側では着実に実績を積んでいた。そしてそれは、学校資料の保存・活用の一つの貴重なモデルになる可能性があり、学ぶべきことは多いと考えるに至った。

そこで、以上を踏まえて、この基礎的調査では、京都市立小学校内に設置されている歴史資料室に焦点をあて、まずはその概要を把握することを試みた。調査・執筆にあたっては、主に調査を和崎が実施し、本文を村野が執筆、「四」の今後の課題は村野・林・和崎が分担執筆し、注はすべて和崎が付けた。ただし、これらはあくまで主な分担であり、筆者三名で全文を推敲している。

なお学校内歴史資料室は、上述の「学校博物館」のほか、郷土室や記念室など名称はさまざまである。そこで、ひとまず、学校の資料にかかわらず、古いものが集められている部屋として、調査の際に説明することとした。以下、その調査の手法について略述することからはじめたい。

二．調査の手法

本調査は京都市学校歴史博物館の学芸員と博物館主事が主体となった調査であり、質問票を作成・配布し、それに回答してもらう、いわゆるアンケート調査の手法をとった。配布した依頼文と質問票は図1の通りである。また具体的な対象や時期などは以下の通りである。

対象：全京都市立小学校（配布数：計一六四校）
調査時期：平成二九（二〇一七）年六月一八日～八月一〇日

手法：自記式。質問票は学校長宛に送信し、記入の上、回答票を教育委員会内のイントラネット上のシステムで返信してもらった。

手法について詳述しておこう。質問票は「学校内歴史資料室等の有効活用並びに学校歴史博物館との協力事業に関する調査アンケート」と題し、京都市学校歴史博物館から学校長宛で送信し、回答をお願いした。質問票送信にあたって、事前に市立小学校の支部長会[一]で教育史担当学芸員と博物館主事が質問票のねらい等を説明し、各支部の代表校長を通して全校長にこの説明内容が行きわたるようにした。博物館主事が元小学校長で、校長会の副会長も歴任していたことが、支部長会でのより深い理解をうながし、質問票調査のスムースな実施につながった。また設問を厳選し、回答は選択方式と自由記述方式を併用することで、回答する教員の負担をできるだけ軽減することを考慮した。

三．調査の結果について

三―（一）．得られたデータと注意点

この調査では結果として、回収率が一〇〇％（一六四／一六四）、そして有効回答率も一〇〇％（一六四／六四）と、母集団そのもののデータが得られた。その意味で、たいへん信頼性の高いデータとなった。これは支部校長会での説明など事前の準備に成功の秘訣があると考えられ[二]、また回答する教員（主に教頭または副校長）の労働環境をよく理解した質問票作りも功を奏したであろう。なお回答の締め切り直前に全一六四校のうち、四校から電話で回答を受けたが、設問の選択肢から回答を選んでいるため、データの信頼性に関わるものではないと判断している。

ただし注意点はある。設問への回答方式は自記式であって回答者の認識が直接示されているがゆえに、後述のように、例えば考古学者からみれば考古遺物ではない模型が回答者には考古資料として認識されて回答されている可能性も含む。その意味で、それぞれの研究者が学術用語として指し示す範囲と、本調査の回答にズレが生じている場合もある。そうしたズレは他にも生じている可能性もあり、その意味で、あくまで本調査の結果は、学校の回答者の認識を示したデータとして理解しておく必要がある。今後、例えば考古資料なのかそうでないかは、その専門家の実地調査によって明らかにしていくことが必要だろう。

また質問票の設問は選択式と自由記述方式を併記しているが、自由記述方式のほうが一般的に記入は少なく、その意味で、回答に偏りが生じている可能性はある。具体的な偏りについては、個別の回答結果にて検討したい。

以上を踏まえた上で、次に個別の設問に対する回答結果を検討していこう。

三―（二）．各設問に対する回答結果

●設問1．学校内に歴史資料室があるかないか（図2）

最初の問いは、学校内歴史資料室の有無である。結果として、学校内に歴史資料室が「ある」と回答した学校は一〇五校（六四・〇％）だった。また有無を選択しない無選択校が三八校あったが、無選択校は全て自由解答欄に状況を記述していた。それによれば、廊下や図書室等に保管・展示していると回答した学校が七校あった。したがって、この事例を含めれば、一一二校（六八・三％）に歴史資料室および関連機能をもつ場所が存在することになる。

なお同じく無選択校で、現在歴史資料室をもたないけれども、将来的に設置を検討していると記述した学校が六校あった。

一 全市立小学校が一六の支部に分けられており、支部長会には各支部の代表校長が集まる。全小学校長が集まる小学校長会とは別。

二 加えて、支部校長会の前に、各支部の代表校長に、電話で調査概要および調査協力のお願いを伝えてある。

これに対して、資料室が「ない」と回答した学校は二一校で、ほとんどが今後の設置について自由記述欄への記入がない。記入があっても、将来的にも設置を考えていない、または現状では困難という回答であった。さらに資料室が「ない」という回答とほぼ同じ内容と判断できるのが、無選択校のうち、現在設置がなく、将来的な設置も考えていないと自由記述欄に記入する学校である。それは二五校あった。したがって、現状で資料室および関連施設が存在しない学校数は五二校（三一・七％）となる。このうち、前述のとおり、六校は将来的な設置も検討しているので、それらを除けば設置されておらず、将来的にも設置が困難と考えている学校は、四六校（二八・〇％）と考えられる。

以上の結果をまとめれば、実に六割以上の小学校に資料室が設置されており、関連設備をもつ、および将来的に検討している学校を含めると七割以上（七二・〇％）となることが判明した。

●設問2．資料室の名称

設問2以降の問いへの回答の検討はすべて、歴史資料室をもつと答えた一〇五校が対象となる。まず設問2は資料室の名称についてである。結果として、名称「なし」の二校、無回答の一校を除く、一〇二校で何らかの名称をもつと回答があった。

その名称は多彩であるが、最多は「郷土資料室」で二九校（二八・二％）を数え、これだけで四分の一以上を占める。これと類似するのが、「郷土室」二校、「ふるさとルーム」二校（うち一校は「地域教育資料室」と併記）、「郷土学習資料室」一校、「郷土社会資料室」一校、「社会郷土資料室」一校、「郷土資料コーナー」一校、「昔の道具」一校、「農機具資料室」一校と思われる。筆者の実地調査経験を踏まえれば、これらは身近な地域に関する教育での利用を一義的には目指したものと思われ、教員や児童、場合によっては地域住民などの利用を想定した部屋と思われる。

名称の数で次点は「資料室」（一校のみ、「資料室・ＰＴＡ室」と併記あり）で二〇校（一九・四％）だった。他にも「社会科資料室」五校、「教材資料室」三校、「歴史資料室」三校などと資料室という名称を含む場合がある。ただし「社会科資料室」や「教材資料室」は、「教材室」二校や「教具室」一校と同様に、教員が教材研究をしたり、教具を保管しておいたりする意味合いが強いとみられ、基本的には教員用の部屋であろう。「資料室」という名称の部屋には、前述の教員以外の利用を見越した場合と、基本的には教員用の場合との二つが含まれていると思われる。

なお名称数一位の「郷土資料室」と二位の「資料室」が二〇校以上で採用がみられた名称であったが、第三位は「記念室」で七校が採用していた。類似の名称として、「メモリアルルーム」二校、「追憶の部屋」一校、「おもいではくぶつかん」一校がある。管見の限り、学校の沿革を語る資料や統廃合対象となった各学校にかかわる資料が収蔵されている。したがって授業用の部屋というよりも、来校者に学校の歴史を見せたり、周年事業などで公開したりといった役割をもっていることが多いようだ。特に学校統廃合により誕生した小学校では、元校舎から移されてきた学校資料が学校別に展示されていることがあり、これらの「記念室」は京都市に限らず全国的な学校統廃合による学校資料の散逸・廃棄を食い止める手掛かりとなり得る[三]。

このほか、「リファレンス・ライブラリー」一校、「歴史学習室」一校、「体験教室」一校は、児童の利用を強く念頭においたと考えられる施設名となっている。一方で「応接室」一校、「生活科ルーム」一校、「ふれあいホール」一校は、資料を保管・展示するという目的が主ではなく、別の目的をもった既存の施設名をそのまま用いている。おそらくはそれぞれの部屋の一部を資料の保管に用いているという意味であろう。

三 例えば、小学校二校と中学校一校の統合校（施設一体型小中一貫校）である浜松市立浜松中部学園のメモリアルホールなど（和崎光太郎・村野正景編二〇二〇）、京都市立学校を参考にしたわけではないが同様の実践が全国でなされていると思われ、このタイプの「記念室」の設置・運営に関する集合知の結実が待たれる。

ところで以上の名称は、どちらかといえば一般名詞を用いたものであったが、これに対して固有名詞、つまり学校や地域名を冠したり、独自の名称をつけたりする学校が一一校もある。いずれも資料数が多く、その整理も進んでおり、学校や地域[四]が比較的力を入れて設置したものと思われる。それが学校名などを冠した所以であろう。

●設問3．資料室の設置時期（図3）

資料室があると回答した一〇五校のうち、設置時期の情報があるのは六〇校（五七・一％）で、不明が四三校、無回答は二校であった。不明と無回答あわせて四五校（四二・九％）にも及び、情報の継承の難しさを示している。

設置時期情報をもつ学校の回答の内訳は、昭和五四（一九七九）年以前が八校、昭和五五（一九八〇）年～平成元（一九八九）年が九校、平成二（一九九〇）年～平成一一（一九九九）年が二〇校、平成一二（二〇〇〇）年以降が二三校であった。昭和期に設置された資料室があわせて一七校もあり、三〇年以上の長い歴史をもつことがわかる。

一方、この数値をそのまま受け止めれば、時代を経るごとに設置数が多くなっているようにみえる。ただしだからといって、京都市内の小学校に歴史資料室が次第に浸透していった、あるいは学校が歴史資料室の意義を認めていったと安易に捉えることには躊躇がある。その理由の一つは、質問票で、ほぼ一〇年ごとに単純に区切った年代を選択させる方式をとったために、見かけ上、時代を経るごとに数値が増えた可能性があることである。一〇年間平均的に設置が進んだのではなく、実際はもうすこし出現年に偏りがあるかもしれない。

もう一つの理由は、余裕教室にかかわるものである。日本の公立小学校は昭和五六（一九八一）年を境に児童数が減少に転ずる。その結果、余裕教室が生まれ、それを転用して学校内歴史資料室とする事例が増えていく。一九九〇年代には、平成五（一九九二）年に文部省が示した「余裕教室活用指針」で「郷土資料室」の設置・活用を奨励したこともあって、学校内歴史資料室等の設置が顕著になった。しかし平成一八（二〇〇六）年には「郷土資料室」の事例は余裕教室活用事例集に掲載がなくなっている。

京都市内の小学校も一九九〇年代に設置が増えており、余裕教室増加に加え、文部省の指針の影響があったのかもしれない。ただし上記のように文部省の指針は一〇年幅での区切りと少々ズレがあるので、その指針との関係を質問票の選択肢では捉えきれていない。また二〇〇〇年以降にも設置数が増加していることは、指針とは異なる動向として特徴的かもしれない。他にも検討すべき点は多く、設置年代については、もう少し実地調査を経て検討する必要があるだろう。

●設問4．設置の主導者（図4・5）

学校内歴史資料室の設置を主導したのは誰だったのか。当然、学校という答えが多いことが想定されるだろう。実際の回答でも、単純集計（図4）すると、学校主導が八六校（八一・九％）を数えた。次点は地域主導で三三校（三一・四％）、以降、ＰＴＡと学校運営協議会がそれぞれ四校（三・八％）、その他一校（一・〇％）、不明が一三校（一二・四％）であった。

ただし本設問は複数回答可であり、学校内歴史資料室の設置の主導者を全て選ぶことができる。そこでその回答の組み合わせを調べると（図5）、学校が単独で主導したのは五八校（五五・二％）となる。また地域のみ単独で主導して設置した事例は六校（五・七％）であった。学校単独主導は依然として大半を占めるが、学校単独・地域単独のいずれも単純集計の値より下がり、他の主導された「番組」にもち、独特である（和崎二〇一八）。このような学区のあり方は、明治後半期以降に京都市域が拡大するにともない、嵯峨、北白川、山科、伏見などの新京都市域にも適用されていった。

四 京都市内における「地域」とは、主に自治連合会や学区社会福祉協議会などの学区別の組織、またはその構成員のことを指す。京都市内における学区は、単なる通学域（校区）ではなく、ルーツを明治二（一八六九）年に創設

者と共同して設置したことがうかがわれる。

学校がそれ以外のほかの主導者と共に設置にあたったのは二八校(二六・七%)あった。ほかの主導者を含む組み合わせとして、最多は学校と地域の二者の組み合わせで二一校(二〇・〇%)、次に学校・地域・PTA・学校運営協議会、および学校・地域・PTAの組み合わせがそれぞれ二校(一・九%)、学校・地域・学校運営協議会および学校・地域・その他の組み合わせが一校(一・〇%)ずつであった。いずれの場合も学校と地域が含まれていて、地域との協働作業が比較的多い(二七校、二五・七%)ことがわかる。学校が地域を除いて組んだ事例は一校のみ(一・〇%)で、学校と学校運営協議会の二者が主導した事例であった。

以上をまとめると、学校単独主導が五八校(五五・二%)、学校と地域二者の主導が二一校(二〇・〇%)、学校と地域に加えて他の組織も主導したのが六校(五・七%)、地域単独主導が六校(五・七%)、学校と学校運営協議会の二者主導が一校(一・〇%)、不明一三校(一二・四%)であった。概していえば、学校内歴史資料室設置の契機は学校独自の場合が約半数あるものの、残りの多くで地域が関わって資料室設置に動いていったことがわかる。

●設問5. 資料室の現在の活用・管理主体(図6・7)

上述の設問4が学校内歴史資料室の設置時点の主導者は誰かを問うものであるのに対して、本設問は、現在の時点で、資料室を活用・管理している者は誰かを問うたものである。まず単純集計(図6)では、学校主導が一〇五校(一〇〇%)、地域が一二校(一一・四%)、学校運営協議会五校(四・八%)、PTAが二校(一・九%)、その他一校(一・〇%)であった。全ての小学校で資料室を学校が管理していることがわかる。

組み合わせを見ても(図7)、学校単独が九〇校(八五・七%)、学校・地域が九校(八・六%)、学校・学校運営協議会が二校(一・九%)、学校・地域・学校運営協議会が二校(一・九%)、学校・地域・PTA・学校運営協議会が一校(一・〇%)、学校・PTA・その他が一校(一・〇%)であった。

設置時に地域などが関わっている割合に対して、現在の活用・管理はほぼ学校単独の割合が高くなっている。ただし、学校運営協議会や地域が活用・管理を学校と共に担っていると回答した学校も全体の約一割はあった。筆者の調査では、このような学校運営協議会や地域が学校内歴史資料室内の資料整理や資料室公開時の対応を受け持っている例は一定数みられた。今回のアンケート調査では、常時の管理・活用を意味すると回答者が捉えて「学校主導」が回答として選択されたかもしれないが、臨時のあるいは不定期の対応も問えば、もっと「学校主導」以外の回答も選択された可能性はあるだろう。

●設問6. 資料室の現在の活用場面(図8・9)

ここでは現在、学校内歴史資料室をどのように活用しているかについて、選択式および自由記述方式を併用して回答を求めた。まず単純集計(図8)では、「三年生の社会科学習」九三校(八八・六%)、「総合的な学習の時間」四四校(四一・九%)、「その他」一九校(一八・一%)となった。なお「その他」のうち、三校(二・九%)は活用していないという回答だった。したがって、何らかの形で活用しているのは一〇二校(九七・一%)となり、とくに「三年生の社会科学習」は九割以上の学校で資料室を活用する機会となっていることがわかる。

また組み合わせ(図9)では、「三年生の社会科学習(以下、社会科学習)」単独が四八校(四五・七%)、「社会科学習」・「総合的な学習の時間」で三四校(三二・四%)、「社会科学習」・「総合的な学習の時間」・「その他」で六校(五・七%)、「社会科学習」・「その他」で五校(四・八%)、「総合的な学習の時間」単独で四校(三・八%)、「その他」八校(七・六%)となった。社会科学習を中心としつつも、半数近い学校では複数の機会を利用して資料室を活用している状況がわかる。

その複数の機会の具体的なありようは、「その他」の自由記述から一端をうかがえる。まず「六年生の社会科学習」「二年生の生活科」「一年生・二年生の学校探検」「六年生の学校長との給食」「クラブ活動」「作品展」とあり、各教科の

ほか教科外活動でも用いられていることがわかる。学校長との給食は、いつもの教室と違う特別な雰囲気を学校内歴史資料室が演出しているように想像でき、興味深い。また作品展は、児童が展示品の説明をしたり、体験学習をしたりする場となっており、学校外への開放も意図された活用法である。実際に「地域への一般開放」さらに「児童・保護者、地域の方々に学校や地域の歴史や歩みを知っていただくために常時開設している」という活用例もみられた。加えて「他校三年生の社会見学の受け入れ」「卒業生が調べ学習や調査で活用している」「大学生の研究資料等」というように、学外から資料室の資料を調べに来るという活用例もあった。開放するだけでも、受け入れ体制の整備がたいへんなことと推測するが、学外から調べに来るということは、資料室の所在資料の情報が学外へもある意味普及できていることを示し、一般の地域博物館に通ずる役割を果たしているとも評価できるだろう。一方で、「記念誌やトロフィーなどが置いてある」として「学習での活用を考えていない」との回答もあり、あくまで資料の保管ないし陳列に重点をおいた学校もあることがわかる。

●設問7．資料室にある資料（図10）

この問いでは、学校内歴史資料室にどのような資料があるかを選択式および自由記述式を併用して回答を求めた。なお念のため確認しておくと、資料室のある全ての小学校で何らかの資料を保管しており、資料室がありながら何も持っていないという回答は皆無であった。以下の数値も比率は資料室のある学校（一〇五校）を母数とした。また資料室を持たないという学校で、資料があると答えた学校も皆無であった。

単純集計の結果は、「地域の産業（農業）に関するもの」七四校（七〇・五％）、「昔の写真」五八校（五五・二％）、「昔の教材・教具（教科書以外）」四八校（四五・七％）、「考古資料（埴輪等）」三二校（二九・五％）、「昔の教科書」二七校（二五・七％）、「学校文書類」一九校（一八・一％）、「学校建築に関するもの」一六校（一五・二％）、「その他」二九校（二七・六％）であった。

「その他」の内訳で最も目立つのは、昔の道具ないし生活用品であり、二一校（二〇・〇％）あった。筆者による調査でも、道具ないし民具をもつ学校はかなり多く、質問票の選択肢にこれも項目立てすれば、もっと数値が上がった可能性すらあると考える。ほかにも「地図」や「楽器」、「統合前の資料」、「トロフィー」などの記述が一校ずつみられたが、統合前の資料以外は、比較的学校でよく見かけるものないし備品類とも言えるものであって、項目立てすればもっと学校数は多くなるだろう。ただし、自由記述に学校が特記した背景には、単なる教材や備品といった以上に、その楽器や地図やトロフィーへの思い入れや物語がある可能性もあり、その学校独自の特徴を示すものかもしれない。

注意が必要なこともある。筆者が学校で調査をおこなっていた際に、教員から「考古資料なのか最近の模型なのか区別がつけられない」と相談されたことがある。これが教員にとって一般的な意見ならば、この質問票で選択された「考古資料（埴輪等）」にも、いわゆる考古学の学術用語が指すところの考古資料以外のものが含まれている可能性がある。実地調査が必要な所以である。

●設問8．資料室の有効利用についての意見

最後の設問では、資料室の有効活用について意見や質問を自由記述してもらった。記入は七校のみで少なかったが、いずれも資料室やそこに保管されている資料について、たいへん重要な意見であった。

まず資料について、①「捨てていいのかわからずに場所を取っています。見る人が見たら貴重なのかもしれません。」、②「大変古く貴重な資料がありますので、一度、学芸員の方に鑑定に来ていただきたく思っています。」という記述があった。いずれも資料について詳しい情報が不足している状況が想定でき、専門家に「鑑定」ないし情報提供が期待されていることがわかる。また③「地域人材活用等により、資料の整理・修繕と授業支援等いただくよう、各校で工夫することが、現存する資料の有効活用につながると考える。」という記述もあり、学芸員や研究者以外の地域におられる多様な人材の活用をうながす意見もある。筆者らも同じアイデアを持っており、こうした共通見解が得られそうな学校と、はやめに協力関係を築き、他校でも応用可能な参照モデルを作ってい

くことは問題解決へ最短距離につながると考える。

同じく資料室についても、④「以前からあった資料室を学校運営協議会で整備していく計画がある。地域の歴史がわかる資料室づくりを考えています。ご協力よろしくお願いします。」、⑤「維持管理について専門的な学芸員の巡回配置を希望します。」という記述がある。専門家への期待があるとともに、より踏み込んで、「巡回配置」という専門家による定期的な協力も提案されている。今後、学校内歴史資料室への訪問を、単発的ではなく、ある程度システマティックに制度的におこなっていくための措置も検討していく必要があることに気づく。もちろん専門家といっても、誰がおこなうのか、どの程度まで関与するのか、実際の手続きはどうするのか、目的をどこに据えるのか（維持管理までか授業や展示利用か）など検討すべき点は多い。

それに、⑥「現在、長寿命化工事を行っています。完成後、新たに郷土資料室として名称を変え、整備する予定です。」という意見の一方、⑦「学習での活用は考えていない。」という意見も他方であり、学校内歴史資料室の性格自体が一様ではない。またその性格も、一つの学校でずっと同じとは限らない。このような多様性や変化にどう対応することができるだろうか。

とはいえ、それほど検討に時間をかけてもいられない。前述の③の文章は次のように続く。「現在は特に手入れする者もおらず、児童にとっても六年間に一度学習で訪れるだけの部屋になっており、資料の経年劣化も目立ち、やがては朽ち果てるのではないかと心配される。」資料の劣化や消失を防ぐにはもはや待った無しの状況で、いますぐ改善したいという意向が読み取れよう。もちろん学校によって状況は異なるものの、このような火急に協力を求める状態にある学校をいちはやく察知するにはどうすればよいかという問いを、この意見は投げかけている。

四．まとめ――成果と課題――

ここまで、アンケート調査の結果を述べてきた。本調査によって、はじめて京都市立小学校の学校内歴史資料室の情報が把握でき、しかもそれが全ての学校から得られたことは、非常に意義がある。京都府や和歌山県での学校所在資料に関する調査（村野二〇一五a、瀬谷二〇一七）では回収率が一〇〇％となっておらず、その意味で本調査がかなり信頼性の高いデータを得たことは評価されてよいだろう。

結果を改めていうと、京都市立小学校のうち、六割以上の学校に学校内歴史資料室が備えられていた。その全てに資料が所在し、資料の保管機能や展示機能をもつ。加えて、学校内にあるがゆえに、大半の資料室が授業で活用がなされ、ほかにも教科外活動での利用があった。中には学外者の受け入れをおこなっているところもあり、学校内にのみ閉じるのではなく、学校外へも開いた機関となっているところもあることがわかった。こうした事実は、現時点でも学校内で資料室を活かす運営がなされている事例が複数あり、今後それらから詳しく学ぶことで、他校でも応用可能な資料室活用モデルを見出せる可能性を十分示していよう。

しかし、専門家や地域の人材に協力を求める学校も確実にあり、しかも早く対応せねば、資料の劣化・消失を防げないかもしれない学校もある。こうした学校へ、学外の博物館学芸員や研究者らが貢献できる可能性は高く、本調査によってまずアプローチすべき学校が浮かび上がってきたことも一つの成果である。

一方で新たな課題も浮かび上がってきた。以下、今後の課題を三点、提示しておこう。

アンケート調査の情報のみから得た印象にすぎないが、設問８の自由記述の意見にあるように専門家や地域の人材の協力を促すアイデアはあったものの、回答からは、学校間の横のつながりという視点が感じられなかった。実際、筆者らのこれまでの学校資料調査や展覧会準備調査、学校と博物館との連携授業、教員向け研修などの際にも、教員は異動するので前任校の事例は個人的に把握しておられても、前任校との間で学校所在資料の活用を企図したり、あるいは他校の事例を自校の参照モデルにしたりといったことができていないと、複数

の教員からお聞きした。横のつながりを阻むのは、まずは教員の多忙さや手続きにかける労力の大きさ、そこまでして資料を用いる教育効果の見えにくさなどにあるのだろうが、それに加えて、学校内歴史資料室に関する情報共有の機会がこれまでなかったことにもあるのではないか。横浜市では、学校内歴史資料室にかかるフォーラムの開催やメールマガジン発行などの取組がおこなわれ、積極的に横のつながりを構築する機会の創出が図られている。したがって、本アンケート調査結果は、一つには学校内歴史資料室に関する全体像の把握に結実したが、それにとどまらず、これをネットワーク構築用のデータベースとして、(情報公開の仕方は慎重な検討が必要であるが)もう一歩進んだ活用をおこなう必要があるだろう。

課題の二つ目は、調査の継続である。このデータベースは、定期的なアップデートによって最善の状態が保持される。そして、その作業を経ることによって、このデータベースが、つながりの構築を促す有力なツールとしての力を持ち続けるだろう。そこで、こうしたアンケートを継続的に実施することも、今後に残された課題と言えるだろう。とくに京都市においては、平成三一／令和元(二〇一九)年に番組小学校創設一五〇周年を迎え、市中心部の各小学校において各種の周年行事が盛大に開催された。しかし、これらのイベントと学校内歴史資料室との双方向的な関係性や、行事に伴う学校内歴史資料室活用の実態把握に関する調査はなされていない[五]。いわば、継続的な調査を実施しなければ、周年行事に際して実践された学校内歴史資料室活用事例や、行事から見えてきた新たな資料室活用法に関する意見、さらには学校資料の活用に費やされた学校と地域の努力を、見逃すことになりかねない。加えて令和四(二〇二二)年は郡中小学校[六]創設一五〇周年にあたり、市内の多くの小学校で、今後順次周年事業の検討が開始されていくと想定される。もしその際に、先行事例と他の学校・地域の実態を把握できていれば、例えば他校・他地域に事例を学びに行く、などという形で、この知見が横のつながりを生み出す直接のきっかけになる可能性もあるだろう。今後の調査の着実な積み重ねによって、学校と地域とをつなぐ一つの有力な回路のあり方が、見えてくるのではないだろうか。

最後の課題は、京都市における学校内歴史資料室調査の成果を他の自治体で活かすことである。京都市では小学校の大規模統廃合が全国的に先駆けて進んだが(一九八〇年代から準備、一九九〇年代以降に実施)、この統廃合はあくまでバブル期の地価上昇に伴う都市空洞化に後押しされた都市型である。今後全国的に進展が予想されるのは、市域全体の少子化や校舎の老朽化にともなう「合理化」、すなわち小中一貫校を設立すると同時に小中学校を統廃合するという地方都市型の学校統廃合である。例えば静岡県浜松市では、平成二九(二〇一七)年に浜松市立浜松中部学園という小中一貫校の誕生に合わせて市内で最も歴史のある浜松市立元城小学校が近隣の小学校と統合された。浜松市の東隣にある同県磐田市では、市内全域の中学校区で小中一貫教育を進める一環として令和三(二〇二一)年から実質的な学校統合が進展する予定であり、令和三(二〇二一)年三月には明治六(一八七三)年創設校にルーツを持つ磐田市立豊田北部小学校が近隣の中学校地へ移転し、新築校舎に中学校と同居する[七]。こういった地方都市型の学校統廃合・校舎移転が進められている自治体においても、京都市と同等に学校内歴史資料室が設置されているであろうが、京都市のように学校統廃合により学校内歴史資料室が新たに設置されるケースや、元校舎に学校内歴史資料室が残るケースも想定される。京都市での調査結果と実績を活かし、他の自治体での学校資料の保存と活用を一刻も早く進めていかなければ

五 京都市立高倉小学校での記念式典では、小学校区内の学区ごとに学校資料が展示された。その様子は(高倉小学校PTA役員会二〇二〇)に掲載されている。

六 学制以前の明治四(一八七一)年に出された府下各郡小学校建営心得告示に基づいて創設された京都府内の小学校、または広義には同様にして明治五～七年頃に創られた小学校(和崎二〇一六)。

七 このケースは、小学校名と中学校名を残したままでの新築校舎への移転なので、正確には学校統合ではない(磐田市二〇二一)。北部小の校舎は今後どうなるのかわからないが、中学校の元校舎は解体されて新設校舎のグラウンドになる(磐田市教育委員会事務局学府一体校推進室二〇二一)。

ならない。

【付記】
本研究の一部はJSPS科研費JP20K01073の成果による。

参考文献

磐田市二〇二一「磐田市議会だより　いわた羅針盤」二〇二一年二月号
磐田市教育委員会事務局学府一体校推進室二〇二一「ながふじ学府小中一体校の概要」
瀬谷今日子二〇一七「学校所在資料はいかにして把握できるのか」『考古学研究』六四、一四頁-一八頁
高倉小学校PTA役員会二〇二〇『京都市立高倉小学校　創立一五〇周年・開校二五周年記念誌』
羽毛田智幸二〇一九「学校資料をどう伝えるか-横浜市内の活用事例から-」（地方史研究協議会編）『学校資料の未来-地域資料としての保存と活用』岩田書院、六七頁-八八頁
村野正景 二〇一五a「学校考古を支援する博物館のとりくみ —京都府内の学校所蔵考古資料に関する調査の概報—」『朱雀』二七、一七頁-三七頁
村野正景二〇一五b「学校所蔵資料の継承と活用への取り組み-京都における調査を題材として-」『遺跡学研究』一二、九〇頁-九六頁
村野正景二〇一九「あなたの学校に博物館はありますか」（村野正景・和崎光太郎編）二〇一九『みんなで活かせる！学校資料：学校資料活用ハンドブック』京都市学校歴史博物館、一〇頁-二九頁
村野正景二〇二〇「京都市立北白川小学校の郷土室 - 学校博物館の活動とその役割の可能性」（菊地暁・佐藤守弘編）『学校で地域を紡ぐ-『北白川こども風土記』から-』小さ子社、一六七頁-一九七頁
村野正景・和崎光太郎編二〇一九『みんなで活かせる！学校資料：学校資料活用ハンドブック』京都市学校歴史博物館
和崎光太郎二〇一六「番組小と同様の青写真：郡中小学校」（京都市学校歴史博物館編）『学びやタイムスリップ——近代京都の学校史・美術史』京都新聞出版センター、一七頁-一九頁
和崎光太郎二〇一八「学校史とは何か——地域のコミュニティセンターとしての学校の姿——」『アルケイア』一三、一頁-四四頁
和崎光太郎・村野正景編二〇二〇『シンポジウム 学校資料の活用を考える学校資料の価値と可能性 Ⅰ・Ⅱ 講演録』京都歴史文化施設クラスター実行委員会

図１　依頼文と質問表

【依頼文】

平成２９年 ７月

京都市立小学校長 様

京都市学校歴史博物館
℡ 075-344-1305
（担当　和崎）

学校内歴史資料室等の有効活用並びに当館との協力事業に関する調査アンケートのお願い

日頃は、京都市学校歴史博物館の事業にご協力いただき誠にありがとうございます。

当館は番組小学校を初めとした教育関係の歴史資料等の収集・保存・研究・活用等に努めております。

今年度で開館 19 年目を迎え、おかげさまで来館者数は平成 26 年度から 3 年連続で 2 万人を突破しており（他に平成 20 年度も 2 万人を突破）、これもひとえに、資料収集や広報にあたっての皆様方のご協力の賜物と感謝申し上げます。

さて、このたび当館では、学芸員と博物館主事を中心として、市立小学校の中に設置されている歴史資料室（郷土室、など名称はさまざま、学校の資料にかかわらず、古いものが集められている部屋）についての調査を行い、その有効活用と今後ご協力させていただけることを探る試みを始めました。

つきましては、校内の歴史資料室にあります史料の内容や、活用状況等をまずは概略的に把握したいと考えております。

大変お忙しい中恐縮ですが、アンケートにご協力をお願いいたします。

【質問表】

設問１（回答必須）

学校内に歴史資料室（郷土室等名称は様々。学校の資料に関わらず、古いものが集められている部屋）がありますか。（「ある」の場合は、以下の設問にもお答えください。「なし」の場合は、この設問で終了です。）

〇ある

〇なし

なしの場合、今後、設置を考えておられるかどうかを記入ください。

設問２　歴史資料室の名称

設問３

いつ設置されましたか。

〇昭和５４（１９７９）年以前

〇昭和５５（１９８０）年～平成元（１９８９）年

〇平成２（１９９０）年～平成１１（１９９９）年

〇平成１２（２０００）年以降

〇不明

設問４　どこが主導して設置されましたか。（複数のチェック・入力が可能）

□学校

□地域

□PTA

□学校運営協議会

□その他

□不明

設問５　現在、主にどこが管理・活用されていますか。（複数のチェック・入力が可能）

□学校

□地域

□PTA

□学校運営協議会

□その他

□不明

設問６　現在、どのような活用をされていますか。（複数のチェック・入力が可能）

□３年生の社会科学習
□総合的な学習の時間
□その他

「その他」の場合、具体的にご記入ください。

設問７　どのような資料がありますか。（複数のチェック・入力が可能）

□昔の教科書
□昔の教材・教具（教科書以外）
□地域の産業（農業）に関するもの
□考古資料（埴輪等）
□学校建築に関するもの
□学校文書類
□その他

「その他」の場合、具体的にご記入ください。

設問８　有効活用についてのご意見ご質問があれば記入ください。

図２　設問１

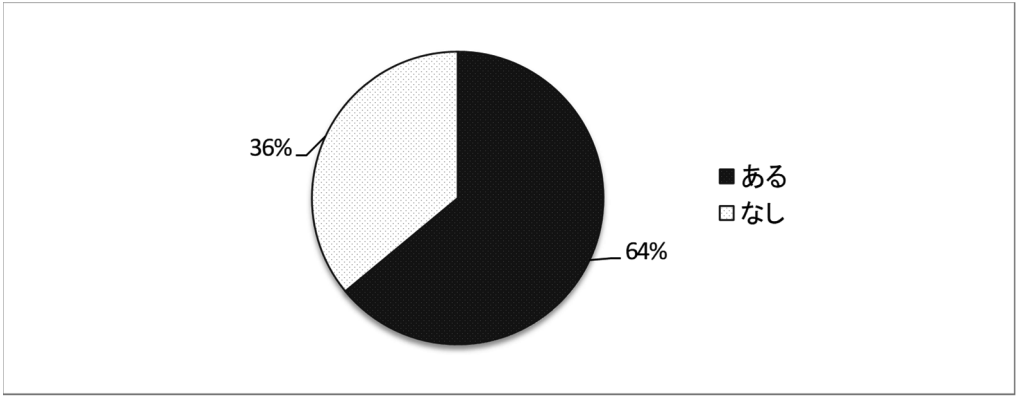


図３　設問３

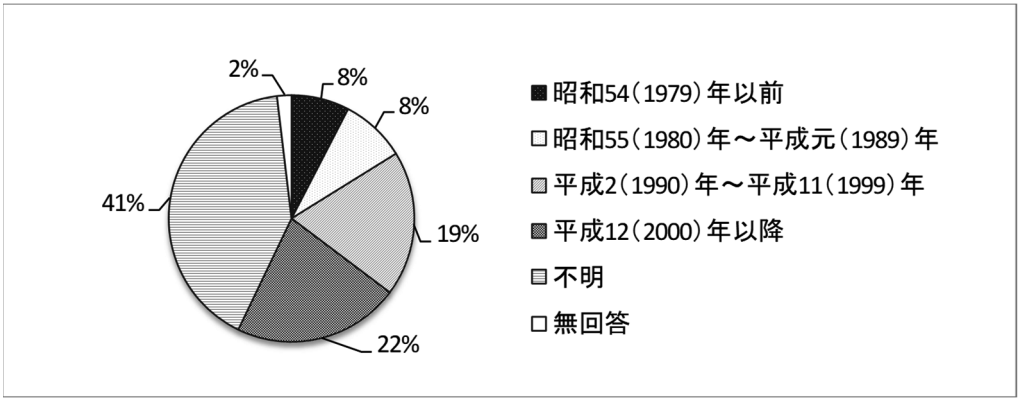


図４　設問４　単純集計結果

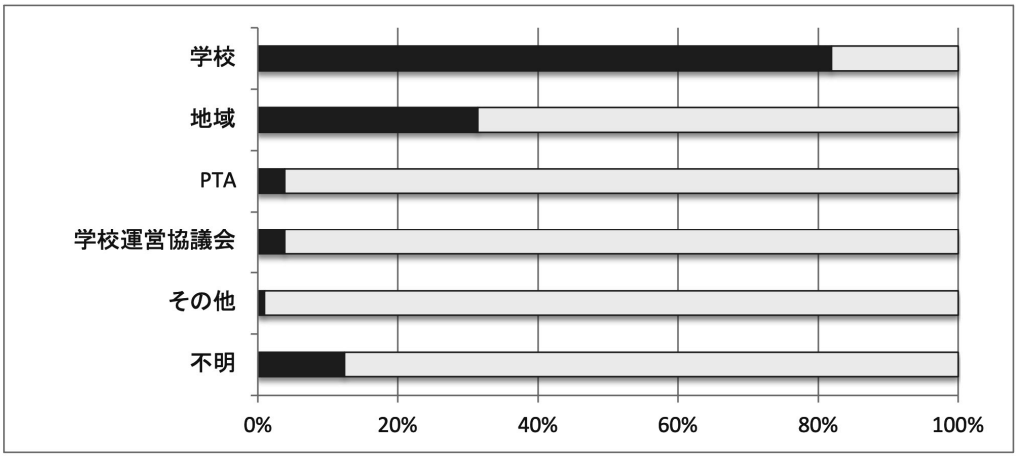


図５　設問４　クロス集計結果

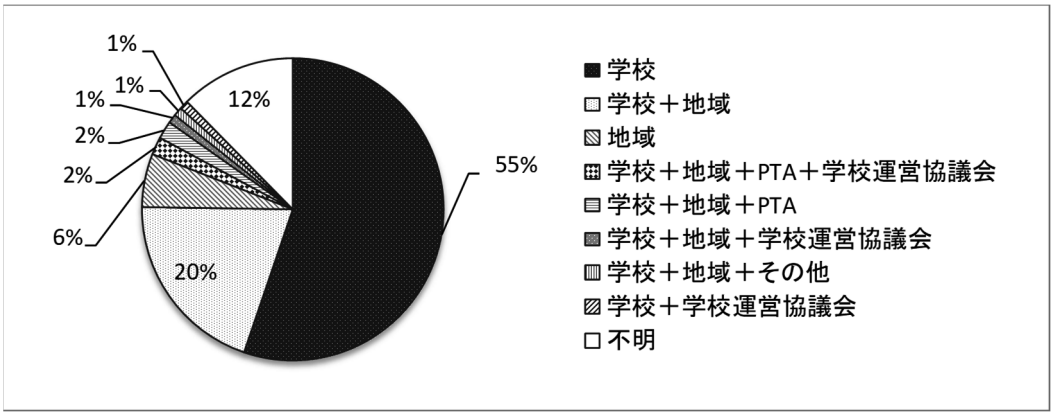


図６　設問５　単純集計結果

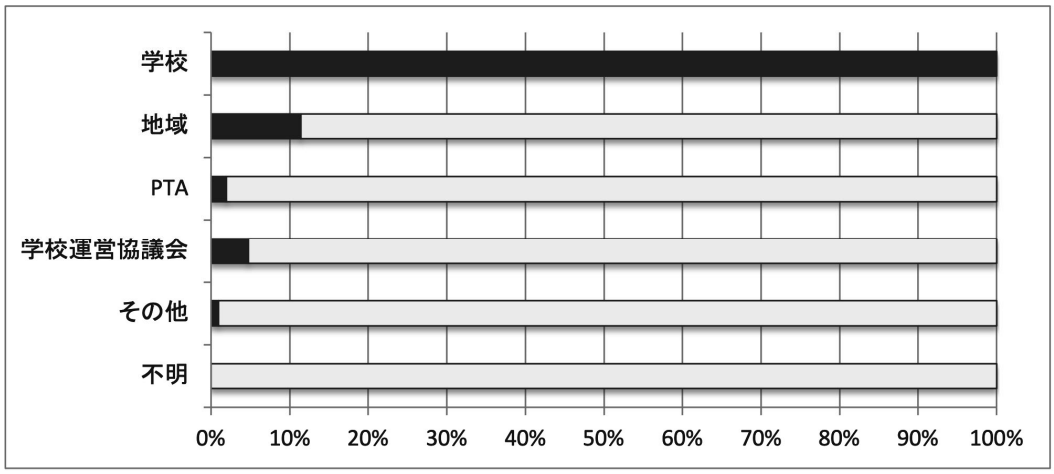


図７　設問５　クロス集計結果

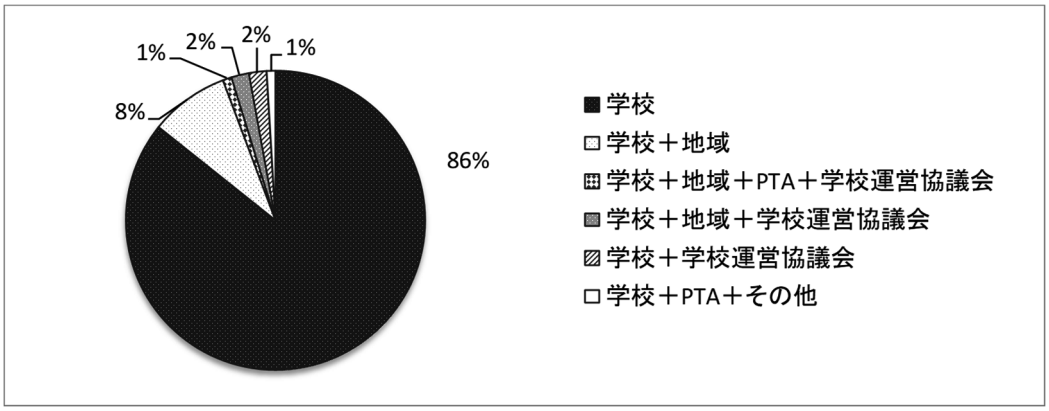


図８　設問６　単純集計結果

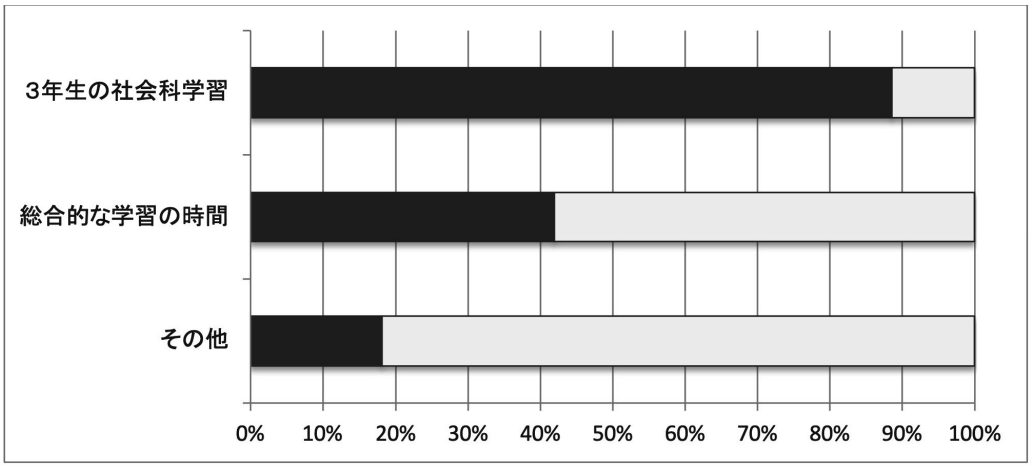


図９　設問６　クロス集計結果

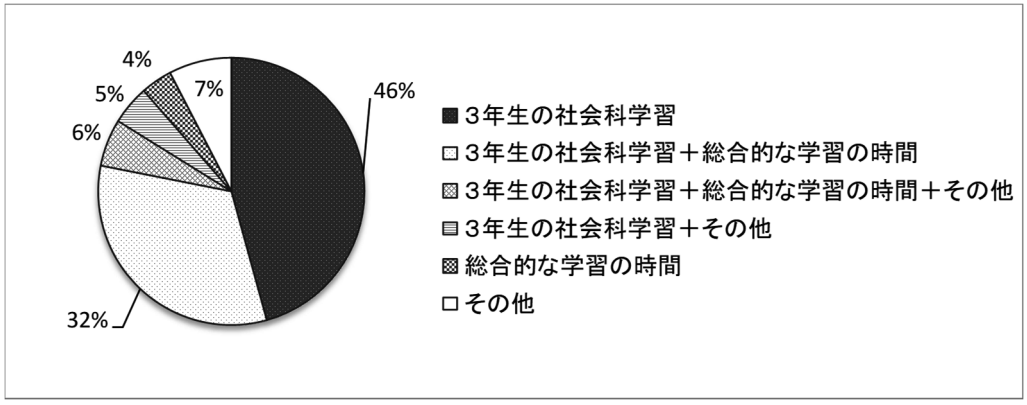
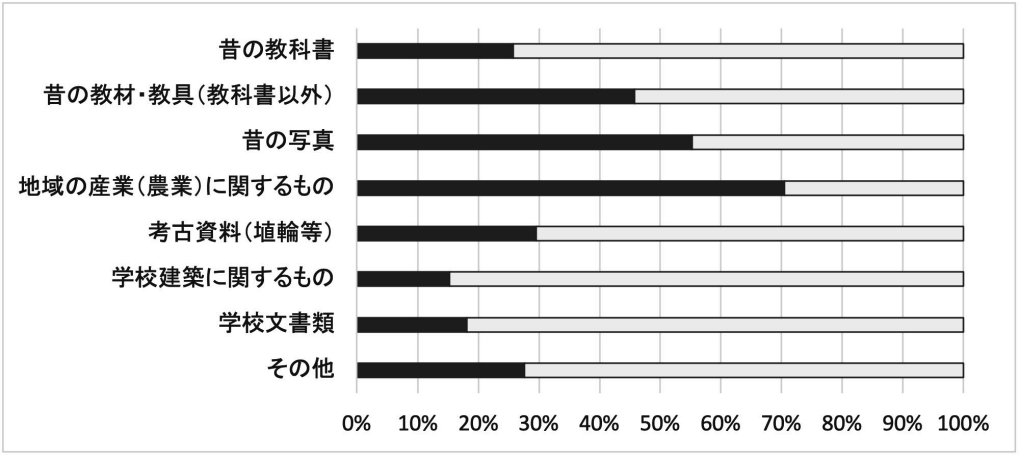


図１０　設問７　単純集計結果



番組小学校研究の現状と辻ミチ子氏の研究が残したもの

――番組小学校創設一五〇周年特別展を終えて――

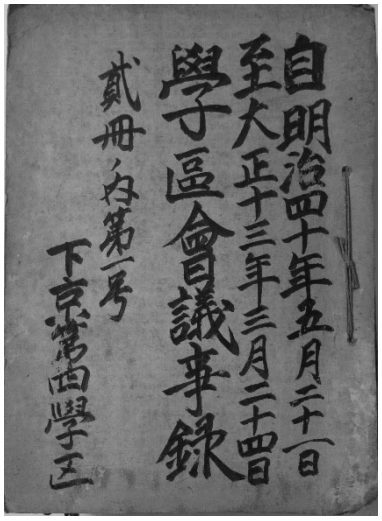
林 潤平

はじめに――展覧会報告と二つの疑問

昨年（平成三一／令和元（二〇一九）年）は番組小学校が創設されてから一五〇年にあたり、京都市学校歴史博物館ではこれを記念して「番組小学校の軌跡―京都の復興と教育・学区―」という特別展を、全四回にわたって開催した（「その一 始動」（五月一九日～七月二九日）。「その二 拡張」（八月一日～九月二三日）。「その三 発展」（九月二七日～一〇月三一日）。「その四 完成」（一一月二日～一二月一〇日））。この特別展では各番組小学校の個性を示す歴史史料やゆかりの深い美術品を紹介したが、この特別展の最大の特徴はというと、各番組小学校の展示を行うなかで「学区」に関する史資料を多数展示したことである。例えば、京都市立日彰小学校で保存されていた図1の「学区会議事録」は、学区で学校運営への関与を話し合った議事録であり、記録の保存期間は明治四〇（一九〇七）年から大正一三（一九二四）年の計一八年間に及ぶ。また京都市立城巽中学校に保存されていた図2の「積立金寄付台帳」は、同尋常小学校が校舎増築を行う際に学区民が寄付を行った歴史的事実を現在に伝えている。図3は京都市立竹間小学校に伝えられていた屏風であるが、この屏風は紹介した絵を描いた上村松園を含む、同学区に居住していた計一二名の芸術家たちが、竹間校開校五〇年を記念して製作し、同校に贈った一品である。

全三〇六（写真パネルを含む）点の資料点数のうち、六七点をこのような学区関係の史資料の展示にあてた。このような展示を行った理由はいうまでもなく、元番組小学校がすべからく学区と深い関係を保ってきた歴史を持っている

図1



学区会議事録
明治40（1907）年5月21日
～大正13（1924）年3月24日
京都市立元日彰小学校旧蔵

図2

積立金寄付台帳
大正10（1921）年～大正15（1926）年
京都市立元城巽中学校旧蔵

図3

組内画家記念揮毫屏風（屏風／上村松園ほか）
大正7（1918）年
京都市立元竹間小学校旧蔵
ちなみに上村松園の作品は、右から3番目の「静御前」である

からであり[1]、その結果元番組小学校には学区に関係する史資料も数多く保管され、当館もそうした史資料を数多く所蔵していたからであった。この歴史的な関係性は元番組小学校が開催した創設一五〇年記念事業にも明瞭に反映されていたと言える。事実元番組小学校の各校では、各校と学区の関係の歴史を伝える資料の展示や記念誌の編纂、さらには記念品の作成やその他の多種多様な記念イベントが、地域の人々の協力によって盛大に執り行われたのである。

筆者はそうした記念すべき事業の数々を間近で体感できる幸運を得た。そして、その事業に触れるプロセスの中で、番組小学校と学区との関係の深さの実感とともに、一つの疑問がせりあがってきたのであった。その疑問とは、「そもそも学校と地域とが史資料の保存のために努力を継続したのはなぜだったのか。その努力のためには、学校のみならず地域の人々が学区の歴史的意義を認知している必要があるが、なぜそうした認識を地域の人々が持つようになったのか」というものである。

もとより、回答となる要因のなかには、様々な要素が複雑に関係していることはいうまでもない。しかし、その回答を「番組小学校研究史」という領域のみから探してみると、見逃すことのできない一つの研究業績があったことに気が付くのであり、結論を先取りして言えば、それが辻ミチ子氏の研究であったのである。本論考では、今後の番組小学校研究に一つのスプリングボードをもたらすべく、番組小学校研究史を概観しながら、辻ミチ子氏の研究業績の意義

[1] 地域が協力をして学制制定（明治五（一八七二）年）以後小学校を創設した事例は、日本の各所で見つけることができる。しかし学区制度を活用して、創設期以後も地域を学校運営の主要な構成員としたか否かという問題については、各地によって大きな相違がある。名古屋や横浜、神戸といった諸都市は早くに学区制度を廃止しており、東京の学区制度は行政区と一致するものであった。また、比較的早くから京都と同じように学区制度の整備をした大阪も、反対の声が高まったことにより、昭和二（一九二七）年に学区制度を廃止した（千葉正士『学区制度の研究――国家権力と村落共同体――』勁草書房、一九六二年、二六七―二六八頁）。

について検討を試みてみたいと考えている。

このような検討を行う理由として、創設一五〇周年を迎えたことで、番組小学校にまつわる様々な事業や研究が、次のメモリアルイヤーに向けた新しい段階へと進まなければならない状況が生まれた、ということがあげられよう。番組小学校研究のレビューは、今後のための見取り図として機能すると考えられる。そして本論考では、「未来に踏み出す第一歩」として検証されるべき業績こそが、辻ミチ子氏の研究であると考えている。この点も詳細は後述するが、番組小学校の研究史を概観すると、番組小学校研究の新領域を開拓したフロンティアの役目を果たしたのが、ほかならぬ辻ミチ子氏であったという事実に行き当たる。つまり辻ミチ子氏の業績は、かつて番組小学校研究に新生面を付与し、その後に続く多くの研究に確かな道しるべを与えた存在であったのである。辻ミチ子氏の研究業績とその意義を明確にすることは、時は違えど新たな道が模索されている番組小学校研究の現状に対して、様々な示唆をもたらしてくれるのではないだろうか。なお慣例に従い、以下本論考でも敬称を略する。

一．番組小学校研究の推移

それではまず、番組小学校研究史を簡単に概観してみたい。番組小学校はその創設が全国の小学校に先立つ先駆的な事例であった関係から、京都で作成されたいくつかの教育史に関する書籍、及び京都の地域史を研究した著作のなかで、早くから言及がなされてきた存在であった[二]。

ただ、本格的な学術研究の発端となったのは、東京学芸大学名誉教授で、明治初期の教育制度を体系的に後付けた倉沢剛の研究であったと考えられる。倉沢は昭和四五（一九七〇）年に出版したその著書『小学校の歴史 Ⅲ』で、現在でも番組小学校研究の基礎資料の地位にある『政治部学政類』等を用いて、近世期との連続性も視野に入れながら番組小学校の成立過程を詳細に描き出してみせた[三]。

その次に登場した番組小学校の研究こそが、本論考で注目する辻の業績であったのであり、昭和五二（一九七七）年に公刊された『町組と小学校』であった[四]。辻の一連の業績は、その後平成一一（一九九九）年に公刊された『転生の都市・京都 民衆の社会と生活』に再度まとめられており、これら一連の著作は、現在でも番組小学校研究を実施する上で必読の文献となっている。

その後、主に倉沢・辻両研究以降に京都史研究が進展したこと、また両氏が活用した一次史料を再検討するという二つの視点から、番組小学校の創設過程について問い直し行う和崎光太郎の研究が、平成二六（二〇一四）年に発表された[五]。資料の質の吟味と新事実の分析を実践したこの研究によって、番組小学校の歴史に関する実証性の水準が、確かに一段階引き上げられた。

そして、実は和崎の業績と並行する形で、番組小学校研究史においては番組小学校を論者個々の関心から考察していく研究、つまりテーマ別の各論的な研究が継続的に発表されていた。そのテーマは建築史[六]、人物史[七]、教育方法論[八]な

二 京都市小学校創立三十年紀念会編『京都小学三十年史』一九〇二年。京都市役所『京都小学五十年誌』同所、一九一八年、二九―三七頁。京都市学区調査会編『京都市学区大観』同会、一九三七年、一八―二二頁。京都府教育会編『京都府教育史 上』同会、一九四〇年、二四三―二九六頁。秋山國三『近世京都町組発達史』法政大学出版局、一九八〇年（初出は『公同沿革史 上・下』京都市公同組合聯合会事務所、一九四四年）、など。

三 倉沢剛『小学校の歴史 Ⅲ』ジャパンライブラリービューロー、一九七〇年、八七―一五〇頁。

四 辻ミチ子『町組と小学校』角川書店、一九七七年、九三―一六八頁。

五 和崎光太郎「京都番組小学校の創設過程」『京都市学校歴史博物館研究紀要』第三号、二〇一四年一二月、三―一二頁。

六 建築史では、大場修の『京都 学び舎の建築史 明治から昭和までの小学校』（京都新聞出版センター、二〇一九年）や、川島智生の『近代京都における小学校建築――1869～1941――』（ミネルヴァ書房、二〇一五年）といった代表的研究が発表されている。

七 人物史の代表的な研究成果は、西川祐子の『花の妹 岸田俊子伝』（新潮社、一九八六年）である。この著作は岩波書店が二〇一九（平成三一／令和元）年

ど多岐にわたるが、そのなかでもあえて主要な視点をあげるとすれば、地域史やまちづくりの観点から番組小学校を取り上げたものが多いと言える[九]。このように番組小学校の研究は、番組小学校に関する教育史の観点から見た実証的研究が着実に蓄積される一方で、他方では多様な領域に研究分布が広がりをみせていく推移をたどったと言えるだろう。

二、辻ミチ子による番組小学校研究の特徴

それでは、この番組小学校研究史のなかで、辻ミチ子の業績にはどのような特徴を認めることができるであろうか。次の『町組と小学校』の目次構成（章節まで）は、この特徴を掴むうえで示唆的である。

序章　町組と町代について

第一章　京都町組の回生
一　町組と町代の確執
二　町代改義一件
三　町組連合の成立
四　町組寄合のセレモニー

第二章　「御一新」と町組
一　町組連合の歩み
二　江戸時代の終焉
三　町組の改正
四　地方都市「京都」

第三章　小学校の経営
一　町組会所兼小学校
二　「政教不岐」の小学校
三　小学校の進展

終章　「お区内」の町

に『花の妹　岸田俊子伝　女性民権運動の先駆者』として文庫化している（岩波現代文庫）。

八　番組小学校をめぐっては主に英語教育（田畑きよみ「明治初期京都番組小学校での英語教授計画の一考察：英語教授計画に対する所論の分析と回答」『埼玉大学紀要教養学部』第五二巻第二号、二〇一七年三月、二二一―二六一頁。保坂芳男「京都の番組小学校の英語教育に関する一考察―田畑（２０１７）年の分析を中心として―」『人文・自然・人間科学研究』第四一巻、二〇一九年三月、九四―一〇三頁）の観点から研究が進められており、そのほか元番組小学校の明治以降の歴史も視野に入れる形で、図画教育の研究などが実施されている（谷本尚子・益岡了「明治２０年代の京都における図画教育―指導書『小学日本画初歩』から」『日本デザイン学会研究発表大会概要集』第六二巻、二〇一五年六月、九六頁。和崎光太郎・森光彦著、京都市学校歴史博物館編『学びやタイムリップ　近代京都の学校史・美術史』京都新聞出版センター、二〇一六年、森執筆部分「第二部　美術史」八八―一五五頁）。

九　例えば、書籍では、三上和夫『学区制度と学校選択』大月書店、二〇〇二年。小林昌代『京都の学校社会史』私家版、二〇一四年。また、論文では、花岡三賀「自治体における学校統廃合後の跡地利用――京都市中京区（番組小学校）の事例を中心に」『教育方法の探究』第一一号、二〇〇八年三月、四七―五四頁。ウスビ・サコ「廃校になった小学校の活用と共同体の変容・再生について――京都の事例研究に基づいて――」『京都精華大学紀要』第三八号、二〇一一年二月、一四八―一七七頁。和崎光太郎「京都番組小学校にみる町衆の自治と教育参加」『日本教育行政学会年報』第四一号、二〇一五年一〇月、一六六―一七〇頁。並松信久「近代京都の学区制度と地域運営――都市内コミュニティの展開――」『京都産業大学日本文化研究所紀要』第二三号、二〇一八年三月、二三七―二七二頁、などの研究成果が着実に蓄積されている。

この目次の内容、とくに最後の総括が「町」の観点からなされている点や、そもそもの著作のタイトルが象徴しているように、辻の研究の特徴は、番組小学校を「町組」、つまり京都の生活の歴史との関連で考察した点にあると言えるだろう。

事実辻が『町組と小学校』において番組小学校に付与した数々の定義は、この特徴の存在を明瞭に物語っている。例えばまず辻は、先の目次に示されていたように、番組小学校を「政教不岐」の小学校」という視点から把握していた。府の行政文書を丹念に読み解いた帰結として、辻は政治と教化が一体で、両者を離さずに発展させるという番組小学校の定義、さらにいえば教育のなかに政治の意図が強く入りこむ（教化）という、いわば上からみた番組小学校の定義を導出していた。

ただ、その番組小学校の具体的な内実はどうであったのかというと、辻は別の箇所で「総合庁舎の小学校」[一〇]という把握を披歴している。辻は町文書（『鶏鉾町文書』、『四条町文書』等）を駆使して、会議場・役所・警察など、番組小学校が地域で多様な役割を果たしたことを実証的に示し、この定義を導き出していく。また、辻は同じく町文書を読み解きながら小学校会社について検討する箇所において、「小学校と小学校会社と町組は同じ母体の上に成立し、小学校と小学校会社は町組によって運営され、それが京都市政の基盤となったのである」[一一]という、いわば番組小学校を「市政の基盤」と捉える見解も提示している。この定義もまた、番組小学校と町の関係性の実態を明らかにしようとする姿勢から導出されたものと言えるだろう。

こうした番組小学校の把握の仕方は、先に述べた倉沢氏に先行する書籍類の段階においても、先駆的に論じられてはいた[一二]。しかし、町文書という一次史料からこの番組小学校の特徴を論証し、そうした番組小学校の多様な顔を実証的に明示したのは、辻がはじめてであった。いわば辻ミチ子は、町を媒介とした京都の生活史との関係という方向性へ、番組小学校研究の新領域を切り開き、その方向に実証性という確かな指針を与える、画期的な研究を実践したのである。

もちろん、すでに和崎も指摘しているように、辻の研究にも検討が不十分な点を見出すことは可能である[一三]。とくに教育に関係する史資料に関しては、その実証性の面でさらに入念な検証が必要なものも散見された。

また辻が実証的に明らかにした番組小学校の多彩な顔、いうならば番組小学校の多面性は、辻のその特徴の論じ方・描き方に起因して、「果たして番組小学校とはなんだったのか」という問題に対し、ある種の混迷も付与したことは否定できない。先の多彩な定義の数々には、番組小学校の多様な側面がすでに把握されている一方で、どちらかと言えば「上からの視点」、いわば行政的な側面から番組小学校が捉えられていた傾向もまた、読み取ることができた。

しかし、町文書を渉猟した辻は、こうした行政の動きに全面的には同意しえない民衆の実態を、先の定義とともに紹介せずにはいられなかった。辻は、「この示達（明治元（一八六八）年）九月二八日に府が達したおそらく最初の番組小学校に関する指示で、府のこの時点での小学校の基本構想に加え、町の人々の方も意見を検討せよとされていた――引用者注）が市中町々で討議されることになったが、社会情勢の不安も去りやらぬなかでの町組改正、ひきつづいての小学校設立の勧奨には、大多数の町民はとまどいを感じるばかりであった。そこで町中としてどのような意見をまとめていたか、若宮通五条下ル二丁目上錫屋町の例を「小学校気付申上候書付」（『上錫屋町文書』）によって、長くなる

一〇 辻ミチ子、前掲書、『町組と小学校』、一四一頁。

一一 辻、前書、一三三頁。

一二 秋山國三は、すでに町文書を参照しながら番組小学校の考察を実践していたが、分析は小学校会社や御備米、竈金など、番組小学校と地域の経済関係の側面に焦点化されており、それ以外の番組小学校の側面については、消防の役割のみ町文書を活用した検討がなされているだけで、基本的には行政文書に依拠する他の研究と同様の手法で、番組小学校像を描き出していた（秋山國三、前掲書、『近世京都町組発達史』、三八八―四六八頁）。

一三 和崎光太郎、前掲論文、「京都番組小学校の創設過程」、三頁。

が紹介しよう」[一四]として、番組小学校構想への様々な意見に反映された町の人の本音、つまり反対意見も提示していく。いわば辻は、町に目を向けることによって、「政教」と対峙する民衆の意識の存在、つまり番組小学校に対する別様の認識のありかを示唆していくのである。そして辻は、まさにこの「政教不岐」という番組小学校の性格を考察する箇所において、次のようにも論じていたのであった。

番組小学校で行われた経書講釈や心学道話は、旧幕時代の教諭所を引き継いだようなもので、小学校は「人民教諭」の場とされ、多分に人民を愚民視している府の官員によって教諭、講釈が行なわれた。信望のあった広瀬範治典事ですら、郡中小学校への巡講の目的を「僻邑頑愚の者鼓舞致候ため」と述べていたが、槇村正直にいたっては京都人を「頑固　隘陋　柔奸狐疑」ときめつけ、「頑回狐疑ノ俗ヲ変シテ　文明開化ヲ進マシメ」るといっている（『京都府史料』）。こうした発想ですすめられた「政教不岐」の小学校であったから、巡講師の設置ひとつをとってみても、啓蒙開発の任を担った教化事業であり、政道を補佐する役割をもったものであって、番組小学校は官主導型、官の統制が厳しいという一面をもったのであった[一五]。

先述の町の実態のなかで、「政教」の側がこうした意識をもって民衆に対峙したとするのであれば、地域民の側はこの「政教不岐」という側面に対し、その傲慢さに比例するぶんだけの内面的な反発をもっただろうことが容易に推測され、それを踏まえるとするのであれば、「政教不岐」という番組小学校の性格は、いみじくもここで辻が表現をしているように、あくまで番組小学校の「一面」に過ぎないと理解されなければならなくなる。

それでは改めて、「果たして番組小学校とはなんだったのか」。辻の研究がその回答を明瞭に提示することは、遂になかったように思われる。結果として辻の番組小学校研究には、その先駆性とともに、いうならば鵺的な性格、つまりつかみどころがなく、正体がはっきりしないような性格もまた、同時に見いだせてしまうのである。

しかし、逆説的ではあるが辻の研究のこうした特徴がまた、番組小学校研究史に重要な意味をもたらしていたと考えられる。それでは番組小学校の研究史において、辻の研究は一体どんな役割を果たしたと捉えることができるだろうか。

三．番組小学校研究史に辻ミチ子の研究が残したもの

その役割として第一に考えることができるのが、辻の研究が番組小学校研究を教育史研究という枠組みから解放し、生活史・民衆史というより広大な研究領域と接続した部分である。この接合部を辻が、しかも実証的な形で明示したことに関しては、思いのほか大きな意味があると考えられる。

こうした研究成果は、生活史や民衆史を志す研究者や、京都という都市の歴史、さらには自身の住む学区に興味をもった多くの市民など、これまで必ずしも番組小学校を自らの関心との関係で見ていなかった人々を、新たに番組小学校研究であったり、番組小学校に関する様々な活動などへ導いていく、重要な回路として機能する。自分たちの住む地域が番組小学校と不可分の関係にあることを理解できれば、番組小学校のことを知ろうという欲求が大きくなり、結果その欲求が番組小学校のことを調査したり、さらに多くの人へ伝えていくための手立ての用意、行動へとつながっていくのが自然だからである。

そして辻の研究成果が、こうした事実を客観的な形で提示したことにも重要な意味がある。客観的ということは、それだけ多くの人が納得できることを意味する。そうなると当然、「番組小学校と地域の関係性が示されていない」、もしくは「信憑性に乏しい見解で関係性が示唆されているだけの状況」よりも、多くの人が番組小学校研究に関心を示し、参入する可能性が増えることだろう。

一四　辻ミチ子、前掲書、『町組と小学校』、一二四ー一二五頁。
一五　辻、前書、一五二ー一五三頁。

番組小学校と京都の生活史・地域史が深い関係を持っていることは、すでに辻が実証的に明らかにしてくれており、後続の人々はこの事実に準ずることで、自らの研究や調査を手軽に開始できるからである。もし辻の研究成果が存在しなければ、番組小学校と地域の関係性について、両者が不可分の関係にあることを、まず自らで実証的に示さねばならない。この部分の役割を担ってくれた辻の研究成果が、その後の番組小学校に関するテーマ別の各論的な研究、さらには地域での調査・顕彰等の活動につながったことに疑いはないだろう。辻の業績は実り豊かな研究の裾野と、それを反映した多彩な業績の蓄積とを、番組小学校研究に確かにもたらしてくれたのである。

さらにこうした辻の研究が、番組小学校の史料保存という面においても重要な意味を持ったと考えられる点に関しても、続けて言及をすべきであろう。もし地域と小学校の歴史的に深い関係性が、辻の研究によって客観的に明らかとされていなかったとすれば、地域の人々は、学区が小学校の運営に深い関係をもっていたと、十分に理解できなかったかもしれない。実証的でない見解が伝達されていたとしても、その実証性の希薄さから疑問が多数発生するのは当然だからである。

そうなると地域の人々が、学区に眠る番組小学校関連史料や、番組小学校を支えた学区の史料の保存、発掘に動かなかったと可能性も、十分に想像することができる。いわば辻の研究は、番組小学校関係史料を発掘し、保存していく作業に関する正当性の根拠を、地域のみならず京都の地にもたらしてくれた、というのが正確かもしれない。こうした客観的な根拠があったからこそ、番組小学校関係史料や学区に関する史料の価値をめぐって、多くの人の了承を得ることが可能となり、この了承が資料発掘や長期的な史料保存・保管のための合意形成に必要不可欠だからである。

この事実を番組小学校研究史という視点から見るならば、辻の業績はその番組小学校研究を以後も引き続き継続することを可能とする基盤、つまり多数の史料を残す方途を後世に残してくれた、とも捉えることができる。また、こうして史料が残されたことによって、地域による番組小学校創設一五〇周年事業に多彩な彩りや、様々な顕彰の可能性が生まれてきたことは言うまでもないだろう。まさに辻の研究は、史料を発掘・保存するための説得戦略の核、つまり正当性の根拠と、それによって整備された番組小学校研究の土台、さらには地域が番組小学校を媒介として多様に活動できる契機とを、私たちにもたらしてくれたのである。

そして辻の研究には、こうして地域の人々の努力によって保存されてきた多くの史料と、新たな視点から番組小学校研究へと招待された多数の人々とを確かに結びつけ、その後の研究に駆り立てていく大きな力が備わっていたと、考えることができるのである。そうした役割を可能とし、人々を駆動させる力の源泉となったものこそが、辻が示した番組小学校の多面性をめぐる性格である。

確かに辻の研究のそうした性格は、「番組小学校とはいったいどんな存在であったのか」という問題に対して、一種の混迷を帰結する側面を持ってもいた。しかし、この多面性と混迷は、「それでは番組小学校がいったいどのような存在であるのか。自分も自らの関心から追究してみよう」という動機であったり、「京都の近代化、さらには自身の関係する地域にこれほど根深く関係した番組小学校とは、いったいどんな存在だったのであろう?」という好奇心などと、裏返しの関係にあると言えるだろう。「どのような存在であると把握することができない」からこそ、「それを把握してみたい」という思いが発生する。言うならば辻の研究は、人が鵺のような正体不明の生物に惹かれてしまう、得も言われぬ魅力を番組小学校研究史に付与してもいたのである。

事実その後、先述のように多くの論者がそれぞれの観点から番組小学校の把握、さらには番組小学校の歴史的意義の検討を試みる研究を発表し、その成果が番組小学校研究史に蓄積されてきた。これらの研究は、辻が示した「番組小学校とはいったいどんな存在なのか」という問いに対する、多様な観点からの回答と捉えることができる。拡張された番組小学校の研究領域のなかで、整備された史料活用環境を十二分に生かすことのできる、まさに簡単には捕捉できない「課題という名の指針」を私たちに残した点こそが、辻の研究が番組小学校研究史において果たした、最大の役割だったのかもしれない。

おわりに――今後の番組小学校研究に向けて

さて、辻の研究に続く多くの番組小学校研究の蓄積によって、辻が示した課題、つまり「番組小学校とはいったいなんだったのか」という問いに答えるミッションは、無事に解決したと言えるのだろうか。実感を正直に述べてしまえば、いまだこの問題には誰も回答ができていないと感じる。

時代状況の変化に伴って、私たちの関心もまた様々に変容していくが、その関心の変化によって、当然ながら番組小学校研究を実施する視点も変容していく。例えば、私たちの生活に計り知れない影響を与えた新型コロナウィルス感染症は、その対応をめぐる一連のプロセスにおいて、私たちに「保健所」という機関へ注目を浴びさせる帰結を生んだ。かたや、番組小学校が創設当時果たした数々の役割のなかには、種痘という感染症予防のための諸手続き、及び予防を施す実際の会場という、まさに保健所としての機能が含まれていた。こうした事実はすでに辻の研究のなかでも若干言及されていたものの[一六]、実際にどのようなプロセスでこうした業務を行っていたのか、そして地域の人々にとってこの機能はいかなる意味を持っていたのか、という具体的な問題については、ほとんど明らかとなっていないのが現状である。

しかし、辻の研究とその後の番組小学校研究の動向とが教えてくれるのは、こうした課題が眼前に迫り続ける状況のなかで、それでもそれぞれの観点から番組小学校の正体に迫り続ける研究を継続する営みこそが、今後も番組小学校研究を豊かなものにし、まわりまわって地域とともに番組小学校研究を活性化し続けられる、一つの道ではないだろうか、ということである。この道が実践されてきた約半世紀の間に、番組小学校研究は着実に蓄積を実現してきており、かつその蓄積に後押しをされる形で、各校及び市をあげた番組小学校顕彰事業も多くの成功を帰結してきたからである[一七]。もとより、教育史の観点から番組小学校に関する実証性の検討を継続していくことも重要である[一八]。新たな史料が発掘され、そうした史料をもとに新しい史料批判の観点が切り拓かれることによっても、より正確な番組小学校の歴史像に接近していけるだろう。しかし、こうした検討を実践するには、史料の継続的な保存と発掘への努力という、多くの人の協力を伴う困難な作業、そしていわばこれまで辻の研究が後押ししてきた地域での地道な活動が、必要不可欠となってくる。このように辻の研究は、今後私たちが番組小学校研究を進めていくべき方向性を、令和となった現在においても、変わらず指し示し続けてくれているのである。

一六 辻、前書、一四四頁。

一七 番組小学校創設一五〇周年記念の際には、小説家荒木源の手により、番組小学校を題材にした小説『御苑に近き学び舎に　京都・番組小学校の誕生』（京都新聞出版センター、二〇一九年）も執筆・発表された。この一五〇年という段階において、番組小学校はいよいよ取り上げられるメディア領域まで、拡張させ始めたと言えるだろう。

一八 和崎は、番組小創設の歴史的意味を中央政府とのつながり及び近隣他府県との関係も視野にいれながら問うという課題を提起している（和崎光太郎、前掲論文、「京都番組小学校の創設過程」、一二頁）。

京都郡中小学校に関する基本情報のデータベース化　その一

――『学校記念誌』記載内容を中心として――

小辻 映里・林 潤平

一．郡中小学校創設一五〇周年に向けて

平成三一／令和元(二〇一九)年五月、日本初の学区制小学校であり、現在の公立小学校の源流である番組小学校が、創設一五〇周年を迎えた。しかし、京都市に現存する公立小学校のなかで、この番組小学校に源流をもつ学校は少数派にあたる(令和二(二〇二〇)年現在、全一六一校(小中一貫校の前期課程を含む)中、番組小学校の流れを汲むのは二〇校)。そして残る多くの小学校のルーツとなっている学校こそが、本考が注目する「郡中小学校」であった。

「郡中小学校」とは、当時「市中」と呼ばれた現在の京都市中心部に対し、その周辺部である「郡中」で設立・運営された小学校のことを指す。明治四(一八七一)年一一月に「府下各郡小学校建営心得告示」が出された後、明治五(一八七二)年初頭から各地で開校が確認されるようになり、その後現在の京都市域内において、明治一二(一八七九)年三月一四日までに現在計八五校の設立が確認されているのが、郡中小学校であった。この郡中小学校は、番組小学校と同様に地域のコミュニティセンターの役割を担ったと評価されている[一]。なお、本考では郡中小学校を、先の告示が出されて以後、郡区町村編成法が具体的に京都で施行される明治一二(一八七九)年三月一四日まで[二]に開校・創立・設立された学校と定義している。

というのも郡中小学校は、明治五(一八七二)年から明治一一(一八七八)年に施行された戸籍区の設置と関係しながら開校された学校と想定されるからである[三]。

さて、このように郡中小学校に関する基本事項を整理してくると、早くも令和四(二〇二二)年には、「郡中小学校創設一五〇周年」という、記念すべき年を迎えてしまうことがわかる。にもかかわらず同時に気が付くのは、上記の郡中小学校に関する基本的なトピックを超える、例えばより詳しい郡中小学校の設立経緯であったり、学校運営の実態、さらには個々の学校と地域との関係性であったりと、いわばよりミクロなレベルで歴史的事実の発掘・検証を行っている先行研究が、現状とくに京都市内の郡中小学校に関する限り、ほとんど存在しないことである[四]。管見の限り一九四〇(昭和一五)年刊行の『京都府教育史 上』において、若干こうした内容に触れられているものの、その記述の内容は多くの事例が現在の京都市外の地域で創設された学校に関するものであった[五]。

この事実は、より詳細な郡中小学校の創設過程に関する基礎研究の必要性を、私たちに強く自覚させるだろう。そして同時にこの事実は、先行研究が甚だ乏しい現状において、「各校が作成した学校記念誌」しか、京都市内の郡中小学校の流れを汲む学校のルーツを知るとっかかりがない状況を、私たちに示しているので

一 以上、郡中小学校に関する基本的な情報については、和崎光太郎・森光彦著、京都市教育委員会京都市学校歴史博物館編『学びやタイムスリップ　近代京都の学校史・美術史』京都新聞出版センター、二〇一六年、一七―一九頁を参照。

二 京都府立総合資料館編『京都府百年の年表　1　政治・行政編』京都府、一九七一年、七六頁。

三 辻ミチ子「小学校の建営」(京都市『京都の歴史7　維新の激動』(京都市史編さん所、一九八〇年)所収、五二〇頁。

四 倉沢剛『小学校の歴史　Ⅲ』ジャパンライブラリービューロー、一九七〇年、一二五―一三三頁。

五 京都府教育会編『京都府教育史 上』同会、一九四〇年、二九九―三〇六頁。

はないだろうか。学校記念誌は当然ながら実証的な面で入念な検証が必要な書物である一方で、他方では各校と各地域だけが所有する史資料をもとに構成された貴重な歴史像・歴史的事実を伝達する媒体でもある。学校記念誌に記載された開校の経緯や創立時の学校の様子に関する情報、及び当時の関係者などの貴重な情報へ、簡単にアクセスできるデータベースを作成できれば、郡中小学校の本格的な調査・研究を始動できる、有益な出発点となるのではないか。こうした問題意識から、学校記念誌に記載された郡中小学校に関する基本情報を一覧の表の形式でデータベース化し、それをもとに若干の考察を試みたのが、本研究ノートである。なお、データベースに記載する内容の調査・記述は小辻が、「一」の執筆は林がそれぞれ単独で担当したが、その他データベース全体の校閲と「二」及び「三」の記述については、小辻と林が両者で作業を行った。

二、郡中小学校基本情報データベースについて

さて、データベースを紹介する前に、表を構成する各項目が何を意味し、かつどのような問題意識、及び方法で内容を記載したのか、説明をしなければならないだろう。三〇頁から掲載した「郡中小学校基本情報データベース」は、(一)後継校(現存及び休校、閉校した小学校)の校名、(二)郡中小学校名、(三)開校年月日、(四)開校前の歴史・開校の経緯・関係者等、(五)創設期の所在地、(六)郡村名、(七)本校・分校関係、(八)組合関係(村名)、(九)創設経費等費用、(一〇)建物・立地関係、(一一)教員数・児童数(就学率)、(一二)出典、から構成される。

(一)後継校(現存及び休校、閉校した小学校)の校名

本項目では、郡中小学校の後継校にあたる学校の名称を記入した。ここで各学校を後継校として扱った基準は基本的に、現存(休校もしくは学校統合等で閉校した)学校が、記念誌上等において前身校として記述されているかどうか、という点によった。なお、煩雑さを避けるため、「京都市立」の記載は省略した。

(二)郡中小学校名

本項目では、対象の郡中小学校の名称について記入した。また、名称の表記の決定、および記入は、以下の手順で実施した。

① 「郡部小学校一覧」記載の名称を記載

この「郡部小學校一覧」とは、明治七(一八七四)年一二月に府によって作成された、当時の府下における郡中小学校を一覧にした表のことである。郡中小学校に関する研究のみならず、資料の把握と整理もまた端緒についたばかりの現状において、この「郡部小学校一覧」は創設当時の様子を伝える、貴重な調査資料と言える。そこで本論考においては、この表に該当する郡中小学校が登場していた際には、まず一覧に記載された名称を、本表に校名として記載することとした。

② ①で校名を確認できなかった場合、記念誌に記載された校名を記載

記念誌に記載された創設当時の郡中小学校の校名は、学校沿革史、または学校及び学区に伝わる伝聞情報などを根拠に記述されたと推定される。学校沿革史の記述は創設期のことを知るための大変貴重な情報であるが、記念誌に記載された校名情報が、伝聞という今後の吟味が必要となる根拠に基づいている可能性を、否定することはできない。そこで本表においては、校名の記載に際し、①で確認できなかった場合に、記念誌記載の校名情報を記載することとした。なお、明治八(一八七五)年以降に創設、及び改称された学校の名前については、一覧に依拠することができないため、記念誌に記載された校名を記入している。

(三)開校年月日

本項目には、対象の郡中小学校の開校日、および当該郡中小学校の前身となった教育機関(寺子屋、藩校等)が存在した際には、その教育機関の開校日について記入した。具体的には、記念誌において、開校日とされている日、開校式を挙行した日、開校届に記載された日、などとして記載されている日である。なお、開校日をめぐっては、複数の説が唱えられている学校も存在した。その際には複数の

日を、それぞれの根拠とともに記入している。また、「学校がつくられる事象」について、記念誌では「開校」や「創立」、「設立」・「開校式挙行」など、様々な言葉や認識でもって把握・紹介を試みられている。しかし、記念誌ごとにこれらの言葉の使い方やニュアンスに若干の相違があることに加え、それぞれの言葉にはそもそも意味内容に違いがあるために、こちらの解釈を入れ込むことで情報に混乱が生まれないよう、本表では記念誌で使用されている表現をそのまま記載した。

(四)開校前の歴史・開校の経緯・関係者等

本項目では、開校前の歴史や開校の経緯、関係者、そして他の項目には記入しなかったが対象の郡中小学校の理解にとって重要な補足情報を記入した。

ここにおける「開校前の歴史」では、郡中小学校が開校される以前の当該地域における教育事情について、情報を記している。なかでも郡中小学校に直接的に影響を与えた、江戸期の各地域における教育事情について記述をした。

続いて「開校の経緯」とは、授業場所や学校運営の仕組み等の準備、及び郡中小学校の開校と創設期の運営状況に関する情報のことを指す。

また「関係者」は、「開校の経緯」で対象とされた時期に、小学校の設置又は運営に尽力した者として特定される人や、この時期の小学校の教員のことを指す。

(五) 創設期の所在地

この箇所では、開校当時の所在地、及び明治一二(一八七九)年三月一四日までに当該校に移転等による不動産関係の変動があった際、それらの情報を記入した。

(六)郡村名

本項目では、開校当時に対象の郡中小学校の所在地が所属した郡及び村の名称として、記念誌で記載されている郡村名を記入した。なお、「郡部小学校一覧」で村名を確認できる学校は、そちらの村名を優先して明記した。

(七)本校・分校関係

当時、各地域で郡中小学校の設立に際しては、近隣の複数の村が組合を組んで運営体制を整備することがあった。そして組合学校に所属する村の中で、学校の所在地との距離が離れている場合には、通学事情の関係から、その離れた村に分教場(分校)を設けて、児童の学習環境を整備することがあった。そのため本項目では、当該校に関する本校及び分校関係について記入した。

(八)組合関係(村名)

ここでは、対象の郡中小学校が複数の村によって運営されている組合学校である場合、組合に入っている村の数と、同一の組合に所属する村名について記入した。

(九)創設経費等費用

本項目では、郡中小学校の創設及び運営に関する財政事情の情報を記入した。

(一〇)建物・立地関係

本項目では、学校開校のために手配された建物や土地の属性について記入した。

(一一)教員数・児童数(就学率)

本項目では、開校当時の教員数と、児童数及び就学率の情報を記入した。

(一二)出典

本項目では、同列の他の項目の情報源になった文献の情報を記入した。当該文献情報の先頭には番号を降っており、他の項目で出典の情報を掲載する際には、煩雑さを避ける観点から、番号のみに省略した形式で表記した(例、①〇頁)。また、基本的に本表の項目は記念誌を根拠として記述したが、記念誌が発見できなかった学校についての特例として、関連地域の教育史資料、地域史の文献に拠った。

創設期の所在地	郡村名	本校・分校関係	組合関係（村名）	創設経費等費用	建物・立地関係	教員数・児童数（就学率）	出典
学校敷地坪数は327坪 （①20頁） 80周年記念誌発行の際の古老懐古談から想像するところによると，明神川をはさんだ地域に，会所と並んであったようである，とされる （①22頁）	愛宕郡 上賀茂村	不明	不明	不明	不明	児童数40～60名程度の在籍とされる （①22頁）	①上賀茂校百年史編纂部会編『上賀茂校百年のあゆみ』 （1973年，上賀茂校創立百周年記念事業委員会発行）
雲ヶ畑村中畑区字宮ノ本山林地を開拓し，70歩余の平地を得てここに校舎14坪（3間半・4間），教場20坪（4間・5間）を設立（①19頁）	愛宕郡 雲ヶ畑村	不明	4か村組合立 （中畑村，中津川村，出谷村） （①15頁） ※明治7年8月には，中畑村，中津川村，出谷村を合わせて，雲ケ畑村とした（①11，15頁）	不明	不明	不明	①『雲ヶ畑校百年史』 （1974年，雲ヶ畑校創立百周年記念会発行） ②『雲ケ畑校のあゆみ』 （2012年，雲ヶ畑小学校138周年・雲ヶ畑中学校64周年記念事業実行委員会発行）
総神社の北に寺子屋として創始 （①70頁）	愛宕郡 東紫竹大門村	不明	不明	不明	神社 （①70頁）	不明	①「待鳳百年の歩み」編集委員会編『待鳳百年の歩み』 （1973年，京都市立待鳳小学校創立百周年記念事業協賛会発行）
北光悦町七十四番地 校舎敷地は東西8間半，南北16間，坪数136坪（①11頁）	愛宕郡 西紫竹村 （西紫竹大門村との記載もある（②34頁））	不明	不明	校舎建築に関する総経費は960円67銭2厘5毛で，内訳は寄附金422円63銭7厘5毛。残額は一時借入 （①11頁）	不明	不明	①鷹峯小学校創立百周年記念事業実行委員会編『鷹峯百年誌』 （1973年，同会発行） ②鷹峯小学校創立120周年記念事業実行委員会編『鷹峯　百二十年誌』 （1993年，同会発行）
所在地は不明だが，「蓮台野小学校の校舎は，「学舎ノ構造ハ実ニ厳然タルモノニテ，高門ヲ入レバ大玄関アリ一見物シカリシト言フ，斯クノ如クシテ明治ニ入リ，ソノ初年頃，新置ノ官人京都府知事タル長谷某ノ管内巡視ニ際シ，該学舎ノ構造規模ガ大名館ノソレノ如シトテ，大イニ贅沢ヲ（ママ）叱責セラレタリトノ笑話ヲ留メタリ」とあるように，大きく立派な建物には，村民の教育に対するねがいや期待が秘められていたものと考えられます」という，創設期の校舎に関する記述はあり （①21頁）	愛宕郡 蓮臺野村 （明治7年12月には西紫竹大門村と合併（①155頁））	不明	不明	「蓮台野小学校にはおいても村民によって学校の建築費，維持費が出されていたのです。明治3年には「愛宕郡蓮台野村野村元右衛門，小学校建設ニ持畑ヲ提供書籍ヲ買入レル（所用費用350円），自費ヲモツテ教師ヲ雇入レ子息茂兵衛トトモニ教示，世話ニ当ツタ」。明治5年には「愛宕郡蓮台野村ニ蓮台野小学校ヲ設立，建物一棟（24坪）ヲ新設益井茂平力ヲツクス」（京都新聞71号）。明治10年には「京都府ノ寄付者ノ中ニ学校費ヲ指出スモノトシテ蓮台野分校ニ西紫竹大門村益井茂兵衛（30円）井上伊三吉（14円18銭7厘）鈴木宇兵衛（12円50銭）アリ」」 （①21頁）	不明	明治6年には，男子50名，女子22名，聴講人650人が関係していたと，『京都新聞』71号を引用しつつ紹介 （①21頁）	①楽只小学校創立110周年記念事業実行委員会編『楽只百十年史』 （1983年，同会発行）
衣笠村大字小北山小字平野（平野神社境内の東南隅千三平方メートル）に創設。 学校の建物は等持院塔頭・松寿院を移した（①8頁）	葛野郡 小北山村	不明	不明	不明	神社（建物は寺院） （①8頁）	教員は創設時2名（後に他6名奉職） 児童数は1学級約20名 （①8頁）	①『京都市立衣笠小学校百周年記念誌』（1973年，衣笠小学校百周年記念事業委員会発行）
下ノ町41番地（記念誌発行当時，上京区中川北山町252番地にあたり，教員住宅として使用している）に創立。校地坪数168坪，教室建坪20坪2合5勺，付属建物30坪，運動場15坪（①55頁） 設立の場所は中川村役場の事務所であり，記念誌発行当時は幼稚園の所である，との証言がある（①64頁）	葛野郡 中川村 （①55頁）	不明	不明	不明	村役場 （①64頁）	不明	①中川小学校創立百周年記念事業委員会編『中川校百年のあゆみ』 （1973年,同会発行）

【北区】

後継校(現存及び休校、閉校した小学校)の校名(令和3年3月現在)	郡中小学校名	開校年月日	開校前の歴史・開校の経緯・関係者等
上賀茂小学校	**上賀茂学校**	明治6年2月2日学校設置・開校 (①20頁)	〔開校の経緯〕 「日本の教育制度の先鞭をつけた京都市，それに隣接する愛宕郡上賀茂村に学校が設置されたのは，明治6年2月2日のことである。学校沿革史には，次のような記録が残っている。 明治五年　敷地家屋ヲ買収ス。 明治六年　二月二日初メテ開校ス。当時の(ママ)学校敷地坪数三百二十七坪，管理者座田太氏，首席教員岡本清心ナリ学区域ハ上賀茂村ヲ一区域トセリ」(①20頁) 〔関係者〕 管理者座田太，首席教員岡本清心(①20頁)
雲ヶ畑小学校	**雲畑学校** (「京都府愛宕郡雲ケ畑村立雲ケ畑小学校」との記載もあり(①13頁))	明治6年4月6日創立 (①13頁)	〔開校の経緯〕 「中畑村字宮ノ本に創立され，京都府愛宕郡雲ケ畑村立雲ケ畑小学校と称し，中畑村，中津川村，出谷村を管区とする。」 (①13頁) 〔関係者〕 教師として，明治6年4月から河合昌信氏が，明治9年2月から松尾秀尹氏(松翁先生。明治9年に転遷する前は北野神社に奉職)の名があがる(①20，50頁)
待鳳小学校	**東紫竹学校** (「村立東紫竹小学校」との記載もあり(①13頁))	明治6年1月設立 (①13頁)	〔開校の経緯〕 「訓令に基き，京都府愛宕郡東紫竹大門字東紫竹に村立東紫竹小学校設立。」(①13頁) 「総神社の北に寺子屋としてスタートし，明治六年，待鳳校となった。」(①70頁(座談会「百年の足跡」より))
鷹峯小学校	**西紫竹学校** (「愛宕郡西紫竹大門黌」との記載もあり(①4頁))	明治6年3月13日開校式挙行 明治6年3月18日開校 (①11頁)	〔開校の経緯〕 「鷹峯小学校は，1873(明治6)年3月13日に愛宕郡西紫竹大門學として創立されました。」(②33頁) 「校舎建築 明治五年七月十八日　建営手続　同　八月三日　地築　同　八月二十五日　上棟　同　十一月十五日　竣工 明治六年三月十三日　開校式　明治六年三月十八日　開校」(①11頁) 〔関係者〕 初代校長海野敏行(①17頁) 創立時の建築関係者として，松野新九郎(総取締(区長))，村尾善兵衛(取締(戸長))，佐々木太兵衛(勘定方(戸長))，森田仁兵衛(普請取締(戸長))，川勝政治郎(普請取締)，今井治兵衛(普請取締)，佐々木伊兵衛(普請取締方)，滝川安兵衛(大工棟梁)の名が挙がっている(①11頁)
楽只小学校 (紫野小学校)	**蓮臺埜学校** (「蓮台野校」との記載もあり(①20頁))	前身となった私塾的学舎(寺子屋)は，慶応3年創立 (①18頁) 小学校は明治6年4月20日開校 (①20頁)	〔開校前の歴史〕 「「京都小学校五十年誌」(『京都小学五十年(季)誌』の誤りか―引用者注)によりますと，慶応3年に野口村の医師益井茂平翁がこれからの世の中では，教育が大切であると考え，私財を投じ私塾的学舎をつくったと書いてあります。(中略)益井茂平翁は，このような混乱した世の中ではありますが，身分制度がなくなり，皆が能力を十分に発揮できる世の中が，すぐ隣まで来ていることを知り，その社会で活躍するには教育が大切であるとして寺子屋をつくったのです。(中略)益井茂平翁がつくられた寺子屋では，「読・書・算ノ三科ヲ教授セリ」とあり，さらに「読書算三科ノ教授ハ頗ル村民ノ裨益ヲ為シツ，逐次進歩ノ傾向アリ。創立者ハ之ヲ喜ブト共ニ又鑑ミル所アリ，自己ガ医者トシテ必要上修得シタルドイツ語ヲ加ヘ，ソノ初歩ノ徒ニ授ケシガ如シ」(京都小学校五十年誌より)とある。おそらく，全国の寺子屋でドイツ語を教えたのは，蓮台野の寺子屋が最初ではないかと考えられます。」(①18，19頁) 〔開校の経緯〕 「記録によりますと，「学制統一。明治6年4月20日，当時ノ文教制ニ従ヒ始メテ系統アル教育法ヲ施スノ気運ニ遭遇シテ茲に新ニ蓮台野校ノ名称ノ下ニ学校ヲ開始シ，其開校式ニハ時ノ知事来リテ之ヲ挙グ」とある」(①20頁) 〔関係者〕 村の医者であり，寺子屋師匠であった益井茂平(初代校長) 茂平の父で，同じく学校の運営に尽力した益井元右衛門 創設期に経費を寄付した刃部として，益井の他に，井上伊三吉，鈴木宇兵衛など (①21頁など)
衣笠小学校	**小北山学校** (時期は不明だが，「平野小学校」と呼ばれていると記載(①8頁))	明治6年4月創設(①8頁)	〔開校の経緯〕 「葛野郡衣笠村大字小北山小字平野＝平野神社境内の東南隅千三百平方メートル＝に創設。」(①8頁) 〔関係者〕 創設時の教員として，榊原一郎(句読教師)，野村タネ(習字教師)の名があがる 年代は不明だが，その後，古谷和貴，上田貞典，大森謙蔵，徳田柾次郎，竹馬達三，湯浅兵馬といった教師があいついで奉職した，と紹介される (①8頁)
中川小学校	**中川小学校** (①56頁)	明治6年7月1日創立 (①56頁)	〔開校前の歴史〕 「小学校の開設までは，現在の婦人会館のところに，寺子屋という名称で，学校の役目を果して勉強されたと聞いています。」(①64頁) 〔開校の経緯〕 「明治六年七月一日，京都府葛野郡中川村字下ノ町四十一番地(現在京都市上京区中川北山町二百五十二番地にあたり，教員住宅として使用している)に本校を創立」(①65頁)

創設期の所在地	郡村名	本校・分校関係	組合関係（村名）	創設経費等費用	建物・立地関係	教員数・児童数（就学率）	出典
小野下の町一〇〇番地（記念誌の執筆当時，北区役所小野郷出張所の地）（①69頁）	葛野郡小野村	不明	不明	不明	不明	児童数は小野郷（小野村，大森村，杉坂村）で明治7年に272名（①80頁）	①小野郷校百周年記念委員編『小野郷校百年誌』(1974年，同委員発行)
杉坂道風町一番地（記念誌発行時，道風神社境内）に創立（①68頁）	葛野郡杉坂村（①68，209頁）	不明	不明（明治22年には，小野郷尋常小学校の分教場となる）（①93頁）	不明	不明	児童数は小野郷（小野村，大森村，杉坂村）で明治7年に272名（①80頁）	①小野郷校百周年記念委員編『小野郷校百年誌』(1974年，同委員発行)
記念誌発行当時，大森東町二番地（大森加茂神社境内）に創立。面積は当時の状況から判断して比較的広かった（500坪）と想定されている（①69頁）	葛野郡大森村（①69，209頁）	不明	不明（明治22年には，小野郷尋常小学校の分教場となる）（①93頁）	不明	不明	児童数は小野郷（小野村，大森村，杉坂村）で明治7年に272名（①80頁）	①小野郷校百周年記念委員編『小野郷校百年誌』(1974年，同委員発行)
明治6年に八条上西の西光寺の中に仮設したのち，明治9年9月16日に八条上西（旧名元銭座跡村，西光寺の向い東側の位置）に新築校舎を建築（①4頁）	愛宕郡柳原荘	不明	不明	不明	寺院（①2頁）明治9年の移転先では，村会所と同居（①4頁）	教員3名児童数120名（①2頁）	①崇仁小学校百周年記念事業実行委員会編『崇仁校百年の歩み』（1973年，同会発行）②京都市立崇仁小学校創立130周年記念事業実行委員会記念誌部編『創立130周年記念誌』（2003年，京都市立崇仁小学校発行）
教王護国寺（東寺）の寺領内の宝和院にあった寺子屋を改装して開校したとも言われているが。当時の東寺の塔頭には宝和院の名の寺はなく，宝菩提院という寺がある（②45，50頁）	葛野郡八条村	不明	6か村（中堂寺村，東塩小路村，西八条村，西九条村，七八条村）（③6頁）	不明	寺院（①3頁）	明治6年段階で，児童数は少数（①28頁）	①大内校開校百年史編纂委員会編『大内校開校百年史』（1971年，大内校開校百年記念事業実行委員会発行）②記念誌編纂部会編『京都市立大内小学校開校120周年記念誌『おおうち』』（1991年，大内小学校開校120周年記念事業実行委員会発行），③光徳校五十年史編纂委員会編『光徳校五十年史』（1975年，光徳五十周年記念事業委員会発行）
不明	葛野郡中堂寺村（①6頁）	不明	不明	不明	不明	不明	①光徳校五十年史編纂委員会編『光徳校五十年史』（1975年，光徳五十周年記念事業委員会発行）
不明	葛野郡西七条村	不明	不明	不明	不明	明治5年から7年で，教員3名，及び児童数198名（男子110名，女子88名）と伝わる。その後，明治8年から，6名，4名，8名，13名がそれぞれ増加している（①41頁）	①北尾誠一ほか編『七条校百年史』（1972年，七条校百周年記念事業実行委員会発行）

後継校(現存及び休校、閉校した小学校)の校名(令和3年3月現在)	郡中小学校名	開校年月日	開校前の歴史・開校の経緯・関係者等
小野郷小学校	**小野学校** (「小野村小学校」との記載もあり(①68頁))	明治7年創立 (月日不詳) (①68頁)	〔開校前の歴史〕 「当小野郷校においても寺子屋があった，教師内藤主馬(医師)，生徒男二十一名，女十四名，学科は習字，読，算であった。明治四年の調査記録にあり，旧管轄は仙洞御領となっている。」(①32頁) 〔開校の経緯〕 「時の村の代表者，日下部龍治郎氏はいちはやく幕末明治初頭の時の流れを察知して，村の行政について構想を考えていたものと思われる。特に京都における大学の設置計画，東京における大学の設置計画，政府の初等教育の設置計画，京都の番組小学校創設に刺激され，小野大森にある私塾寺子屋の教育情況等と比べて一日も早く小野村，大森村，杉坂村に学校創設の計画をいだくにいたった。唯小野大森だけでなく，日下部龍治郎氏の活動は広範囲で，葛野郡全域に渡っていた。それは明治五年に連合戸長の役職にあったことでもうかゞえる。(中略)このような全国的な学校創設の気運の中で，戸長龍治郎氏を中心に学校創設のための計画が具体的に進められたのである。(中略)戸長龍治郎氏は，小野村小学校，杉坂村小学校の創設のため京都府庁に足繁く通った。(中略)時の小野村戸長日下部龍治郎氏は，村民と協議の上小野村小学校を小野下の町一〇〇番地(現北区役所小野郷出張所の地)に創立する。」(①67-68頁) 〔関係者〕 村の代表者日下部龍治郎(連合戸長などを歴任)(①67頁など)
	杉坂村小学校 (①68頁)	明治7年創立 (月日不詳) (①68頁)	〔開校の経緯〕 「戸長日下部龍治郎氏は，杉坂村小学校を杉坂道風町一番地(現道風神社境内)に創立する」(①68頁) 〔関係者〕 村の代表者日下部龍治郎(連合戸長などを歴任)(①67頁など)
	大森村小学校 (①69頁)	明治8年創立 (月日不詳) (①69頁)	〔開校前の歴史〕 「大森には漢学塾があった。」(①32頁) 〔開校の経緯〕 「大森小学校を現大森東町二番地(現大森加茂神社境内)に創立する。」(①69頁)
【下京区】			
崇仁小学校 (下京渉成小学校)	**柳原学校** (「柳原小学校」との記載もあり(②6頁)) 明治7年10月3日では「柳原荘校」と称したとされる(①2頁)	明治6年9月16日仮設(創設) (①2, 109頁)	〔開校の経緯〕 「明治三十六年九月十六日に行なわれた柳原尋常小学校創立三十年式の祝文によると，柳原荘では，当時の戸長であった桜田儀兵衛氏等の尽力によって，明治六年九月十六日，八条上西の西光寺の中に，柳原小学校が仮設され，百二十の児童，三名の教員をもって，教授を開始した。」(①2頁) 〔関係者〕 学校の設置に尽力した戸長桜田儀兵衛(①2-3頁) 初代校長大森漸吉，二代校長柴田仁三郎，三代校長長岡恵俊(①109頁)
大内小学校 (梅小路小学校)	**八条学校**	明治5年10月16日開校 (①3頁)	〔開校前の歴史〕 「維新以前より全国社寺が財政上の不振より経営の困難がとなえられるようになった時，東寺も寺運下降の途をたどるようになり，それに伴いこの頃より寺領の中に寺子屋が設けられるようになり，当時，附近の子弟はここで学びました。(中略)ところが明治四年八月にいたって新政府の下に制度の改革があって全国の寺領が没収されるという事態がおこり，その上東寺に於ては宮中の御修法が廃止されることになり，ついに寺内も荒廃の極に達したものと思われ，寺の土地が他人に侵されたり，子院が他宗に合併されたりする有様にまでなりました。」(①3頁) 〔開校の経緯〕 明治5年に学制が発布されたので，「そこで，これを期として寺領内にあった寺子屋を村の管理とし改装してこれをそのまま小学校にすることとし，各村の関係者によってその運動がおこされ，ついに，明治五年十月十六日認められて，教王護国寺の寺領内において，八条学校の名称で小学校が開校されました。これが現在の大内小学校創立の姿です。」(①3頁)
	中堂小学 (①6頁)	明治8年か9年頃の設立と推定 (①6頁)	〔開校前の歴史〕 「わが光徳学区の地域は葛野郡中堂寺村で市街に隣接はしていたが，郡部のため御下賜金の恩恵にも浴せず，村内にあった寺子屋で子弟は学んでいました。」(①6頁) 〔開校の経緯〕 「その後(後の大内小学校の前身の1つである八条学校ができた後のこと—引用者注)村内(中堂寺村のこと—引用者注)に中堂小学なるものがありました。(明治八，九年頃の設立？その詳細は不明です。)」(①6頁)
七条小学校	**西七条学校**	明治5年創立 (①10頁)	〔開校の経緯〕 「西七条校として，山城葛野郡西七条村に新築校舎創設」 (①10頁)

創設期の所在地	郡村名	本校・分校関係	組合関係（村名）	創設経費等費用	建物・立地関係	教員数・児童数（就学率）	出典
東九条村御領，九條家の陶化殿を校舎として拝借して発足（①14頁）	紀伊郡 東九条村	不明	不明	不明	邸宅（公家） （①14頁）	教員数3名 （①15-16頁）	①『陶化校百年のあゆみ』 （1973年，陶化小学校百周年記念事業推進委員会）
吉祥院村船戸36，37，38番地に創立され，建設当時は817坪，建坪109坪，校舎は古家を買収したものであった （①11頁）	紀伊郡 吉祥院村	上鳥羽校分校 （①11頁）	不明	不明	不明	教員3名 （①11頁）	①京都市立吉祥院小学校創立百周年記念誌委員会編『京都市立吉祥院小学校百周年記念誌』 （1972年，京都市立吉祥院小学校創立百周年記念事業協賛会発行）
上鳥羽村上ノ町北端 （①7頁）	紀伊郡 上鳥羽村	上鳥羽校本校 （②11頁）	不明	不明	不明	教員数4名 （①7頁）	①『上鳥羽小学校100周年記念誌「上鳥羽校百年史」』 （1972年，上鳥羽小学校100周年記念誌委員会発行） ②京都市立吉祥院小学校創立百周年記念誌委員会編『京都市立吉祥院小学校百周年記念誌』 （1972年，京都市立吉祥院小学校創立百周年記念事業協賛会発行）
大藪村字宮ノ脇第七番地。竹林を開墾して校舎を建築して創設。敷地441坪，建坪数60坪，1棟4教室（①3，11頁）	乙訓郡 大藪村	不明	上久世村，筑山村，久世村，東土川村及び神川村 （①11頁） 一方，明治9年7月に，神川神社境内に校舎移転し，神川校と称した久我村ほか5か村組合立の学校が創立する （②2-3頁）	1年間の経費は300円以内にて支弁 （①12頁）	村役場，警察分署 （①11頁）	教員4名 （①11頁） 児童数男子70名，女子40名 （①12頁）	①大藪小学校創立百周年記念事業実行協力会編『大藪校百年誌』 （1973年，同会発行） ②神川小学校百周年記念事業委員会編『京都市立神川小学校百周年記念誌』（1972年，同会発行）

【南区】

後継校(現存及び休校、閉校した小学校)の校名(令和3年3月現在)	郡中小学校名	開校年月日	開校前の歴史・開校の経緯・関係者等
陶化小学校 (凌風小中学校)	**東九條学校** (「紀伊郡第二区東九条校」,「陶化小学校」との記載もあり(①14-15頁)) 明治6年3月16日に「紀伊郡第一区東九条校」と開校 (①16頁)	明治5年6月24日 開校(授業開始) (①15頁) 明治6年3月16日が開校記念日 (①16頁)	〔開校前の歴史〕 「明治三年東京遷都以来, 東九条御領の陶化殿が空家の形になっていたので, 郷士上田禎三郎氏は, 東九条の人々を教育しようとの考えから, 陶化殿を拝借して, 私塾を開きつつあった。」(①14頁) 〔開校の経緯〕 「その折, 二条家の郷士田中吉衛門氏, 鷹司家の郷士石羽秀宅氏等が相寄り, 学校創設の話し合いがなされた。協議の結果, 校舎の新築には多額の費用も要するので, 九条家の陶化殿を拝借することに決め, 明治五年六月二十四日に, 紀伊郡第二区東九条校として授業を開始したのである。(中略)その教育内容は, 句読と筆道と算術の三科目であった。」(①14-15頁) 〔関係者〕 創設に尽力した, 田中吉衛門(二条家の郷士), 石羽秀宅(鷹司家の郷士) 創設時の教員は, 上田禎三郎(筆道助教), 徳田均平(句読助教), 安藤益興(算道教道補助)の3名, 明治6年時の教員は, 上田・安藤に尾崎盛儀(准九等訓導) (①14-16頁)
吉祥院小学校	**吉祥学校**	明治5年10月17日 (①42頁)	〔開校前の歴史〕 「本校も創立前には西条(今の西の内町)にあった寺子屋か東寺までかよったらしい。それ以前には北条に(現在の学校附近)寺子屋があったが詳しいことはわかっていない。」(①11頁) 〔開校の経緯〕 「本校は明治五年学生発布となってから, 紀伊郡第四学区上鳥羽村の分校として創立され, 初めから吉祥院校とは公称されなかった。(中略)この頃は句読教師・筆道教師・算術教師としての専科制度であり, 畳敷きの教室で個別指導をしたので, 寺子屋と大差がなかったといえる」(①11頁) 〔関係者〕 紀伊郡第四学区区長安田源右衛門, 副区長村岡浅右衛門 最初の教師陣宮川為質(句読兼算道助教), 鈴木仲三函(句読助教), 榎泰造(算術助教) (①11頁)
上鳥羽小学校	**上鳥羽学校** (「人民共立小学校」との記載もあり(①26頁))	明治5年8月20日創立 (①7頁)	〔開校の経緯〕 「上鳥羽小学校は明治5年8月20日紀伊郡上鳥羽村上ノ町北端(現在上鳥羽嶋田町1番地あたり)に創設せられ, 教師4人という記録の外, どんな建物で, 教育内容はどの程度のものであったかは, 全く不明である。」(①7頁)
大藪小学校	**大藪学校** (「大藪小学校」との記載もあり(①3, 11頁))	明治6年7月1日創立 (①3, 11頁)	〔開校前の歴史〕 「沿革史をひもとくと,「学校創立以前ノ本村教育ハ実ニ寂寥タル有様ニテ唯寺子屋モ　アリテ多クハ有富ノ子弟ヲ集メ, 手習ヒヲ主トシテ読方ヲ授ケタリ, 女子ニ至ッテハ殆ンド学ブモノハナカリキ, 当時上久世ニ　神主松本主計, 高畑良介, 下久世ニ　木村吉右衛門等ノ諸氏, 自宅ニ於テ是等ノ児童ヲ教授シタリ, 其他寺院ノ僧侶ハ三々五々子弟ヲ集メテ教授シタリ。算術ノ如キハ余リ進マズ寺子屋ニ於テハ　殆ンド教授セザリシヲ以テ東寺辺マデ師ヲ求メテ通ヒシモアリト言フ, 其他多クハ　所在ノ先覚者ニ就キテ主ニ珠算ヲ操リシノミナリトゾ(中略)」とあります。」(①3-4頁) 〔開校の経緯〕 沿革史を引用して,「山城国乙訓郡大藪村字宮ノ脇第七番地ヲ開墾シ, 校舎及村役場, 警察分署ノ三棟ヲ建築ス, 後常平倉一棟ヲ建設ス, 其敷地数四百四拾壱坪壱棟ニテ, 四教室ニ区画ス, 是現在ノ敷地ナリ」(①3頁) 〔関係者〕 開校前に地域で教育をしていた人物として, 松本主計, 高畑良介, 木村吉右衛門の名があがる(①3-4頁) 開校当初の教員4名, 句読師佐藤寅太郎, 同助教木村俊吉, 習字師木村吉右衛門, 算術師芳山宗右衛門 (①11頁)

創設期の所在地	郡村名	本校・分校関係	組合関係（村名）	創設経費等費用	建物・立地関係	教員数・児童数（就学率）	出典
岩倉村小字門前町実相院の庫裏で開設（①9頁） 明治8年に地区改正による分離で湯口町27番地に新たに建設 （①9頁，②50頁）	愛宕郡岩倉村	不明	6か村組合 （長谷村，花園村，中村，幡枝村，高野村） （①9頁）	不明	寺院 （①9頁）	児童数約50名 （①9頁）	①竹田源著『岩倉今昔（上）』 （1979年，明徳小学校PTA発行） ②明徳小学校PTA風土記特別委員会編『岩倉風土記—親と子のために—』 （1990年，明徳小学校PTA発行）
木野愛宕神社の南 （①9頁）	愛宕郡木野村（推定） （①9頁）	明治8年の分離の記述はなされるが，この関係の詳細は不明	2か村組合 （幡枝村） （①9頁）	不明	不明	不明	①竹田源著『岩倉今昔（上）』 （1979年，明徳小学校PTA発行） ②明徳小学校PTA風土記特別委員会編『岩倉風土記—親と子のために—』 （1990年，明徳小学校PTA発行） ③中村治ほか編『洛北岩倉誌』 （1995年，岩倉北小学校創立20周年記念事業委員会発行）
長谷小字宮ノ下（長谷八幡宮の西側） （①9頁）	愛宕郡長谷村（推定） （①9頁）	明治8年の分離の記述はなされるが，この関係の詳細は不明	3か村組合 （中村，花園村） （①9頁）	不明	不明	不明	①竹田源著『岩倉今昔（上）』 （1979年，明徳小学校PTA発行） ②明徳小学校PTA風土記特別委員会編『岩倉風土記—親と子のために—』 （1990年，明徳小学校PTA発行） ③中村治ほか編『洛北岩倉誌』 （1995年，岩倉北小学校創立20周年記念事業委員会発行）
妙伝寺境内の一画。また，この頃は村役場も同じ境内内にあった（①103頁）	創設時の村名は記載なし	不明	不明	不明	寺院 （①16頁）	不明	①八瀬小学校創立百周年記念事業実行委員会編集部編『八瀬校百年史』 （1977年，八瀬小学校創立百周年記念事業実行委員会）
大長瀬町179番地 （梅の宮神社に隣接することから，「梅の宮校舎」と呼ばれる） （①21頁）	愛宕郡大長瀬村 （①21頁）	大原校本校 （のちに小出石校等の分教室の本校に） （①25頁）	8か村連合 （戸寺・井出・上野・野村・草生・来迎院・勝林院） （①21頁）	不明	不明	不明	①大原百年史編纂委員会編『大原百年史』 （1975年，大原小学校創立百周年記念事業委員会）
久多村字瀧ノ下5番6番合地 （①5頁）	愛宕郡久多村 （①1頁）	不明	不明	不明	不明	不明	①『久多校百年誌』 （1976年，久多小学校創立百周年記念事業実行委員会）
静市野役場の東隣に役場と共に新設 （①1頁）	愛宕郡野中村（推定） （①138頁）	不明	不明	本文に記述はないが，それがわかる資料の存在は示唆 （①138頁）	役所 （①1頁）	不明	①市原野小学校創立百周年記念事業委員会記念誌委員編『「いちはらの」市原野小学校創立百周年記念誌』 （1976年，市原野小学校創立百周年記念事業委員会発行）
静市野村大字静原小字城谷ノ内真路山 （①9頁）	愛宕郡静市野村 （①9頁）	不明	不明	不明	神社 （①9頁）	不明	①静原小学校創立百周年記念事業実行委員会記念誌委員編『静原百年史』 （1975年，静原小学校創立百周年記念事業実行委員会）

【左京区】

後継校（現存及び休校、閉校した小学校）の校名（令和3年3月現在）	郡中小学校名	開校年月日	開校前の歴史・開校の経緯・関係者等
明徳小学校	**岩倉学校** （「岩倉小学校」との記載もある（①9頁））	明治6年3月9日創設 （①9頁）	〔開校前の歴史〕 「岩倉の教育は明治維新前から始まっていたという。昭和5年の「村誌」に「明治4年以前は，実相院の家中，または寺等に於て学に志す者の子弟のみを集め，寺小屋教育を行えり。生徒は極めて少数なりしが，やゝ深き学問を教授せり。」とある。昭和17年，国民学校時代の「本校沿革史」によれば「維新前には，岩倉部落は実相院の家中，柏村修平氏宅（中略），三好長経氏宅（中略），慈雲庵（授業者入谷左右輔氏）で長谷部落は無縁堂（授業者不詳）でいわゆる寺小屋教育が行われていた。（中略）昼よりも夜学に通う者の方が多く，明治の初めごろには生徒数30名ぐらいであった」とある。」（①8頁） 〔開校の経緯〕 「明治6年3月9日，岩倉村・長谷村・花園村・中村・幡枝村・高野村（今の上高野）の6ヵ村を愛宕郡第7学区として岩倉小学校を創設した。当時の生徒数は約50名。場所は岩倉村小字門前町，実相院門跡庫裏を充てた。」（①9頁）
	木野小 （①9頁）	明治8年 （①9頁）	〔開校の経緯〕 「明治8年　地区改正で愛宕郡第3区になり高野村を分離するとともに地区別小学校に（岩倉学校は—引用者注）わかれた。（中略）木野，幡枝を校区とする。」（①9頁）
	長谷小 （①9頁）	明治8年 （①9頁）	〔開校の経緯〕 「明治8年　地区改正で愛宕郡第3区になり高野村を分離するとともに地区別小学校に（岩倉学校は—引用者注）わかれた。（中略）明治8年の分離で，長谷・中・花園を区域とする長谷尋常小学校が，長谷小字宮ノ下にできる。」 （①9頁）
八瀬小学校	**八瀬小学校** （①頁）	明治10年8月18日開校式挙行 （①16頁）	〔開校前の歴史〕 「本校は，学制発布前の明治五年より，村内妙伝寺において，当時の住職，北渓貞恭氏が，教育に任も兼ね，児童を教導していた。」（①16頁） 〔開校の経緯〕 「独立校舎の必要を感じ，妙伝寺境内の一部を借地して，明治八年より建設に着手，明治十年八月十八日に開校式を挙行した。」（①16頁） 〔関係者〕 学制発布前からの地域の教育者，北渓貞恭（妙伝寺住職）（①16頁）
大原小中学校　大原小学校	**大原校** （①163頁）	明治8年5月28日 創立 （①21頁）	〔開校前の歴史〕 「創立前までは，子供達は各自懇ろな寺子屋に通い，男子は「読・書・そろばん」を，女子は主として「裁縫」を習得した。大原には，古くからの寺院があり，郡部山間にしては，比較的，庶民教育に恵まれた地であった。」（①21-22頁） 〔開校の経緯〕 市中では学制に先立ち番組小学校が関係し，「当時の行政は，寺子屋を廃し小学校の設立を強く指導していたが，郡部各村においては，学校設立資金の捻出はことさら苦しく，都心より五里を隔てる大原においても，当時の教育御下賜金制度の恩恵には浴することもできずに，学校設立には学制発布後三年の歳月を要したのであった。」 （①22頁） 〔関係者〕 初代校長岩崎英寿（草生村桂徳院僧侶）（①21頁）
大原小中学校　久多小学校	**盈進校** （①5頁）	明治10年4月 創立 （①10頁）	〔開校の経緯〕 「本校ノ創立ハ，明治10年4月ニシテ初メ盈進校ト称ス。後，明治20年4月久多尋常小学校ト改称ス。 本校学区域ハ　本村一円ニシテ，左ノ五部落トス（中略）本校ハ当初ヨリ　単級組織ナリ 以上は，久多小学校沿革史第1ページに記載されていることがらである。（中略） 一説には小学校創立は明治5年5月8日で，近村では最も早い時期であり，近村から久多の小学校へ学びに来て居られたということであるが，確かな記録もないので沿革史の通りとする。」（①10頁）
市原野小学校	**野中小学校** （①1頁）	明治8年4月8日創立 （①1頁）	〔開校の経緯〕 「京都府愛宕郡野中小学校として創立」 （①1頁）
静原小学校	**静原校** （①9頁。「愛宕郡第八組静原小学との記載もあり（①9頁））	明治8年6月20日創立 （①27頁）	〔開校前の歴史〕 「なお明治八年六月二十日の開校に先立つ同年四月八日，静原村字浦谷普済寺の一室で岩佐庵氏による寺子屋式授業がしばらくあったと伝えられているが詳らかにする資料はない。」（①12頁） 〔開校の経緯〕 「創立当時の静原校の位置は静市野村大字静原小字城谷ノ内真路山と記録されており，当時の小学校のほとんどが寺社境内内地に創設されているとおり吾が静原校も明治八年六月に現在の静原神社の境内地に創設され，昭和三十三年十月に峠にある現校舎が新築されるまで八十有余年の長きに亘る学び舎となった。」（①9頁） 〔関係者〕 初代校長　岩佐庵（①218頁）

創設期の所在地	郡村名	本校・分校関係	組合関係（村名）	創設経費等費用	建物・立地関係	教員数・児童数（就学率）	出典
旧鞍馬村役場内（①17頁）	愛宕郡鞍馬村（①17頁）	不明	不明	不明	寺院（かつて住民の集会所であった「真堂」を使用）（①76頁）	不明	①鞍馬小学校百年誌編纂委員会編『鞍馬校百年誌』（1975年，鞍馬小学校創立百周年記念事業委員会発行）
貴船神社の龍髯閣の下の段の寺を利用（①76頁）	愛宕郡貴船村	不明	不明	不明	神社寺院（①76頁）	不明	①鞍馬小学校百年誌編纂委員会編『鞍馬校百年誌』（1975年，鞍馬小学校創立百周年記念事業委員会発行）
不明	愛宕郡二ノ瀬村（①76頁）	不明	不明	不明	空家（総堂の前に立地）（①76頁）	不明	①鞍馬小学校百年誌編纂委員会編『鞍馬校百年誌』（1975年，鞍馬小学校創立百周年記念事業委員会発行）
字別所の中央（①9頁）	愛宕郡別所村（②14頁）	不明	不明	不明	建物に民家又は寺院を借入れ（①9頁）	不明	①『別所校創立百周年記念誌』（1976年，別所校創立百周年記念事業実行委員会） ②八桝小学校百年誌編纂委員会編『八桝百年誌』（1976年，八桝小学校創立百周年記念事業実行委員会発行）
記念誌発行当時，花背地域で忠魂碑が建っていた場所に創設（①15頁）	愛宕郡大布施村（②14頁）	不明	不明	不明	建物は堂舎（①15頁）	不明	①八桝小学校創立百周年誌編集委員会編『八桝百年誌』（1976年，八桝小学校創立百周年記念事業実行委員会発行）
記念誌発行当時，当該地域の集会所として活用されていた地に創設（①13頁）	愛宕郡八升村（②14頁）	不明	不明	不明	寺院（①15頁）	不明	①八桝小学校創立百周年誌編集委員会編『八桝百年誌』（1976年，八桝小学校創立百周年記念事業実行委員会発行）
記念誌発行当時，当該地域の公民館のあったところに創設（①15頁）	愛宕郡原地新田村（①14頁）	不明	不明	不明	建物はお堂（①15頁）	不明	①八桝小学校創立百周年誌編集委員会編『八桝百年誌』（1976年，八桝小学校創立百周年記念事業実行委員会）
吉田村の華族吉田家の旧宅の地（①28頁）	愛宕郡吉田村（①28頁）	不明	不明	不明	邸宅（①28頁）	不明	①鈴鹿隆信編『錦林小学校百周年記念誌「錦林校百年史」』（1969年，錦林小学校百周年記念事業委員会発行）
明治7年2月10日に開校したのは，乗願院南側の寺院毘沙門堂だった。明治10年10月，北白川天神宮の西側へ，間口10間・奥行3間半の平家建校舎を新築し移転した（①10頁）	愛宕郡白川村	不明	詳細は不明だが，明治10年から19年までは浄土寺村からも子どもが通学していた（①10頁）	不明	寺院，後に神社（①10頁）	教員2名 児童は開校時約30名で，就学率は推定11～13%とされる（①10頁）	①『北白川百年の変遷』（1974年，北白川小学校創立百周年記念委員会発行） ②『北白川小学校創立120周年記念誌』（1994年，北白川小学校創立120周年記念委員会発行）
森本町の下鴨神社公文所に開校。校地面積2反8畝1歩。公文所の土地と建物，公文所司の役宅は，愛宕郡第三区下鴨校と愛宕郡下鴨社戸長役場として使用された（①8頁）	愛宕郡下鴨村（①8頁）	不明	不明	不明	神社戸長役場（①8，35頁）	不明	①『創立八十周年記念誌』（1953年，下鴨小学校創立八十周年記念会発行）

後継校(現存及び休校、閉校した小学校)の校名(令和3年3月現在)	郡中小学校名	開校年月日	開校前の歴史・開校の経緯・関係者等
鞍馬小学校	**鞍馬小学校** (①17頁)	明治8年10月16日 (①17頁)	〔開校の経緯〕 「学校沿革史の初頭に創立当時に関し左記のように記載されている。 「本校は明治八年十月十六日の創立にして当時の記録充分ならざれば之を詳にするを得ざるも鞍馬村役場地内に狭隘なる一校舎を有したりしが明治廿二年町村制実施の際鞍馬・二ノ瀬・貴船の三村合併し鞍馬村と改称し爾来，鞍馬に本校をおき二ノ瀬・貴船に分校を設けたり」 しかし，これも確たる資料をもとに書かれているかどうかは不明である。」(①17頁)
	貴船学校 (「貴船小学校」との記載もあり(①81頁))	明治7年(推定)(①76頁，及び郡部小学校一覧の記載より)	〔開校の経緯〕 「鞍馬地域に小学校が設立されたのは，明治七年(一八七四)から十年(一八七七)迄の間で，貴船村は，神社の龍髯閣(りゅうぜんかく)の下の段にあった寺を利用し，二ノ瀬村は，総堂の前の空家，鞍馬村は。二王門前の石段の西側に寺の真堂(しんどう)があって，古くは住民の集会所ともなっていたのを学校としました。」(①76頁)
	二ノ瀬小学校 (①83頁)	明治7年から明治10年までの間に創設 (①76頁)	〔開校の経緯〕 「鞍馬地域に小学校が設立されたのは，明治七年(一八七四)から十年(一八七七)迄の間で，貴船村は，神社の龍髯閣(りゅうぜんかく)の下の段にあった寺を利用し，二ノ瀬村は，総堂の前の空家，鞍馬村は。二王門前の石段の西側に寺の真堂(しんどう)があって，古くは住民の集会所ともなっていたのを学校としました。」(①76頁)
花背小中学校 別所小学校(花背小学校)	**別所校** (②13頁)	明治8年6月1日創立 (①9頁)	〔開校の経緯〕 「字別所の中央にあり，明治8年6月1日の創立にして，其後明治23年4月町村制実施の際，村の合併により新村内に1校を設け，花背尋常小学校と称し本校は該校の分校となれり。」(①9頁)
花背小中学校 八桝小学校(花背小学校)	**布施校** (①15頁)	明治8年6月から明治8年12月の間に開設 (①15頁)	〔開校の経緯〕 「山間僻地においても小学校の開設は時代の要請となった。花背地域では，明治八年六月先ず別所校が開校し，十二月までの間に大布施，八升，原地新田の三ヵ村にそれぞれ小学校が設立された。(中略)大布施は今忠魂碑の建っている場所に当時あった堂舎を教場としてそれぞれ開設されたのである。」(①13-15頁)
	八升校 (①15頁)	明治8年12月開設 (①15頁)	〔開校の経緯〕 「山間僻地においても小学校の開設は時代の要請となった。花背地域では，明治八年六月先ず別所校が開校し，十二月までの間に大布施，八升，原地新田の三ヵ村にそれぞれ小学校が設立された。(中略)八升は現在尚その姿をとどめている観音堂内に(中略)開設されたのである。」(①13-15頁)
	原地新田校 (①14-15頁)	明治8年6月から明治8年12月の間に開設 (①15頁)	〔開校の経緯〕 「山間僻地においても小学校の開設は時代の要請となった。花背地域では，明治八年六月先ず別所校が開校し，十二月までの間に大布施，八升，原地新田の三ヵ村にそれぞれ小学校が設立された。(中略)原地校は現在公民館のあるところに(中略)開設されたのである。」(①13-15頁)
錦林小学校	**吉田学校**	明治5年10月創立 (①28頁)	〔開校の経緯〕 「吉田校は，第32番組小学校等と共に錦林校の前身の一つである。当時吉田の地は愛宕郡に属していた。記録も写真も残っていないので，その面影をしのぶことはできないが，吉田村の華族吉田家の旧宅に開設された小学校で，明治26年の合併まで続いた。」(①28頁)
北白川小学校	**白川学校** (「北白川小学校」とも記載(①10頁))	明治7年2月10日開校 (①10頁)	〔開校の経緯〕 「明治7年2月10日，白川小学校が毘沙門堂を借りうけて開校した。当時乗願院の南側にあった毘沙門堂では村の子弟に手習を教えていたらしく，狭隘ではあったが，村の財政事情等から，とりあえずここで仮学校を設けることになったようである。」(①10頁) 〔関係者〕 初代校長沢井隆教(①122頁)
下鴨小学校	**下鴨学校** 明治10年4月に「愛宕郡第三区下鴨校」と改称(①3頁)	明治6年4月5日開校 (①3頁)	〔開校の経緯〕 「明治元年閏四月，長谷信篤が京都府知事に就任，(中略)明治元年九月小学校を設けるよう令せられた。(中略) 当時下鴨は愛宕郡の内にあり，その六十一ヶ村を十区に分つた中の第三区に編入されていた。その頃下鴨には下鴨神社の社家を始めその他に相当有識の人士があつたが，鴨長明の末裔である菊長興氏は当時十六才で京都市上京区の学校建設の事務員として通勤していた。同氏は勤務の余暇に村の有識者に対し熱心に国民教育の必要を力説した。村役人その他の人々も大いに之に賛同学校設立の運動が起された。校地に適当な所がなく下鴨神社に敷地分与を願い出たところ神社と下鴨村との古来からの関係から鴨一社総会議が開かれ，『教育の事はまことに大切である。森本町にある下鴨神社公文所の土地並に公文所の建物，公文所司の役宅の全部を無償で譲渡するから学校と村の会議所にあてるよう。』と一決した。(中略)愈々明治六年四月五日に小学校が開設された。」(①7-8頁) 〔関係者〕 学校開設に奔走した人物として，鈴木元徳(大庄屋)，松永平兵衛(年寄)，柴田正義，鴨脚光興，西野顕繁，田中周義，宮田勝邦，小辻市郎兵衛(脇年寄)，中川儀兵衛(脇年寄)，大崎邦彦，小松彌左衛門，ほか下鴨神社の関係者が紹介(①8頁)

創設期の所在地	郡村名	本校・分校関係	組合関係（村名）	創設経費等費用	建物・立地関係	教員数・児童数（就学率）	出典
記念誌作成時当時，一乗寺集会所があった位置 （②16頁）	愛宕郡一乗寺村	不明	不明	不明	不明	教員2名 児童数108名 （①49頁）	①京都市立修学院小学校・同窓会・育友会編『山ふもとの学校　修学院小学校創立50周年記念誌』 （1967年） ②京都市立修学院小学校創立100周年記念事業会記念誌編集委員会『京都市立修学院小学校創立100周年記念誌』 （2016年，京都市立修学院小学校創立100周年記念事業会発行）
自治会記念誌を紹介しながら，かつて校舎が，修学院離宮の詰所付近にあった，と紹介 （①51頁）	創設時の村名は記載なし	不明	不明	不明	不明	教員2名 児童数87名 （①50頁）	①京都市立修学院小学校・同窓会・育友会編『山ふもとの学校　修学院小学校創立50周年記念誌』 （1967年） ②修学院小学校育友会風土記特別委員会『こどものための修学院風土記』 （1987年，修学院小学校育友会・修学院小学校同窓会・修学院小学校発行）
記念誌作成当時，上高野集会所があった位置 （②16頁）	創設時の村名は記載なし	不明	不明	不明	不明	教員2名 児童数75名 （①51頁）	①京都市立修学院小学校・同窓会・育友会編『山ふもとの学校　修学院小学校創立50周年記念誌』 （1967年） ②京都市立修学院小学校創立100周年記念事業会記念誌編集委員会『京都市立修学院小学校創立100周年記念誌』 （2016年，京都市立修学院小学校創立100周年記念事業会発行）
松ヶ崎堀町の日蓮宗妙泉寺の一坊を教室とした。古老は，妙泉寺六坊のうちの「止静院」を校舎として，寺子屋式の教場をもって発足したのではないかと語っている（①4-5頁） 以後，妙泉寺内の土地を整備して，学校を整えていく （①15-24頁）	愛宕郡松ヶ崎村（①14頁）	不明	不明	明治9年に建てられた校舎は，建築費608円97銭1厘（①22頁） 明治七年の松崎村民費課帳によれば，同年の小学校諸費は年間85円 （①14頁） 松ケ崎村民費記帳によると，同年の学校費は53円82銭で，明治11年においては，学校費140円43銭6厘（①26頁）	寺院 （①4頁）	教員1名 （①4頁） 児童数は明治9年1月1日現在で，男子32名，女子10名 （①27頁）	①松ケ崎小学校創立百周年記念誌編さん委員会編『松ケ崎百年史』 （1973年，松ケ崎小学校創立百周年記念会発行）
黒田村広河原能見口（①5頁）	北桑田郡黒田村（①5頁）	有斐校分校（①5頁）	不明	不明	不明	不明	①堰源校創立百周年記念事業委員会『堰源校創立百周年』 （1975年，同会発行）

後継校(現存及び休校、閉校した小学校)の校名(令和3年3月現在)	郡中小学校名	開校年月日	開校前の歴史・開校の経緯・関係者等
修学院小学校	**一乗学校** (「一乗寺小学校」との記載もあり(①49頁))	明治6年5月創立 (①49頁)	〔開校の経緯〕 「明治6年　5月　一乗寺尋常(ママ)小学校創立」 (①49頁)
	修学院校 (①51頁。「修学院小学校」との記載もあり(②30頁))	明治8年8月創立 (①50頁)	〔開校の経緯〕 「明治8年　8月　修学院尋常(ママ)小学校創立」 (①50頁)
	高野小学校 (①51頁)	明治9年3月創立 (①51頁)	〔開校の経緯〕 「明治9年　3月　高野尋常(ママ)小学校創立」 (①51頁)
松ヶ崎小学校	**松ケ崎校** (①4頁)	明治6年4月18日創立 (①4頁)	〔開校前の歴史〕 「本校の沿革史の前文によると,「現校舎の位置には(中略)日蓮宗祇□の寺院となった日蓮宗の五ケ院あり,止静院,実成院,大乗院,宝泉院,玉禅院と妙泉寺を合して「妙泉寺六坊」のあった所であって,日蓮宗の学校(壇林)があり,全国より宗僧来って修行したので土着民に影響を及ぼし,早くより寺子屋が開かれ(現在の学校の西隣),往時戸数五十戸(実際は九十五戸)程であったが,常に来て学ぶ者四十人程度であったという。」」(①4頁) 〔開校の経緯〕 沿革史の記載によると,「明治五年八月学制発布と共に学校創設の気運が起り,明治六年松ケ崎堀町の日蓮宗妙泉寺の一坊を教室として,先生一人生徒四十人程の第三大学区第五中学愛宕郡松ケ崎小学校が誕生した」とされ,「寺子屋の延長として発足した」とされる(①4頁)
堰源小学校	**有斐校分校** (①5頁)	明治8年8月 (①8頁)	[開校前の歴史] 「明治8年の学校創立前は,広河原も,東禅寺の住職,または愛宕郡花背村の葛西医師について,読書算のいわゆる寺子屋教育が行われていた。明治5年,学制が布かれるや,広河原にも学校創立の計画がたてられ,当時山国村から実質的な独立を果たした直後であり,学校創設についても,広河原村民が一丸となって事に当ったことは想像される。」(①8頁) [開校の経緯] 「沿革史によると「明治8年8月,黒田村有斐校の分教場を,広河原能見口に設立し,医師葛西元仲をへいして教師となし,始めて学校教育を施すこととなれり(後略)」」(①8頁)

創設期の所在地	郡村名	本校・分校関係	組合関係（村名）	創設経費等費用	建物・立地関係	教員数・児童数（就学率）	出典
創立当時は西本願寺山科別院内に3つの建物（借地建家坪数，128坪25.5厘）を借り受け，仮校舎として使用 （①27頁）	宇治郡東野村	東野校本校 （①1頁）	20か村組合 （椥辻村，大宅村，大塚村，音羽村，四ノ宮村，安朱村，竹ヶ鼻村，上野村，御陵村，厨子奥村，西野村，川田村，で本校を創立。小山村，髭茶屋村，八軒町で1つの分校，北花山村，上花山村，清閑寺村で1つの分校，日ノ岡村で1つの分校を設立） （①26-27頁，②5-6頁）	不明	寺院 （①1頁）	教員は4名 （①24頁） 児童数男178名，女77名，計255名 （①1頁）	①山階校創立百周年記念事業委員会編『山階校創立百周年記念誌　山階』 （1972年，同会発行） ②醍醐小学校記念事業実行委員会・醍醐小学校育友会編『醍醐百年誌』 （1972年，醍醐小学校百周年記念事業実行委員会発行）
日ノ岡光照寺に開設 （①1頁）	宇治郡日ノ岡村 （①1，26-27頁）	東野校分校 （①1頁）	20か町村組合に所属 （①26-27頁）	不明	寺院 （①1頁）	不明	①山階校創立百周年記念事業委員会編『山階校創立百周年記念誌　山階』 （1972年，同会発行）
不明	宇治郡川田村 （①1，26-27頁）	東野校分校 （①1頁）	20か町村組合に所属 （①26-27頁）	不明	不明	不明	①山階校創立百周年記念事業委員会編『山階校創立百周年記念誌　山階』 （1972年，同会発行）
北花山福応寺に開設 （①1頁）	宇治郡北花山村 （①1，26-27頁）	東野校分校 （①1頁）	20か町村組合に所属 （①26-27頁）	不明	寺院	不明	①山階校創立百周年記念事業委員会編『山階校創立百周年記念誌　山階』 （1972年，同会発行）
明治5年9月28日，勧修寺内，山階の宮御殿の一部を借りうけて校舎とした。明治10年，勧修寺と学校の間でかわされていた教室の移転問題が解決した （①9，11頁）	宇治郡勧修寺村	不明	5か村組合 （小野，西野山，栗栖野，北小栗栖） （①9頁）	開業の頃教師の月給は4円だったという。明治7年には俸給は訓導が十等級で6円～30円，試補が五等級で1円50銭～5銭，授業生が三等級で25銭～1円だった （①9頁） 明治10年に勧修寺と学校の間の教室の移転問題が解決した。学校は1500円の移転料を要求していたが700円となった。500円は明治13年12月7日に即金で，残り200円は明治15，16年に支払われた。新校舎の建設費は2000円だった （①9，11-12頁）	寺院・宮御殿 （①9頁）	不明	①『京都市立勧修小学校百周年記念誌』 （1972年，勧修小学校創立百周年記念事業委員会発行）

上嵯峨村字大門の地に，旧招慶院を校舎として開校し，水尾・原・越畑に分校を設置した（②21頁）	葛野郡上嵯峨村	上嵯峨校本校 （②21頁）	5か村連合 （天竜寺，水尾，原，越畑） （①21頁）	創設期の情報は不明 （①には明治10年代から20年代にかけての校舎整備に関する記述がある）	寺院 （②21頁）	不明	①京都市立嵯峨小学校創立百周年記念誌編集委員会編『京都市立嵯峨小学校創立百周年記念誌』 （1973年，同会発行） ②京都市立嵯峨小学校創立百二十周年記念誌編集委員会編『京都市立嵯峨小学校百二十周年記念誌』 （1993年，同会発行）

【山科区】

後継校(現存及び休校、閉校した小学校)の校名(令和3年3月現在)	郡中小学校名	開校年月日	開校前の歴史・開校の経緯・関係者等
山階小学校	**東野学校**	明治5年5月6日開校 (①1頁)	〔開校前の歴史〕 「江戸時代　山科の教育がどのように行われたかについては，詳細なことはわからないが，記録によると，各字ごとに寺小屋教育が実施されていたようである」(①22頁) 〔開校の経緯〕 「明治二年三月再度の東幸が決まると，(中略)教育を振興して人材を養成せんと考えた。山科郷でも京都府属，郡政係長，長田重遠氏が出張し，各村の庄屋年寄を招集し，小学校設立の必要を勧告し，九名周旋方を命じ，明治五年五月六日，本派本願寺，山科別院の一部を借受け，各村より，児童を募集して男子，一七八名，女子七十七名，計二五五名をもって開校した。校名を仮に東野校として，句読師矢部文戴，助教富田周夫，筆道助教西谷湛水，算道助教柴山太郎作の各教師で教育が始められた。(中略)沿革史によると，開校当日の式典は，対面所を以て式場となし，正面に講座を設け，右方の一壇，高き所を来賓席とし，午前十時三教師，生徒，周旋方，庄屋，大庄屋，その他有志等一同着席し，次に知事代理典事広瀬範治，華族引立掛，葉室長邦，同六角博道は各衣冠を正して着席し，属官二名に陪従せり。是に於て広瀬典事は起って開校の旨を告ぐ。矢部文戴句読師，孝経開宗明義章を講し，広瀬典事郡中制法を朗読し，并に学校の趣旨を演述せられ，式終りて来賓一同に酒饌を饗せりとある。ここに山階校が誕生したのである。」(①24-25頁) 〔関係者〕 京都府郡政係長長田重遠，創設時の教員矢部文戴(句読師)，富田周夫(助教)，西谷湛水(筆道助教)，柴山太郎作(算道助教)(①24-25頁)
	不明	明治7年3月 (明治10年8月に閉校か) (①1頁)	〔開校の経緯〕 「日ノ岡光照寺に分教場を開設し，最下級生を収容する。」 (①1頁)
	不明	明治9年7月 (明治11年3月に閉校か) (①1頁)	〔開校の経緯〕 「川田に分教場を開設し，最下級生を収容する。」 (①1頁)
	不明	明治9年9月 (明治10年10月に閉校か) (①1頁)	〔開校の経緯〕 「北花山福応寺に分教場を開設し，最下級生を収容する。」 (①1頁)
勧修小学校	**勧修学校** (「宇治郡勧修寺村組合立小学校」との記載もあり(①9頁))	明治5年2月5日に開業式を行う (①9頁)	〔開校前の歴史〕 「江戸時代に寺子屋制度のものが各地でさかんになったが，いずれも個人的な経営であったようである。したがってはっきりした記録はないが，親子代々，寺子屋の先生をしていた家はかなり多かったようだ。読み，書き，そろばんを程度を教え，入門者も，多いところで数十人もいたともいわれている。はっきりしたものでは仁孝天皇の文政三年(中略)勧修寺町，西念寺で中村円威という僧が「西念寺寺子屋」を開いている。勧修寺，小野，小栗栖，栗栖野，西野山と醍醐の一部の子供たちに教えていた。山科ではこのほか十二の寺子屋がはっきりしている。京都府宇治郡誌によると，もっとも古い歴史を持っているのが西念寺寺子屋である。宇治郡から文部省へ報告した「寺子屋取調表」によると寺子屋にも資格がいったようだ。」(①6頁) 〔開校の経緯〕 (明治4年12月)「勧修寺が本殿を学校の教室に開放することを京都府に進言。」 (明治5年2月5日)「宇治郡勧修寺村組合立小学校　府下十二郡のトップで開業式，教師の月給は四円だったという。」 (明治5年9月28日)「勧修寺内，山階の宮御殿の一部を借りうけて校舎とした。」 (①9頁) 〔関係者〕 創立委員の1人に，「竹本勘兵衛」という人物がいた(①14頁) 初代校長原田大六(①60頁)

［右京区］

嵯峨小学校	**上嵯峨学校** (「上嵯峨校」との記載もあり(①15頁) 明治9年には「嵯峨小学校」と改称(①15頁)	明治5年8月5日創立 (①15頁)	〔開校前の歴史〕 「嵯峨の地における教育の沿革は，(中略)江戸後期においては旧嵯峨御所大覚寺が民政，教育の本源であったことを，古記録でうかがうことができる。文化年中…に至って，初めて大覚寺に学問所が創設され，准三宮瑜伽定院がたいそう儒学を重んじられて，儒官(漢学を教授する役人)野口左門という人に子弟の教育に当らせ，井関兵部卿，林石見守らがこれに尽力したという。この学問所は，主として士族の子弟を教え，八歳から十六歳くらいの生徒が，朱註四書五経，歴史等の素読を学んだ。(中略)庶民の子弟は家塾または寺子屋に学んだ。安政の頃，元仙翁寺村に天川清賢の開いた寺子屋があった(中略)大覚寺学問所はその後閉されたが，この精神はやがて新学制による嵯峨校に継承された。」(②20頁) 〔開校の経緯〕 「明治五年七月学制が発布され，本校はその年八月五日創立。(中略)わが嵯峨の地においても，いち早く学校設立の議なり，上嵯峨・天竜寺・水尾・原・越畑の五か村が連合して上嵯峨村字大門の地に，旧招慶院を校舎として開校，上嵯峨校と称しえ，水尾・原・越畑に分校を設置したのが本校創立の由来である。明治十二年　寺院を借用した校舎は，固より不完全をまぬがれないため，経費千五百円を投じて初めて新築した。この時の校舎の棟札に曰く。当校開設以来既に七年の星霜を経たり。然るに固より学校を建築するに非ず。寺院を以って学校となす。故に装置美麗ならず。然も生徒の出入に便ならず。今茲に明治十一年八月初旬，区戸長始め有志の面々会議を遂げ村民に告ぐ。村民其の儀に服す。而して大いに土木を起こし今日吉晨上棟す。是皆学校は人材を貯蓄する所にして人材を愛着する至情より然らしむるもの也。」(②21頁) 〔関係者〕 開校前の教育に携わった野口左門(儒官)，井関兵部卿，林石見守，天川清賢(寺子屋師匠)の名があがる。(②20頁) 初代校長野路井鉄也(②88頁) 明治11年から12年にかけての校舎新築に関係した人物として，小松喜平治(区長)，松本丹治(誇張)，井上与十郎，佐野安之亟，鹿野源七(棟領)，当時の教員として野路井鉄也，芹川連の名があがる(②21頁)

創設期の所在地	郡村名	本校・分校関係	組合関係（村名）	創設経費等費用	建物・立地関係	教員数・児童数（就学率）	出典
川端村柳鶯寺を校舎として開校（①23頁）	葛野郡下嵯峨村	不明	3か村連合（高田，生田）（①23頁）	不明	寺院（②11頁）	不明	①京都市立嵯峨小学校創立百二十周年記念誌編集委員会編『京都市立嵯峨小学校百二十周年記念誌』（1993年，同会発行） ②記念誌部会編『嵐山学区・嵐山小学校創立50周年記念誌』（2015年，嵐山学区・嵐山小学校創立50周年記念事業実行委員会発行）
明治5年8月6日に水尾念仏寺を仮分校とするその後，明治5年9月2日に向いの寺大徳寺へ移す。明治9年4月5日に買収した上町左ヱ門旧宅地に校舎を建築し，明治9年6月15日に開校式挙行（①7頁）	水尾村（①7頁）	上嵯峨校分校（①7頁）	5か村連合の一村（①2頁，②21頁）	不明	寺院のちに邸宅へ（①7頁）	不明	①『水尾小学校創立百周年記念誌　水尾の里』（編集・発行元・発行年は不明） ②京都市立嵯峨小学校創立百二十周年記念誌編集委員会編『京都市立嵯峨小学校百二十周年記念誌』（1993年，同会発行）
不明	原村（①67頁）	上嵯峨校分校①では明治9年4月に嵯峨校の分校となるが，②では同月に分校から独立校となる（①67頁，②88頁）	5か村連合の一村（②21頁）	不明	不明	不明	①『京都市立宕陰中学校創立50周年記念誌』（1997年，京都市立宕陰中学校） ②京都市立嵯峨小学校創立百二十周年記念誌編集委員会編『京都市立嵯峨小学校百二十周年記念誌』（1993年，同会発行）
不明	越畑村（①67頁）	上嵯峨校分校①では明治9年4月に嵯峨校の分校となるが，②では同月に分校から独立校となる（①67頁，②88頁）	5か村連合の一村（②21頁）	不明	不明	不明	①『京都市立宕陰中学校創立50周年記念誌』（1997年，京都市立宕陰中学校） ②京都市立嵯峨小学校創立百二十周年記念誌編集委員会編『京都市立嵯峨小学校百二十周年記念誌』（1993年，同会発行）
御室竪町十九番地，橋本隆長氏住宅（一説には若林氏宅）を購入し仮校舎にあてた。その後仁和寺支院の皆明寺からの借り受け（①5頁）又は寄付（②73頁）を得て，明治6年4月より仁和寺の東，現在の蓮華寺の不動尊本堂のあたりに校舎を移転した。小松宮彰仁親王が建てて地元に寄付されたこの新築の校舎は，現在妙心寺内雑華院の本堂として残る（①5頁，②40，73頁）。明治6年4月移転の小学校は，村役場と同一敷地内に建てられ隣り合わせに建っていた（②73頁）。	葛野郡御室門前村（御室村との記述もある。御室門前は第一次村落併合（明治7年）で御室村となった）（②17頁）	不明	8か村協定（谷口村，木辻村，池上村，法金剛院村，福王子村，鳴滝村，山越（山城との記載もあり）村）（②17頁） ※明治7年には第一次村落併合により4村になる（②17頁）	当時（明治6年頃）の学校経営費は，政府からの委託金が少ないため，大半は村民負担となっていた（②73頁）	個人邸宅ののち，寺院，村役場（②73頁）	児童数約30名（②17頁） また，就学児童数が男子61名，女子41名，計102名（学齢児童数は男子153名，女子144名，計297名）との記録もある（②73頁）	①御室小学校育友会広報部編『校舎改築記念特集号　おむろ』（1980年，御室小学校育友会発行） ②『御室　御室小学校・学区創立百十周年記念誌』（1989年，御室福祉連合会発行）
京都府葛野郡梅ケ畑村字善妙寺小字奥殿37番地。面積は7畝28歩，校舎1棟（①4頁）	葛野郡梅ヶ畑村	不明	不明	不明	不明	教員1名（①4頁）	①高雄小学校創立百周年記念事業実行委員会編『高雄小学校百周年記念誌郷土のあゆみ』（1973年，京都市立高雄小学校発行）

後継校（現存及び休校、閉校した小学校）の校名（令和3年3月現在）	郡中小学校名	開校年月日	開校前の歴史・開校の経緯・関係者等
嵐山小学校	**下嵯峨学校** （「川端校」との記述もあり。以後，校名が「下嵯峨校」(年代不明)，「嵐山校」（明治11年，槇村正直巡視の際）と変遷（①23頁））	明治6年3月13日開校 （①23頁）	〔開校の経緯〕 「明治6年（1873年）に葛野郡川端村・生田村・高田村の三村が共同で「川端校」を柳鶯寺で開校しました。」 （②11頁）
水尾小学校	**第六区小学校嵯峨分校** （①7頁）	明治5年8月6日建営開業式その後，明治9年6月15日に開校式を実施 （①7頁）	〔開校の経緯〕 （明治5年8月6日）「第六区小学校嵯峨建営開業式。生徒引卒出向，仮教員僧幡定和尚現俗改名豊島伴蔵，但し水尾念仏寺を仮分校とする。」 （明治5年9月2日）「向い寺大徳寺へ移す。」 （明治9年2月18日）「水尾村戸長田中十郎自宅にて校舎建築可決。」 （明治9年4月5日）「上町左ヱ門旧宅地買収」 （明治9年4月9日）「学校敷地地均」 （明治9年11月）「建築用伐採開始」 （明治9年4月12日）「本村総出にて石場つき」 （明治9年6月15日）「水尾尋常小学校開校式」 （①7頁）
宕陰小中学校	**葛原校** （①67頁）	明治6年4月創立 （①67頁）	〔開校の経緯〕 「明治五年七月学制が発布され，本校はその年八月五日創立。（中略）わが嵯峨の地においても，いち早く学校設立の議なり，上嵯峨・天竜寺・水尾・原・越畑の五か村が連合して上嵯峨村字大門の地に，旧招慶院を校舎として開校，上嵯峨校と称しえ，水尾・原・越畑に分校を設置したのが本校創立の由来である。」（②21頁）
	越畑校 （①67頁）	明治6年4月創立 （①67頁）	〔開校の経緯〕 「明治五年七月学制が発布され，本校はその年八月五日創立。（中略）わが嵯峨の地においても，いち早く学校設立の議なり，上嵯峨・天竜寺・水尾・原・越畑の五か村が連合して上嵯峨村字大門の地に，旧招慶院を校舎として開校，上嵯峨校と称しえ，水尾・原・越畑に分校を設置したのが本校創立の由来である。」（②21頁）
御室小学校	**御室学校**	明治5年8月5日開校式挙行 （②17，73頁）	〔開校前の歴史〕 「御室校が創立されるまでの子どもたちの教育は，寺小屋から私塾へのコースをとっていた。その頃の寺小屋は仁和寺蓮華寺東側と妙心寺南門前東側にあったといわれている。」（②73頁） 〔開校の経緯〕 「明治五年（一八七二年）七月，全国民を対象とする義務制の初等学校を設ける趣旨のもとに学区制にもとづいて全国に小学校を設置することとした。太政官布告を以って学制の頒布があり，直ちに谷口，木辻，池上，法金剛院，御室，福王子，鳴滝，山越の八か村が協定し，御室竪町十九番地，橋本隆長氏住宅を購入し仮校舎にあて，同年八月五日，開校式を挙げた。これが御室校の母体です。」（②73頁） 「明治初期から大正初めにかけての仁和寺の記録は少ないのですが，（中略）明治六年小松宮門跡が，今の蓮花寺の地に旧学校創設の記録があります。」（②24頁）
高雄小学校	**梅ヶ畑学校**	明治6年4月創設 （①4頁）	〔関係者〕 初代校長香山曙（①4頁）

創設期の所在地	郡村名	本校・分校関係	組合関係（村名）	創設経費等費用	建物・立地関係	教員数・児童数（就学率）	出典
大字中地の地に，間口6間，奥行4間の建物を建立。なお校地は中地村共有山からに寄付によるもの（①152頁）	中地村（①152頁）	不明	不明	不明	共有山（①153頁）	不明	①北桑田近代教育誌刊行会編集『北桑田近代教育誌』（1991年，北桑田近代教育誌刊行会発行）
宮村字宮（①11頁）	北桑田郡黒田村（①11-12頁）	有斐校本校（②18頁）	9か村連合（井戸，小塩，初川，下黒田，宮，上黒田，灰屋，片波，広河原）（①12頁）	不明	不明	不明	①『黒田小学校100年誌　有斐同窓会50年誌』（1975年，黒田小学校100年誌有斐同窓会50年誌記念誌編集委員会編集・同記念事業実行委員会発行） ②記念誌編集委員会編『山國校百年誌』（1976年，山国小学校創立百年記念事業実行委員会発行）
周山村旧篠山藩役所跡（①5，92頁）	周山村（①92頁）	周山校本校（②27頁）	9か村組合立（五本松，熊田，下熊田，矢代中，西，宇野，漆谷，浅江）（①92頁）	不明	役所（①92頁）	児童数は明治10年に男性100名，女性29名（①92頁）	①『学びの友』（1974年，周山小学校創立百周年記念事業実行委員会） ②『矢代小学校閉校記念誌　矢代小学校120年』（1994年，京北町立矢代小学校閉校記念誌編集委員会発行）
不明	桑田郡細野村（開設時と独立時，①73，91頁）	神吉村及時校分校（①91頁）	5か村連合（細川滝村，細川上村，細川田尻村，細川中村，細川下村）(開設時と独立時，①73頁，91頁)	不明	不明	不明	①細野沿革誌編集委員会編『細野沿革誌』（1987年，細野自治会発行）
松寿寺内に設けられる（①27頁）	矢代中村（①27頁）	周山校分校（①27頁）	5か村連合（西，宇野，漆谷，浅江）(①27頁)	不明	寺院（①27頁）	不明	①『矢代小学校閉校記念誌　矢代小学校120年』（1994年，京北町立矢代小学校閉校記念誌編集委員会発行）
明治6年5月11日，筒江村小字弾正に校舎を新築。校舎建坪320坪，経費約750円。明治8年5月，牧磯五郎氏の一建立を以て長さ七間巾四間半の教室を建築。（①17頁）	桑田郡筒江村（①17頁）	博習校本校（①17頁）	不明	校舎建築経費は経費約750円（①17頁）	不明	不明	①『弓削小学校百年誌』（1973年，弓削小学校創立100周年記念事業実行委員会発行）
不明	田貫村（①17頁）	博習校分校（①17頁）	不明	不明	不明	不明	①『弓削小学校百年誌』（1973年，弓削小学校創立100周年記念事業実行委員会発行）
明治3年8月1日に比賀江村高田寺内で私塾を起す。明治5年に一棟増築し開校した（①15頁）	桑田郡比賀江村	不明	7か村連合（大野・中江・塔・辻・鳥居・下）（①15頁）	不明	寺院（①15頁）	不明	①記念誌編集委員会編『山國校百年誌』（1976年，山国小学校創立百年記念事業実行委員会発行）
井戸村霊厳寺，及び小塩村西福寺（①18頁）	桑田郡井戸村（①18頁）	有斐校分校（①18頁）	3か村連合（初川，小塩）（①18頁）	不明	寺院（①18頁）	不明	①記念誌編集委員会編『山國校百年誌』（1976年，山国小学校創立百年記念事業実行委員会発行） ②『黒田小学校100年誌　有斐同窓会50年誌』（1975年，黒田小学校100年誌有斐同窓会50年誌記念誌編集委員会編集・同記念事業実行委員会発行）

後継校（現存及び休校、閉校した小学校）の校名（令和3年3月現在）		郡中小学校名	開校年月日	開校前の歴史・開校の経緯・関係者等
京都京北小中学校	宇津小学校（京北第一小学校）	**中地校** 明治8年4月に書記官広瀬範治が来校した際に，「造基館」を改称（①152頁）	明治6年1月創立（①152頁）	〔開校の経緯〕 「本校ハ明治六年一月ノ創設ニ係リ校地ハ字中地共有山ノ寄附ニシテ一月十六日ハ創立紀念日ニ當ル。本校創立以前ノ教育ハ各字ニ於ケル寺院ノ僧侶醫師等ノ手ニヨリテ珠算習字讀書ヲ教授セル。所謂寺子屋ナリシガ明治五年學制頒布セラルルヤ時ノ知事槇村正直氏全國ニ率先シ普通教育ノ必要ヲ絶叫シ遂ニ本校ノ創設ヲ見ルニ至リシナリ 創立當時ハ中地校ト稱シ教師トシテ園部藩士小畠從舀氏ヲ聘セリ。校舎ハ今ノ屋外體操場ノ邊ニ間口六間奥行四間ノ建物ナリキ」（①153頁）
	黒田小学校（京北第二小学校）	**有斐館** （①11頁）	明治6年6月創立という説と明治8年8月1日創立という説がある（①11頁）	〔開校の経緯〕 「明治6年6月から，黒田村は桑田郡第20区として，現在の井戸，小塩，初川，下黒田，宮，上黒田，灰屋，片波，広河原の九か村で一小学校を開き開校，実際は各村々の寺子屋で授業をしていたようです。」（①11頁）
	周山小学校（京北第一小学校）	**周山校** 明治11年11月には，「積小校」と改称（①92頁）	明治6年5月開校（①92頁）	〔開校の経緯〕 「（明治6年―引用者注）5月　周山村旧篠山藩役所跡に校舎を設けて周山校と称し，組合9ヶ村（周山，五本松，熊田，下熊田，矢代中，西，宇野，漆谷，浅江）の児童の教育をはじめた」（①92頁） 〔関係者〕 明治6年5月に初代校長加藤久次，明治7年10月に二代校長秋月某，明治8年5月に三代校長八尋真太郎が，それぞれ就任している，とある（①92頁）
	細野小学校（京北第一小学校）	**細川中村支校** 明治8年7月には独立に伴い「細野小学校」と改称した（①91頁）	明治5年8月設置（①91頁）	〔開設前の歴史〕 「余野寺子屋　徳川時代の末期篠山藩領下であった余野村に於ては正法寺を利用して慶応元年より慶応四年迄坂口弥五郎を教師として寺子屋が開かれ二〇名の家庭の子弟に読み書き算盤の指導がなされた。 御殿山寺子屋教育　細川下村では御殿山に幕末の頃の寺子屋が開設され，二條屋敷代官光明照院住職服部日整（中略）が師匠として部落庶民子弟に読み書き算盤などを教えた。 高木塾　隣村神吉に於ては幕末に高木氏が，独立で私塾を開き庶民子弟の教育に努めた。本村よりは長野の人が通塾し勉学に励んだとも伝えられている。」（①90頁） 〔開校の経緯〕 「明治五年八月学制頒布の際初めて神吉村及時校の分校として，桑田郡第十五区細川中村支校と称し校舎を新築し公立学校となる。（中略）明治八年七月右通学区並びに余野村長野村を合併して細野村となり学校も独立して細野小学校となり，同時に余野・長野両校を分校とした。」（①90頁） 〔関係者〕 私財を投じて小学校を送検した人物として，西谷専治郎の名があがる（①91頁）
	矢代小学校（周山小学校　京北第一小学校）	**矢代中分校** 明治12年に独立し「矢代校」となる（①27頁）	明治6年9月開校（①27頁）	〔開校の経緯〕 「（明治6年）9月　矢代中松寿寺内に分校を設けて，矢代中，漆谷，西，浅江，宇野の児童の教育をはじめた。」（①27頁）
	弓削小学校（京北第三小学校）	**博習校** （①17頁）	上弓削村の寸田龍太郎が私塾「博習館」を明治5年3月に下中に開き，翌明治6年5月に公立とする。（①17頁）	〔開校の経緯〕 「校史をひもといてみますと，「明治5年3月上弓削村の人寸田龍太郎は私塾を下中に開き漢学を教授し，塾に名づけて博習館という，明治6年5月博習館を公立に改め筒江村小字弾正に校舎を新築して博習校と稱す」とその冒頭に記されてあります。」（①5頁） 〔関係者〕 初代校長山本氏之，二代目校長川端斐常（①17頁）
		田貫分校 （①17-18頁）	明治6年5月設置（①17頁）	博習校本校とともに設置（①17頁）
	山国小学校（京北第二小学校）	**協一館** （槇村正直による命名。また「比賀江小学校」との記載もある（①15頁））	明治3年8月1日，前身である私塾有隣館創立。明治5年5月15日開校し，開校式挙行（①15頁）	〔開校の経緯〕 （創立　明治三年八月一日）「但馬美含郡一日市村儒者田原正績氏，本村藤野斎氏の聘に応じ，近郷子弟のために比賀江村高田寺内に私塾を起して有隣館と名づけた。これが学校の濫觴である。明治五年，学制の頒布によって大野・比賀江・中江・塔・辻・鳥居・下の七ヶ村連合して有隣館を一棟増築し，比賀江小学校と称した。五月十五日開校し，田原正績氏に教授を託した。これが本校の創立である。この開校式には京都府庁から南摩綱紀氏が臨席した。」（①15頁）
		有斐校初川分校 その後，明治10年9月28日に「養源小学校」と改称（①18頁）	明治6年4月開設 養源校としての独立に伴い，明治10.年9月28日に開校式挙行（①18-19頁）	〔開設前の歴史〕 北桑田郡誌（明治36年11月発行）を抜粋する形で，「維新前　林民之助の私塾に入り学びたる者少なからず。明治初年に至り，井戸，小塩両村の寺院内に学習所を設け，西渓次，岡本環堂を聘し師とす」という記述を紹介（②11頁） 〔開校の経緯〕 「井戸村霊厳寺，小塩村西福寺を以って桑田郡第二十区有斐校分校として開設されたのが，本校の創始である。 明治7年11月　井戸村・初川村・小塩村三村協議の上，初川口を流れる小塩川に橋を架け，恵美須谷口の山麓に一棟（二二坪）紙障子作りの校舎を建て，有斐校初川分校とした。（中略）京都府知事の認可を受け，当分校を養源小学校と改称，開校式を挙行し，本校として独立した」（①18-19頁）

創設期の所在地	郡村名	本校・分校関係	組合関係（村名）	創設経費等費用	建物・立地関係	教員数・児童数（就学率）	出典
広隆寺内十輪院を譲り受けた（①8頁）	葛野郡太秦村	不明	不明	不明	寺院（①8頁）	教員4名（①8頁）	①『太秦小学校創立百二十周年記念』（1992年，太秦小学校創立百二十周年記念実行委員会発行）
西院村字西院小字淳和院の春日神社の隣地に設立。校地面積387坪，校舎及び附属建屋総計100坪2合5勺（①6頁）	葛野郡西院村	西院校本校（①6頁）	6か村組合（山ノ内村，西ノ京村，壬生村，三条台村，郡村）（①6頁）	創設経費1604円35銭。学校経費の支弁（毎半年につき）は竈別が金25銭，石高が金12銭5厘（①6頁）	神社（①6頁）	教員数本校3名，分校1名（①6-7頁）	①『西院小学校創立百周年記念誌「西院校百年誌」』（1973年，西院小学校内西院小学校創立百周年記念事業委員会発行）
東梅津村北町。木造瓦葺二階建四教室。「おそらく，中二階で教室といっても広い部屋で大小四つの室があったものと想像される。」（②6頁）	葛野郡東梅津村（②6頁）	不明	2か村連合（西梅津村）（②6頁）	不明	不明（好文校と改称後は，役場と一体の建物であった，と伝わる）（②6頁）	教職員2名（②6頁）児童数約50名（①10頁）または20名（②6頁）	①『梅津　梅津小学校創立百周年記念誌』（1974年，梅津小学校育友会発行）②『梅津小学校百十周年記録誌「梅津」』（1986年，梅津小学校内梅津小学校育友会）③梅津小学校創立百三十周年記念事業実行委員会編『うめづ　梅津小学校創立百三十周年記念誌』（2002年，同会発行）
葛野郡川勝寺村の観音堂の寺域に一棟を建てた（①12頁）	葛野郡川勝寺村	不明	不明	不明	寺院（①12頁）	不明	①『西京極百年』（1972年，京都市立西京極小学校・西京極小学校育友会発行）
不明	葛野郡郡村	西院校分校（②6頁）	6か村組合の1つ（②6頁）	不明	不明	教員1名（②6頁）	①『西京極百年』（1972年，京都市立西京極小学校・西京極小学校育友会発行）②『西院小学校創立百周年記念誌「西院校百年誌」』（1973年，西院小学校内西院小学校創立百周年記念事業委員会発行）
不明	桑田郡上中村	不明	不明	不明	不明	不明	詳細不明
明治9年6月の開校以前は西山別院建物の一部を借り受けたと伝わる（①33頁） ※明治8年測量による学校付近の古い地図（滑樋町）に開校前の学校敷地が記入されている（①34頁）	葛野郡川嶋村（川島村（①12頁））	不明	5か村組合（岡村，下津林村，牛ヶ瀬村，桂村字下桂）（①12頁）	不明	寺院（①33頁）	不明	①『川岡百年史』（1977年，川岡小学校創立百周年事業委員会発行）②『川岡小学校百二十周年記念誌』（1993年，川岡小学校創立百二十周年記念事業実行委員会）

後継校(現存及び休校、閉校した小学校)の校名(令和3年3月現在)	郡中小学校名	開校年月日	開校前の歴史・開校の経緯・関係者等
太秦小学校	**太秦学校**	明治5年9月1日開校式挙行 (①8頁)	〔開校前の歴史〕 「元太子前郵便局の裏あたりで寺子屋が開かれ，吉田勘解由という師匠の自宅でもあったので，先生不在の時は，その母や，読み，書き，算盤の達者な者等がその代理となった。当時の寺子(生徒)は約50名で，太秦，常盤，山の内から来ていた。(中略)20数年間も続いた。」(①8頁) 〔開校の経緯〕 「学制が発布され，広隆寺内十輪院を譲り受け，京都府葛野郡第三区太秦村太秦学校として開校。開校式には府知事直垂姿で参列，先生も成儀を正して散髪頭で袴を着て参列。先生は，筆道師，句読師，珠算師の三道教師の他に助教等教科担任の計4名であった。創立当時は，先生の適任者がなく，漢学者等が読書を教え，書道には旧来の寺子屋師，算道には商店の番頭など珠算をよくする者を開校日に検定試験をして，その場ですぐ任命された。」(①8-9頁) 〔関係者〕 創設時の教員，吉田正理(筆道師)，綾徳定(句読師)，矢島均之助(珠算師)，田中太吉(助教)(①9頁)
西院小学校	**西院学校** (①では「第一区西院校」と記載(6頁))	明治6年2月5日創立 (①23頁)	〔開校の経緯〕 「明治5年壬申8月，明治政府は，日本近代化の重要政策として，学制を発布した。京都では，この学制に先立ち，明治2年5月，京都上京二十七番小学校(現市立柳池中学)が創設され，次々と庶民の教育の場としての小学校が建設されていった。(中略)この社会の動きの中で，当時，市街を外れた田園地帯であった，西院村でも，学校建設の声が高まり，京都府令ともあいまって，学校建設の話し合いが繰りかえされた。明治5年5月，西院村，山ノ内村，西ノ京村，壬生村，三条台村，郡村の近村が組合を組織し本校建築の計画を作成した。それによると場所は〝春日神社の境地に相し〟府よりの建築補助金50円を基金として，旧唐橋家と若狭屋敷の旧宇を購入，当地移転する。7月に上棟式を挙行し6年1月に竣工せしめている。」(①6頁)
梅津小学校	**梅津小学校** (②6頁) **人民共立校** (③69頁) その後，明治9年に校名を「好文校」と改称(③9頁)	明治5年9月創立 (③69頁)	〔開校の経緯] 「本校は，明治5年9月の誕生で，そのころは，東梅津村と西梅津村とに分れていて，この二つの村がいっしょになって梅津小学校が創設した」(②6頁)
西京極小学校	**川勝学校** (「川勝寺小学校」との記載もあり(①12頁))	明治5年7月15日創立 (①12頁)	〔開校前の歴史〕 「江戸幕府の士分，藤井熊右衛門なる人，故ありて京に来りて川勝寺に居を川勝定む。当時観音寺という一寺あり。寺に定まれる収入もなければ，入りて住職たらんとする者もなく村民等之が管理に心を砕く。偶々同氏の当地に来るなり。請いて之が管理を委託せり。氏請わるるままに堂宇管理の傍同寺に附近の子弟を集め読・書・算の教授に当たれり。また之と同時に三宮神社の社家，飯村伝吉なる人により寺子屋の如き塾の開設せらるるもありたり。」 (①12頁) 〔開校の経緯〕 「明治五年七月十五日　学制頒布に際し葛野郡川勝寺村の観音堂の寺域に一棟を建て川勝寺小学校と称する。」 (①12頁)
葛野小学校	**郡学校** (「郡小学校」との記載もあり(①12頁))	明治6年2月5日創立 (②6頁)	〔開校の経緯〕 「明治5年壬申8月，明治政府は，日本近代化の重要政策として，学制を発布した。京都では，この学制に先立ち，明治2年5月，京都上京二十七番小学校(現市立柳池中学)が創設され，次々と庶民の教育の場としての小学校が建設されていった。(中略)この社会の動きの中で，当時，市街を外れた田園地帯であった，西院村でも，学校建設の声が高まり，京都府令ともあいまって，学校建設の話し合いが繰りかえされた。明治5年5月，西院村，山ノ内村，西ノ京村，壬生村，三条台村，郡村の近村が組合を組織し本校建築の計画を作成した。」(②6頁) 「学制頒布に際し葛野郡川勝寺村の観音堂の寺域に一棟を建て川勝寺小学校と称する。当時，葛野郡郡村は郡小学校を経営する。」(①12頁)
不明	**健應館**	不明	不明

【西京区】

川岡小学校	**川島学校** (「川島小学校」(①35頁)，「川島村小学校」との記載もあり(②45頁))	明治5年9月24日開校 (②45頁) 明治9年6月創立 (①12頁)	〔開校の経緯〕 「明治三十年，鈴木岩人校長が往時を調べて概略を書き記されたものだけが残っている。〝明治九年六月，本校創立，其ノ以前ハ西山別院建物ノ一部ヲ借リ受ケタリト伝フ。〟 〝校舎 い　建設　明治九年六月　ろ　坪数　教室其他百四十九坪　運動場百五坪　は　経費　不詳 に　名称　川島尋常小学校　ほ　学区域　川岡村，桂村字下桂　へ　建設当時の管理者　村長　津田長左衛門〟以上が当時の記録である。(中略)川島校も明治九年の開校となっているが，記録にもあるように，或は，それ以前に西山別院の一部を借りて開校し，校舎の建設とともに，現在地に開校したのではなかろうか。」(①33頁) 〔関係者〕 創設当時の管理者，村長津田長左衛門(①33頁)

創設期の所在地	郡村名	本校・分校関係	組合関係（村名）	創設経費等費用	建物・立地関係	教員数・児童数（就学率）	出典
松尾谷村416番地に5畝27歩を当初の敷地として創立（①6頁）	葛野郡松尾谷村	不明	5か村組合（上山田，下山田，松室，御陵）（①6頁）	不明	不明	教員3名（①6頁）	①『創立百二十周年記念誌　松尾』（1992年，京都市立松尾小学校発行）
上桂村寺院千光寺跡（①10頁）	葛野郡上桂村	不明	4か村の戸長役場組合立（千代原村，上野村，徳大寺村）（①34頁）	不明	寺院（①10頁）	教員4名 児童約50人程度（①34頁）	①京都市立桂小学校百周年記念委員会編『百年のあゆみ』（1972年，同会発行）
旧山陰街道芋峠頂上（①の執筆時の把握では中山旧街道三宮神社前）に建設。校舎は方三間の平屋建であり窓は連子窓であった。当地の校舎校地は学校敷地82.5坪，建坪48坪，教室数2室（①7-8頁）	乙訓郡塚原村	不明	不明	1年間の学校経費132円（①8頁）	不明	教員数2名 児童数は男子28名，女子18名，（就学率は男子31%，女子20%）（①7頁）	①『大枝の郷　大枝小学校百周年記念誌』（1974年，大枝小学校百周年記念事業大枝の郷編集委員会編集兼発行）
西岩倉の坊舎を石作字馬場に移し開校（①15頁）「はっきりした記憶ではないが，初めは長峰のお寺で役場と学校と同じだった。役場のあいた部屋を学校に使っていたと思う。」（①59-60頁）	乙訓郡灰方村	一時期外畑村に分校があったとの記述あり（①36頁）	不明	創立のころの授業料は生徒ひとり毎月4，5銭。学校経常費は明治6年創設の際各戸1年金1分を出し，7年から1戸25銭を出す（①15-16頁）	寺院・役場（①59-60頁）	児童数200名あまり（①15頁）	①大原野小学校百周年記念誌編集委員会編『大原野百年のあゆみ』（1973年，京都市立大原野小学校百周年記念実行委員会発行）
深草村墨染の山村（①5頁）	紀伊郡深草村の街道筋（伏見奉行所支配地）（①5-6頁）	不明	不明	不明	不明	不明	①河合清編『深草　記念誌抄』（1972年，深小創立百周年記念事業委員会発行）
深草村大字深草小字淵（①6頁）	紀伊郡の街道筋を除く深草村（伏見奉行所支配）（①5-6頁）	不明	4か村組合（福稲村，竹田村，中島村）（①5-6頁）うち中島村は，明治9年11月に下鳥羽村と連合して下鳥羽小学校を創立（②14頁）	建設維持の費用および教員給料などすべて市町村民の負担であった（①6頁）	不明	不明	①河合清編『深草　記念誌抄』（1972年，深小創立百周年記念事業委員会発行）②『創立百周年・移転新築記念誌』（1976年，京都市立下鳥羽小学校記念事業実行委員会発行）

後継校(現存及び休校、閉校した小学校)の校名(令和3年3月現在)	郡中小学校名	開校年月日	開校前の歴史・開校の経緯・関係者等
松尾小学校	**松尾学校** (「京都府葛野郡第九小学校」,及び「晩翠校」(明治7年10月9日時)との記載もあり(①6頁))	明治5年9月創立 (①6頁)	〔開校の経緯〕 「明治4年文部省ができ, 5年に政府は「小学校令」(ママ)を出し, 全国に小学校を建設することにし, 京都府内にも, 明治5年から明治7年12月までに「118の小学校」が建設された。本校も明治5年9月, 京都府葛野郡第5区松尾谷・上山田・下山田・松室・御陵の5か村組合をもって, 松尾谷村416番地に5畝27歩を当初の敷地として創立し, 京都府葛野郡第九小学校と称した。」(①6頁) 〔関係者〕 教師として高松明言(句読教師), 斯波次郎(筆道補助教師), 山田次郎(助教, 後に友澄と改称)の名があがる(①6頁)
桂小学校	**上桂学校** (「桂林学校」との記載もあり(①34頁))	明治5年12月8日創設 (①4頁)	〔開校の経緯〕 「学制頒布の趣旨に基き, 上桂村に一校設置し, 同村寺院千光寺跡を以て仮に校舎に充用し, 千代原, 上野, 徳大寺, 上桂の四か村を以て通学区域とし, 桂林学校と称して児童を収容する。校名は当時の知事槇村正直氏の命名による。」(①10頁)
大枝小学校	**塚原学校**	明治6年9月開設及び開校式挙行 (①6-7頁)	〔開校前の歴史〕 「この大枝の地にあった寺子屋の開設の動機は明らかではないが, この地の僧侶が懇意の者や, 近隣の者に慕われ子弟をまかされ, 諸手習いを教えていたのがはじまりで, 後, 戸長や篤志家などが郷黌の風俗や文化を向上せしめたいとの意向により里井に設けられたものであった。当時, 大枝のに於いては, 塚原, 沓掛, 長野新田西町にあったと知られている, 会場は各区の集会所をあて, 教師は各寺の僧侶があたった。当時僧侶は地方唯一の学識者であったためである。(中略)授業料に別に規定はなく, 普通金一朱内外を謝儀, 御祝儀として五節句に納めていたようである。時々自分の家で作った農作物を正月, 盆に贈る例になっていた。(中略)この寺子屋も明治初年, 小学校が開設されて自然に消滅し, 後青年会の夜学へと移ったのである。」(①6-7頁) 〔開校の経緯〕 明治4年11月に郡中小学校建設の告示を府が出したが,「これにより明治五年二月宇治郡勧修校をはじめとして続々小学校建営が進められた。こうして, 明治五年八月学制発布となったのである。(中略)明治六年九月乙訓郡第三区(第一区大薮校, 第二区向日　神足　大山崎校, 第三区長法寺　灰方　塚原)として当時の区長河合辰直氏監督のもとに旧山陰街道芋峠頂上(現在の中山旧街道三宮神社前)に建設された。 (中略)初代校長和田正黄氏　を迎えて開校式を行ったのである, これが現在の大枝小学校教育のはじまりである。当時の校舎は方三間の平屋建であり窓は連子窓の貧弱なものであった。校名を「塚原学校」と称していたのである。」(①7頁) 〔関係者〕 当時の区長河合辰直, 初代校長和田正黄(①7頁)
大原野小学校	**灰方学校**	明治6年5月5日開校 (①15頁)	〔開校前の歴史〕 「学校創立以前は各地に寺子屋があり有志者に教えた。(中略)謝儀は御祝儀と称して, 五節句に納めるのが通例で, 金額は上等が壱分, 中等が二朱, 下等が三百文, 外に盆と暮正月には物品を添え, また暮には炭代, 春には畳代を徴収することがあった。(中略)寺子屋の盛大であったのは, 上羽区の上羽平右ヱ門で, 各地に出張所を設け子弟を派出して教授した。算術は専門家があって教え, 高度な算法を教える時は, 伝授料を徴収した。本郡中, 算家の有名であったのは石見上里の齋藤藤兵衛で, 遠くから来て学ぶ者が多くあった。」(①35頁) 〔開校の経緯〕 「西岩倉の坊舎を石作馬場に移し同年(明治6年のこと—引用者注)五月五日に開校する。然し旧来の寺子屋を合併したようなもので教室には畳を敷き生徒は各自机文庫を所持する。句読筆道を教授する。二・三か月の後算道を加える。生徒数二百名あまりで男子多く女子僅少。」(①15頁)

【伏見区】

深草小学校	**伏水第一小学校** (①5頁) 明治9年4月には「墨染学校」と改称 (①6頁)	明治5年10月.20日創立 (①5頁)	〔開校の経緯〕 「伏見町では明治二年に六十四の学校を設置した京都市にならって学校開設を計画していたが, 明治五年六月つぎのような京都府告示をうけた。 　告示 　伏見　総区長 　今般伏見市中へ第一第二第二(ママ)ノ学校建学イタシタキ段願出デ神妙ノ事ニ候　コレニヨッテ右三校へ金百円ヅツ下シツカワサレ候条　入費ノ内へ差シ加工速ニ成功ヲ遂ゲルベク候事 　壬申(明五)六月　京都府 　こうして, 同年十月二十日伏水第一小学校(現深草校)を最初として, 十一月二日伏水第二(現伏見板橋校), 十一月二十二日伏水第三(現伏見南浜校)の三校が創立されたのである。 　江戸時代を通じて, 伏見街道に沿った深草の町筋は, 伏見奉行所支配地であった。〔『深草の歴史』近世の項参照〕 したがって, 伏水第一校は伏見町北部の町々と深草の街道筋の子弟を収容するために設置されたものであり, 所在地は深草村に含まれる墨染の山村(現深草山村町)であった。」(①5頁) 〔関係者〕 初代校長太田家顕(①5,26頁)
	深草学校	明治6年開校 (①6頁)	〔開校の経緯〕 「学制では全国を八大学区に分け, 一大学区は三十二中学区に分かれ, さらに一中学区を二一〇小学区に分けていた。そして一小学区は人口約六百人をめあてとして一小学校を設置すべしということになっていた。街道筋を除く(つまり伏見奉行所支配地以外の)深草村でも小学校を設置するため, 隣接の福稲村(中略)竹田村(中略)中島村(中略)と組合をつくった。そうして, 明治六年(一八七三)深草村大字深草小字淵(中略)に開校したのが紀伊郡第二区深草学校である。この学校に通学するのは深草村では大字深草と大字大亀谷の子どもたちであった。」 (①6頁)

創設期の所在地	郡村名	本校・分校関係	組合関係（村名）	創設経費等費用	建物・立地関係	教員数・児童数（就学率）	出典
伏見御香宮境内に開校（①12頁） 敷地については，「敷地は（中略）石垣の線が北の端で，南は大手筋通りまで，西の端は（中略）参道までで，東は今の国道24号線のほとんど全部が学校でした」との記述あり（①4頁）	紀伊郡堀内村	不明	6か村組合 （向島，景勝，三栖，葭島，新田，六地蔵，大亀谷） （①12頁）	不明	神社 （①12頁）	不明	①『桃山校百年のあゆみ』 （1972年，桃山小学校創立百周年記念事業委員会発行）
創立当時は三宝院内白書院の一区画を仮用していたが，明治5年9月に三宝院門跡より，表玄関及び表門の一部の建物弐反参畝五歩の寄付に依って同地に移転した（①7頁）	宇治郡醍醐村	宇治郡第一校本校（①5頁）	7か村組合 （日野村，石田村，南小栗栖村，炭山村，西笠取村，東笠取村。なお，炭山村・西笠取村・東笠取村には分校が設立） （①5頁）	不明	寺院 （①7頁）	教員4名 （①3-5，20頁） 児童数96名 （①5頁）	①醍醐小学校記念事業実行委員会・醍醐小学校育友会編『醍醐百年誌』 （1972年，醍醐小学校百周年記念事業実行委員会発行） ②京都市立醍醐小学校・京都市立醍醐小学校PTA編『ふるさとだいご』 （2002年，京都市立醍醐小学校創立130周年記念事業実行委員会発行）
伏水板橋二丁目 （②40頁）	伏水（伏見） （①8頁）	不明	不明	明治10年2月7日，明治天皇大和御幸の節，ご休息に訪問，金15円を下賜される。また明治10年2月11日，皇太后・皇后両陛下が宇治へ行啓の節，ご休息に訪問，金10円を下賜される（②41頁）	藩邸跡 （②40頁）	不明	①『板橋小学校100周年記念誌　板橋百年誌』 （1972年，板橋小学校100周年記念誌委員会発行） ②京都市立伏見板橋小学校編『京都市立伏見板橋小学校　創立130周年記念事業　郷土資料室「いたはしくら」開設記念小冊子』 （2002年，京都市立伏見板橋小学校創立130周年記念事業実行委員会発行） ③伏見南浜百年史編集委員会編『伏見南浜小学校100周年記念誌　伏見南浜百年史』 （1972年，伏見南浜小学校創立100周年記念事業委員会発行） ④醍醐小学校記念事業実行委員会・醍醐小学校育友会編『醍醐百年誌』（1972年，同会発行）
京都府山城国伏見区第五組南浜町（塩屋町）948番地 （①10頁） 明治11年11月，新校舎の建築に着手し，東西4間，南北9間，玄関付き2階建1棟を新築 （①19頁）	伏見区南浜町 （①10頁）	伏水第三校本校 （①13頁）	不明	学校建営のため京都府から金100円の下付有り（①12頁） 明治8年頃，1か月の授業料は8銭だった （①19頁）	藩邸跡 （①12-13頁）	教員5名 （①14頁） 児童数男330名，女238名，計568名 （①12頁）	①伏見南浜百年史編集委員会編『伏見南浜小学校100周年記念誌　伏見南浜百年史』 （1972年，伏見南浜小学校創立100周年記念事業委員会発行）

後継校(現存及び休校、閉校した小学校)の校名(令和3年3月現在)	郡中小学校名	開校年月日	開校前の歴史・開校の経緯・関係者等
桃山小学校	**堀内学校** (堀内小学校」との記載もあり(①12頁))	明治6年12月1日開校 (①12頁)	〔開校の経緯〕 「桃山小学校が出来たのは，明治6年12月1日で名前は堀内小学校といいました。」 (①4頁)
醍醐小学校	**醍醐学校** (「宇治郡第一校」との記載もある(①1頁))	明治2年，時習舎を起こす 明治4年9月18日に稽古場が開かれる (①3頁) 明治5年2月5日 開校式挙行 (①1頁)	〔開校前の歴史と開校の経緯〕 「江戸時代に，庶民のための初歩教育機関として，寺小屋が各所に生まれていた。当村においても，天保年間，三宝院門跡家士岩淵総重図書，勤務の余暇に自宅において，生徒を教授したのが，初めとされている。しかし，天保末年に至って，図書が死亡したために，学業もいったん廃止した。ここにおいて，山県経愛の手により，花迺舎塾を起こして，弘化元年業を継いだ。それ以来，嘉永安政のあいだにもっとも隆盛を極めたが，慶応明治の際は勤務繁激で，教授の暇がなくて漸く衰えた。三宝院門跡はこれを憂えて，明治二年，時習舎を起こして，塔頭密厳院を学舎に充て，大いに村内の子弟を収容して，家士左右田実英，飯田明遠，妹尾嘉一郎の三名を教授の任に当らせた。三氏大いに改良し進歩を図り，努力を惜しまなかった。そして，明治四年にはほとんど小学校の体裁を保つようになった。その他，御陵においては一音寺。日野においては恵福寺，真乗坊，井脇坊，石田の念仏堂等の僧侶が，寺小屋を起こして子弟を教授した。(中略)このようにして，教育に対する村民の願望も厚く，教授方や醍醐寺を中心とする僧侶の熱意にささえられて，創立への下地が築かれたのである。(中略)郡部における最初の小学校として，明治五年二月五日三宝院内白書院において，開校式を挙げた。」 (①3-4頁) 〔関係者〕 前身の時習舎で教授の任にあたった，左右田実英，飯田明遠，妹尾嘉一郎(①3頁)
伏見板橋小学校	**伏水第二校** (②40頁) 明治9年2月，「第三大学区第六中学区伏水板橋校」と改称 (②41頁)	明治5年11月1日開校 (①8頁，②40頁)	〔開校の経緯〕 「明治5年壬申6月より7月3日までの5日の間，伏見板橋尾張様お屋敷に於て，伏水第二小学校の建営地と相成り，その所へ6月28日より5日の間，伏水，町々に於て，5人組，人足ひとりずつをもって砂持皆々夜分にはいろいろ思い思いの風束をいたし，砂持にかこつけ踊り同断に面白く大騒ぎ御座候。7月3日その夜4つ時まで混雑まことに以て陽気に相成り候。(中略)明治5年11月1日本校を伏水板橋二丁目，旧尾張藩邸跡に創設して校名を伏水第二校と称し，本府の定めるところの教則より小学校を上等，下等の2等に分け，句読，算術，習字の3科目を授ける。(大谷箭吉筆録・諸事書物控による)(中略)『寺子屋がなくなって，学校が尾張御殿跡に建つのやそうな』という話を人々から聞かされた。維新前までは，門前・市をなした尾張御殿もただ立派な門だけを残して，屋敷内は草ぼうぼうのありさまであった。学校を建てるのに，土地が低いため，一町内から三人砂もちに出ることになった。しかし，砂もちとは名ばかりで，思い思いの着物に工夫をこらして，三日間踊り狂った。(中略)開校式のときの様子(納所村誌より)　伏水第2小学校開くに相成り，総区長・区長・戸長，袴にて出勤，伍長，羽織・袴，各々子供の世話をいたす。その節大将より仰せわたしに相成り候　忠孝の事，大将槙村，次に典事，そのほか4人しめて6人とも素袍に立烏帽子，天晴の事に御座候　以上　手習児供衆，6日より指南に相成り候」(②40頁) 「校門は下板橋に面して高さ7m，幅50cmもあるまっ黒な大きな門で(現在の校門位置とほぼ同一)正面玄関のあたりに町役場があって，奥に講堂と職員室とがあった。昔の屋敷跡そのままに御殿風の建て物である。狭い運動場をかこんでコの字型に10教室ばかりひとむねは2階建てであった。」(①10頁) 〔関係者〕 初代校長奥野精一氏(私塾原思軒と宇治第一校での教授歴有り)(②40頁，③10頁，④5頁))
伏見南浜小学校	**伏水第三校** (①10頁)	明治5年11月26日開業式挙行 (①12頁)	〔開校前の歴史〕 「安政元年(1854)伏見奉行内藤豊後守が組下の小野三十郎らに命じて，学舎を設立し，組与力同心の子弟及び市内有志者の子弟の入学を許し「優則学舎」と名付けました。(中略)生徒数およそ60名で総て通学していました。(中略)優則学舎創設以来，伏見を中心に私塾寺子屋が盛んに興り，徳川末期唯一の庶民の教育機関として，大いにその実をあげました。特に，嘉永・安政以後は全盛を極めましたが，明治にはいって学制の発布とともに多くはその業を廃しました。しかし中には，奥野塾・西岡塾のように私立の小学校に変更したものもあります。奥野塾の原思軒は古くから開かれ，男130人，女70人の生徒数をもって，伏見随一の規模をほこっていました。また伏見奉行所役人等も師事し，他に比べて一頭地をぬいていました。」(①11頁) 〔開校の経緯〕 「「紀伊郡村誌」(明治14年発行)を見ますと，学校(明治5年1月1日調)　京橋ヨリ北へ一丁，「人民共立小学校」南浜ニアリ。 面積　692坪　生徒　男330人　女238人　合計568人(中略)と記されています。「伏見町誌」に「施設已に学制頒布以前において見るべきものありき」との一文が記されています(中略)伏見においても，(中略)これに先だって小学校建営の急務を認め，各組より，その出願をしました。明治5年1月20日のことです。要旨は次のとおりです。 　伏見市中小学校建営に付御願　幼童之者芸術執行ノ儀は今日の要務須臾も不可忽既に京地に従，御廳厚御世話被為在各組竟落成に候就ては伏水地之義辨理之地相撰小学校三ヶ所建営仕り度為奉存候尤建営入費之義は昨未年八月豊後橋仮普請仕度奉存出金申談之もの其他市中有志之者共え申談出為致申度尚出金姓名之義は追而可奉申上候間何卒御容被為成下候様偏に奉願上候以上　壬申正月弐拾日　伏水各組　中　副　年寄中連印　御廳　右之通に御座候依而奥印仕奉願上候以上　伏水大年寄　同助役　連印　右調印各組中添年寄用達順廻候事　書面聴届候条篤と有志之者と致熟議速に落成可成候様精々心配遂可申事　京都府　今般伏見市中へ第一第二第三之学校建営イタシ度段願出神妙之事二候依之右三校へ金100円ヅヽ下遣候条入費之内へ差加速二可遂成功候事　壬申六月 　6月になって請願が許可され，三か校に対して100円宛の下付がありました。当時は米一石が10円ほどですから相当な金高でした。(中略)明治5年10月20日，伏水第一校(中略)，同年11月5日伏水第二校(中略)につづいて，(中略)伏見南浜小学校も『明治5年(1872)11月26日』，南浜町旧土佐藩邸を校舎に『伏水第三校』と称して開業式を挙げるに至りました。(中略)府は開業式にあたって，その次第を決め，各校それぞれ従わせました。(中略)別に分校を伏見六地蔵(宇治市六地蔵)設置にする願い出を同年11月14日，府に提出したところ，17日をもって受諾，さっそく建営の運びになりました。」(①12-13頁) 〔関係者〕 創立当時の教員として，宇田健斉(教授方の首班。1等句読師，校務，教務を総括)，浅田儀之助，北森庄太郎，木村正教，村田文明の名が紹介(①14頁)

創設期の所在地	郡村名	本校・分校関係	組合関係（村名）	創設経費等費用	建物・立地関係	教員数・児童数（就学率）	出典
下鳥羽村字中之町 （①14頁）	紀伊郡 下鳥羽村 （①14頁）	不明	2か村連合 （中島村） （①14頁）	不明	不明	児童数は2学級くらいかと推定（①14頁）	①『創立百周年・移転新築記念誌』 （1976年，京都市立下鳥羽小学校記念事業実行委員会発行）
横大路村字横大路小字東裏十七・十八番地（東裏町） （①2頁）	紀伊郡 横大路村	不明	2か村組合 （下鳥羽村） （①2頁）	不明	不明	2学級との記載 （①2，29頁）	①『こども風土記　創立100周年記念誌』 （1973年，京都市立横大路小学校発行）
納所村第228番地ノ2 （①14頁） 明治11年に20坪（66平方メートル）の教室を建設して移転 （①所収「京都市立納所小学校沿革史年表」）	紀伊郡納所村 （①14頁）	不明	不明	不明	村役場 （①14頁）	不明	①『わたしたちの納所』 （1973年，百周年記念事業実行委員会発行） ②京都市立明親小学校〝淀〟編集委員会編『創立110周年記念　わたしたちの町　―淀―』 （1971年）
久我村真福寺（久我村字中開土12）に設置。明治9年7月，神川神社境内の払い下げを受け久我東町21に校舎を新築。本校の位置は海抜15米，東経135度44分35秒，北緯34度38分17秒。（①1-2頁）	乙訓郡久我村 （①1頁）	不明	5か村組合 （鴨川村，志水村，古川村，菱川村） （①2頁）	明治9年7月，神川神社境内500坪の無償払い下げを受けて校舎を新築し移転した。 （①1-2頁）	寺院 その後神社 （①1-2頁）	不明	①神川小学校百周年記念事業委員会編『京都市立神川小学校百周年記念誌』（1972年，同会発行） ②大薮小学校創立百周年記念事業実行協力会編『大薮校百年誌』 （1973年，同会発行） ③渕田家貴『写真でたどる神川校の100年―京都近郊村落における明治・大正・昭和の歩み―』 （2010年）
淀池上町108 （①56頁）	久世郡 池上村	不明	不明	不明	藩校 （①56-57頁）	児童数は約400名ほど （①57頁）	①京都市立明親小学校〝淀〟編集委員会編『創立110周年記念　わたしたちの町　―淀―』 （1971年）
①の執筆当時，淀川の河川域の中だったところ （①118頁）	綴喜郡 美豆村 （①118頁）	知周校分校 （①117頁）	3か村組合（際目，生津）（推定） （①117頁）	不明	不明	不明	①植村善博監修『淀南の歴史』 （2014年，淀南地誌の会発行）

後継校(現存及び休校、閉校した小学校)の校名(令和3年3月現在)	郡中小学校名	開校年月日	開校前の歴史・開校の経緯・関係者等
下鳥羽小学校	**下鳥羽小学校** (①14頁)	明治9年11月独立 (①14頁)	〔開校の経緯〕 「明治五年に学制が発布され，学区制により小学区には小学校一校を開設することとして国は督励した。(中略)下鳥羽においても，戊申の役の激動がようやくおさまって，人心も落ちつきを見せた明治六年五月に下鳥羽村・横大路村・下三栖村，富ノ森村の四ヶ村が連合して一小学校が建設された。その場所は，横大路村字東裏町十七，八町畷と旧千本通の続きの交叉点を約二・三十米南の地点で，これが一番の初めである。但し当時の下鳥羽村は，上三栖村，芹川村・中島村と別であった。そして明治七年に芹川村を合併し，明治八年更に上三栖村を合併している。(中略)ところが横大路まで通学するのは不便であるということで，下鳥羽の実力者の尽力により，明治九年十一月に下鳥羽村と中島村と連合して，下鳥羽村字中之町に校舎が新築された。そして下鳥羽小学校と称した。」(①14頁)
横大路小学校	**横大路学校** (「横大路小学校」との記載もあり(①2頁))	明治6年5月15日設立 (①2頁)	〔開校の経緯〕 「学校は，明治六年五月十五日に「横大路小学校」という名まえで誕生しました。(中略)そのころは，一年から四年までで，一年と二年がひと組。三年と四年とがひと組。合わせて二学級のまるでじゅくのような学校でした。」(①2頁)
納所小学校	**納所小学校** (①14頁)	明治6年8月1日創立 (①14頁)	〔開校の経緯〕 「納所小学校ができたのは，明治六年(一八七三)八月一日で，名前は，京都府紀伊郡納所小学校といいました。場所は，納所村第二百二十八番地ノ二で，天理教協会の近くにあり，そのころのの村会所(村役場)の中につくられていました。」(①14頁) 〔関係者〕 初代校長高橋利和(①27頁)
神川小学校	**神川校** (①1頁)	明治5年創設 (①2頁)	〔開校の経緯〕 「明治元年4月京都府が設置されると，時の権大参事(今の知事)槇村正直は，(中略)学校の新設をみたのである。本校は，明治5年8月頒布せられた学制に基づき，久我村・鴨川村・志水村・菱川村・古川村が組合立として，久我村真福寺(久我村字中開土12)に神川校を設置した。明治9年7月，神川神社境内500坪を無償払い下げを受け，現在の位置に校舎を新築し移転した。(中略)創立当時は5ケ村組合立であるため，いずれの村名・地名も使用せず，隣接の神川神社の社名をとり神川校と称した。」(①1-2頁) 〔関係者〕 初代校長茨木恒忠(①8頁)
明親小学校	**澱学校**	万延元(1860)年5月11日に設立した藩校明新館に起源をもつため，この日を創立記念日とする。 小学校としては明治5年12月に開校 (①51頁)	〔開校前の歴史〕 「淀藩につかえていた松尾直在という人が中心になって，藩の学校が，今の明親校の場所にたてられ「明親館」といいました。(中略)藩につかえていたさむらいの子で「六～二十才」までの百五十人ほどが，この明親館で勉強しました。(中略)また百しょうや町民の子どもたちは，明親館では勉強できず「寺小屋」といってお寺の一部屋の中で，お坊さんについて習字や読書を学びました。(中略)一八六〇年月十一日(ママ)に明親館がひらかれたので，この日を明親校の創立記念日ときめられました。鳥羽伏見のたたかいの時，明親館もぜんぶやけましたが，すぐ新しくたてなおされました。明親館は明治四年までつづきました。」(①56-57頁) 〔開校の経緯〕 「明治五年，日本に小学校ができたとき，「明親館」も明親小学校にかわりました。生徒数は約四〇〇名ほどで，さむらいの子どもも町民の子どももいました。(中略)「カヤブキ」の教室の中で，たたみにすわって机にむかって勉強しました。」(①57頁) 〔関係者〕 松尾直在(明新館設立の中心人物)(①56頁)
美豆小学校	**知周校(現八幡市)の分校** (①117頁) 美豆小学校(明治14年の学校独立時の名称)(①118頁)	明治9年設置 (①117頁)	〔開校前の歴史〕 「明治初期，八幡外四郷に属していた淀南では，在野知識人が携わって寺小屋や私塾が開かれていました。寺子屋形式のものは志水，馬場，柴座の各町にあり，橋本や川口にも設けられていました。家塾では橋本の山田梅東や科手町の谷村光訓，さらに金剛寺の久富元秀などが，私宅などで子弟の教育に当たっていました。」(①117頁) 〔開校の経緯〕 「明治6年3月3日，上奈良町に到遠校が創立され，上奈良・下奈良・野尻・内里・戸津・美濃山の各村の子どもたちが通学し始めました。直後の4月1日からは，八幡高坊の民家(敷地561坪)を増改築して『知周校』と称する学校が設置され，八幡・川口・美豆・際目・生津・二階堂の各子弟218名が通学しました。また上津屋村の子どもたちは，4月6日開校の久世郡寺田校へ木津川を越えて通学し，岩田村の子どもたちは1月13日開校の大住村進徳校へ通学しました。明治9年，それまで木津川を越えて知周校に通学していた美豆・際目・生津各村の子どもたちのために，美豆に分校が設置されました。(中略)位置は美豆小学校沿革史(府立資料館蔵)によると現淀川の河川域のなかです。」 (①118頁) 〔関係者〕 地域で開校前に寺子屋における教育を実施していた，山田梅東，谷村光訓，久富元秀(①117頁)

三．今後の課題の考察と展望

さて、データベースを概観してみると、「不明」、もしくは記述がない項目・内容が多々あることに気がつくであろう。具体的に述べると、「郡中小学校名」と「開校年月日」の項目、「開校の経緯」に関する内容以外には、学校ごとの相違、及び量の多寡はあれ、情報に欠落がある状況を見て取れる。

さらに、ここで同時に注意をしておきたいのが、その欠落が存在する項目については、地域史の側面から事実に迫っていける可能性が認められる点である。「創設経費」や「建物」の用意、さらには「組合」や「本校・分校」などの協力関係は、地域の「関係者」が主体となり、「開校前の歴史」の素地の上に整備・構築がなされた営みである、と捉えることができる。そして、ここで主体と素地になった「関係者」や「開校前の歴史」は、まさに地域史の領域で史料の発掘と整理、研究の実践が行われているトピックと言える。

地域史資料である郡誌及び村誌について、本論考では学校記念誌に焦点を当てる関係から一部の活用と成果への反映にとどまったが、これらを調査することで、郡中小学校創設の背景と当該地域の社会状況、及び有力な関係者となった人物や積極的に動いた村などが判明するかもしれず、その村単位でまとめられた文書群や家・個人ごとに整理された文書群を詳細に調査することによって、欠落している情報を埋めていくことが可能となるかもしれない。その際このデータベースは、「どの部分が欠落しており、どの部分から調査を開始すれば良いのか」を示す、一つの導きの糸となるだろう。

かたや、すでにデータベース上で記述がなされている項目についても、歴史的にみると注意や再検討が必要な内容が含まれている点には、十分に自覚的にならなければならない。これは一部の記載内容の中には創設状況等の歴史的事実に対し典拠が明示されていない場合があることや、また、既存の法令や行政令、府内や他村等の地域史と齟齬が見られる場合があることに起因する。例えば、ときおり登場する就学率に関する記述については、記念誌の該当ページ数をみてみると明らかとなるものの、なぜその数字となったのか、根拠が示されない事例も散見される。また、「開校年月日」についても、「開校の経緯」の内容を見ているとしばしば確認されるが、些か情報に曖昧さが漂う、つまり記念誌の執筆・編集者自身が、根拠に十二分な確信を持てていないケースも存在するのである。

このようなことが見受けられる要因として、学校記念誌の資料としての性格を、十分に認識しておく必要がある。そもそも学校記念誌は、史実の考証を一義的に目指して執筆、編纂なされるものでは必ずしもなく、歴史の調査や紹介を一つの手段として、あくまで学校を「記念」することを目指した資料である。こうした性格が、記念誌作成時の学校・地域の様子を生き生きと現代に伝えてくれるという、他にない資料としての特質・価値を学校記念誌にもたらしていると言える。しかし、こうした性格が、結果として記念誌のなかから歴史的事項の調査と紹介に労力とスペースを割く余地を減らしている事実にもまた、目を向けなければならない。もとより、先述のように学校記念誌が史実の考証を第一の目標としていない以上、この学校記念誌の性格は本来必ずしも焦点化すべき事柄とは言えないだろう。しかし、もし記念誌の歴史に関する記述に依拠する場合、または各郡中小学校を取り巻いて研究・調査のとっかかりが学校記念誌以外になかなか見当たらない現状においては、この性格に目を向けておくことは大切な意味を持つと言える。

その意味で、すでにデータベース上に記述できた情報についても、絶えずそうした考証の意識を持って接することが、郡中小学校史研究の進展にとって重要な心構えとなるであろう。その考証の方途としては、例えば「開校年月日」の場合、行政史料の側面、つまり各学校の開校届などの調査を想定することができる。

またこれらの情報について、今までの地域史研究において、教育や公共事業の歴史的事実が調査されてきたことから、地域史に関する各種の文書史料の調査を通しても、修正すべき点や新たな事実の発見が期待される。

そして、そうした調査を実施する場面においても、このデータベースは多様な観点から研究に示唆を与えることができると考えている。例えば、京都府下の郡部の各地域では小学校を開校及び運営体制を整備する際に、単独の村でまかなった所もある一方で、組合学校の形態をとった所も多数あることは、表のとおり

であるが、そうなると運営範囲の規模と財政事情、及び学校整備の性質（建物や立地の情報）との関係がどのようなものであったかということ点が、郡中小学校の実態を調査する際には問題になるところである。この点に対しては、データベースを参照すれば、そうした情報が各学校でどのように把握されているか、まずは一覧の形式で認識することが可能となり、そのうえで改めて検証すべき事柄、及び新たに調査しなければならない項目を、すぐに把握することができるだろう。

また、各記念誌を見ると、すでにいくつかの学校で、地域の史料を発掘・活用し、その経緯の記述を試みている先例が確認でき、本データベースでも、「開校の経緯」等の項目で、それらの調査方法のありようを一部記述している。こうした先例はいわば、「開校の経緯」を明らかにする際に、どのような史料を探し出せば良いのか、言い換えると郡中小学校の創設過程を明示したり、語り継がれている情報を精査したりする際には、図書館や公文書館、さらには地域というフィールドで、どのような種類の史料を収集すれば良いのか、一つの展望を示してくれていると言えよう。郡中小学校の歴史をより実り豊かに記述していくためには、当然のことながら地域に眠る史料の発掘が必要になるが、そのためにはまず「どのような史料が重要な意味を持つのか」、多くの人が共通認識を持たなければならない。このデータベースは、その段階に至るための契機となりえる、様々な史資料に関する情報を内包しているのである。

しかし、最後に触れておかなければならないのは、ここまでで示した今後の課題としての郡中小学校に関する調査・研究の営みが、このデータベースの情報や形式に大きな改変の可能性をもたらすものである点、言い換えれば、郡中小学校の調査・研究が進めば進むほど、修正を余儀なくされる情報の量が増加し、その意味でこのデータベースの存在意義が、その進展の分だけ疑われかねない点についてである。例えば、今回のデータベースには、明治一二（一八七九）年一一月一日に開校した「田中小学校」（現養正小学校）は含まれていない。「一」で本研究ノートは、郡中小学校を明治四（一八七一）年一一月から明治一二（一八七九）年三月一四日までに開校・創立・設立された学校と定義したが、養正小学校の記念誌を確認する限りでは、田中小学校が京都で郡区町村編制法が施行される以前から、戸籍区下の制度との兼ね合いで学校の開校の準備を長年してきた事実を発見できなかったからである。ただ、今後の調査でこうした経緯が判明したとすれば、当然のことながら田中小学校も郡中小学校のなかに含むことになるであろうし、その結果新しい学校の情報を大幅に書き加えるという、大きな改変がデータベース上に求められることになるだろう。その意味でこのデータベースは、いまだ未完成という現状にある。郡中小学校の定義もまた、今後の調査で変更があるかもしれない問題の一つである。以後の史料の発掘、及びそれらの史料の読み込みや既存史料の批判、分析によって、郡中小学校の特徴をさらに明らかにできれば、その作業に伴って郡中小学校の定義も変わるというのが、現状の研究段階だからである。

ただ、そもそもデータベースというものが、「コンピュータによる加工や処理を目的として、特定の方針に基づいて組織化された情報ファイル」[七]であるのとともに、「蓄積・検索・更新などに便利なように有機的に整理された情報の集まり」[八]である以上、こうした情報の修正や表の改変という「更新」の作業は、むしろ存在して当然の作業、さらに言えば、積極的に行うのが望ましい作業であると、本論考は想定している。加えて言うと、そうした認識をもつからこそ、本研究ノートでは情報を「データベース」という形で整理し、かつタイトルに「その一」の文言を採用したのであって、今後の課題としてなにより本研究ノートが挙げなければならないのは、このデータベースを絶えず更新し続けることにあると言えるだろう。そして、この課題に取り組み、学校記念誌以外の情報も反映した、より整備されたデータベースの構築を目指していく道筋こそが、郡中小学校研究の進展、つま

七　日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学用語辞典 第5版』丸善出版、二〇二〇年、一六三頁。

八　西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編『岩波国語辞典 第7版 新版』岩波書店、二〇一六年、一〇〇一一〇〇二頁。

り郡中小学校研究の今後の展望を、示しているとは言えないだろうか。その進展を実現するためには、ここまでで考察を行ってきたように、地域史の文書や文献の調査、さらには地域に眠る新たな史料の発掘が、必要不可欠となっていくだろう。そして、迫る郡中小学校創設一五〇周年は、そのための絶好の契機であると考えられる。本データベースは、そうした記念事業を開催し、かつ一五〇周年の記念誌や郷土誌・風土記、さらには同窓会誌を作成する際などに、それら事業を補助する役割も担いうるであろう[九]。そうした活用が新たな事実の発掘、つまりデータベースの更新へと再びつながっていくのであって、当館も実り豊かな郡中小学校研究の進展、さらには各郡中小学校創設一五〇周年のために、調査・研究を継続していく所存である。

九　これまでに作成された学校記念誌を概観していると、作成主体が各地域及び各学校に限られるため、隣接する他地域の情報や、参照すると有益な他地域の史料を視野に入れることが困難な状況にあり、それゆえに考証の限界を迎えてしまう事例を目にすることがあった。本データベースは、各学校の基礎情報を整理するのに有用であるだけにとどまらず、こうした観点からも有益な認識を地域・学校に還元できると想定している。

執筆者紹介（敬称略・掲載順）

村野　正景　　京都府京都文化博物館　学芸員

和崎　光太郎　　東京福祉大学　准教授

林　潤平　　京都市学校歴史博物館　学芸員

小辻　映里　　京都市学校歴史博物館　学芸補助

京都市学校歴史博物館

研究紀要　第八号

令和三（二〇二一）年　六月　発行

編集・発行　京都市学校歴史博物館

京都市下京区御幸町通仏光寺下る

橘町四三七番地